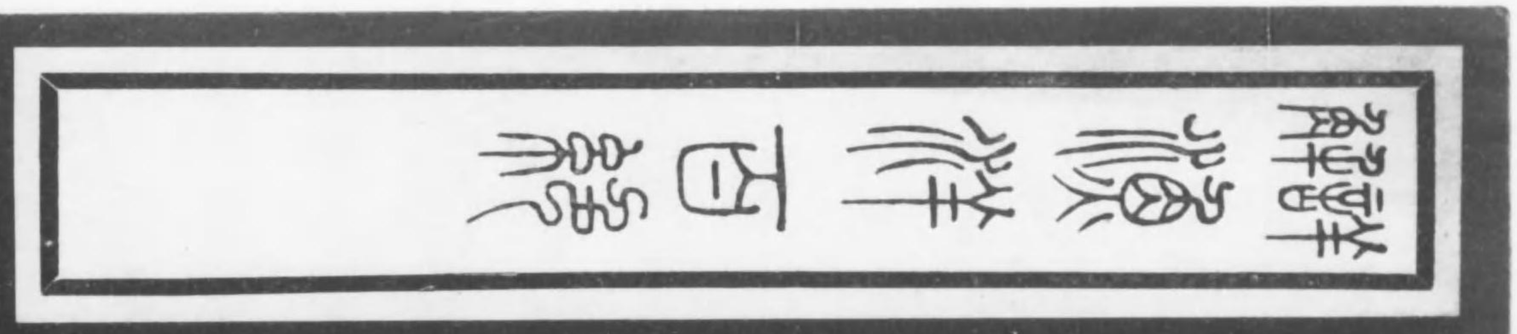

特200
998

詳解 漁洋百絶 卷下

尾張服部轍擔風閲　　桑名逵致民雅堂述

金陵道上

(題意)金陵は江寧府である。卷上十三葉裏建業の條下で說いて置いた。世にいふ所の南京である。是の詩、金陵に行く途上の作である。時に康熙四年乙己。漁洋は三十二歲であつた。

乍疎乍密秧針雨。時去時來船趕風。五月行人。秫陵去。一江風雨晝濛濛。

(字解)乍は忽也、猝也と註して、たちまちと訓む。秧針とは稻の苗の細く針

の樣なのをいふ。蜀では、稻の初めに生ずる時に、農人が相語つて、稻針が出るといふ。楊愼の古今諺に「秧苗が水に針すれば、庄家が早起きする」といつてある。又、黃魯直の詩に、秧針青刺水。麥浪綠翻雲。といふがある。船趕風は、謂はゆる季候風で、梅雨過に來るものである。蘇軾の船趕風詩の引に云ふ「吳中では、梅雨が既に過ぎると、颯然たる清風が旬に彌る。歲々此ういふ樣であるが、湖人は之を船趕風と謂ふ。是の時、海船が初めて回つて來るといふ。此の風が海上から、船と俱に至るから、かく云ふ」とある。四民月令に「諺に船趕の風雲起れば、旱魃が深く懷喜する」とある。卽ち梅雨が了つて、清風が續くから、旱の神が喜ぶのである。秣陵の金陵のことであるは、前に既に說いておいた。

(意義)乍ち疎らに、乍ち細かく、苗の針の樣な芽に、雨が降り注ぎ、季節を定めて時に去り時に來る所の船趕の風が起る。此の二句は對句であつて、此の詩は卽ち前對格となつてゐる。五月に旅人である自分が秣陵に向つて去れば、江一面の風雨が、晝も濛々として暗いと、第一句の雨、第二句の風の字を集めて來て、此の一句を合せ結んでゐる。

(評說)途上見る所を能く寫し出した、極めて佳い作である。私は此の詩に五月行人の字を用ひてある所から、此の詩を讀む每に、併せて黃華田の泰安道中山行の詩に、行人五月出東蒙。とあるを憶ひ出すことである。詩の趣は異つてゐるが、因に茲に記して置かう。

倡條冶葉拂青驄。帽影鞭絲困午風。十里棗花香不斷。行人五月出東蒙。

花朝道中有感寄陳其年

(題意)花朝といふは、俗に傳ふる百花生日である。其の時日は區々で一定しない。翰墨記には「洛陽の風俗、二月二日を以て花朝の節となし、士庶が遊玩する。又挑菜の節とする」とあり、誠齋詩話には「東京は二月十二日を花朝といひ、撲蝶の會をする」といひ、又、崑新合志にも「十二日を

百花生日となし、閨中の女郎が、五色の綵繪を剪り、花の枝の上に黏(ヅケ)る。之を賞紅と謂ふ。虎邱では、花神廟で、牲(イケニヘ)を繫ち、樂を獻じて、仙誕を祝する。之を花朝といふ」と謂つてゐるが、今は大抵此の十二日を用ひてゐる。提要錄、風土記、熙朝樂事、西湖遊覽志等は、何れも二月十五日を花朝としてゐる。且し風土記には「浙湖の風俗に言ふ、春の序が正に中して、百花が競うて發く。乃ち遊賞の時である。宋の條制に、守土の官が、花朝の日に於て、郊に出て農を勸める」とあり、熙朝樂事、西湖遊覽志には「蓋し花朝月夕は世俗の恒の言葉で、二八の兩月は春秋の中であるから、それで二月を花朝とし、八月を月夕とするのだ」とある。俞曲園は春在堂隨筆に於て「此の說、殊に理がある」といつてゐる。陳其年は、名は維崧といひ、其年は其の字で、迦陵と號してゐる。江南宜興縣の人で、少くして諸生で盛名を負うてゐた。貌は清臞で、鬚が多かつたから、時に陳髯と稱せられた。王西樵が謂つた言葉に「陳其年は背が低くて髯がある。邊幅を修めないが、吾之れに對すれば、祇〻其の嫵媚で、愛すべきを覺える。伊の胸中に數千卷の書があるからだ」と。康熙中に、鴻博に擧げられ、檢討を授けられて、明史を修するに與かつたが、越えて四年で卒した。其の駢體文は才力が富健であつて、汪鈍翁は「開寶以後七百年の間に、此等の作は無い」と謂つた。詞が尤も淩厲光怪で、變化すること神の若くであつた。湖海樓詩集、迦陵文集、儷體文、迦陵詞がある。此の詩は原と三首あつて、康熙五年丙午、漁洋三十三歲の作であるが、漁洋は此の前々年、卽ち康熙三年甲辰の年には、紅橋で修禊して、冶春絕句を賦し、其年が其の後に題して、官舫銀鐙賦、冶春云々の詩を作り、前四年乙巳の上巳には、漁洋、其年打揃うて、邵潛夫と俱に、冒辟疆に招かれて、水繪園で修禊して、漁洋は古詩八首を詠じた。其の中に、西豪里中訪老友、況復陳生與我厚、辟疆園敞羅群賢、大兒小兒唱銅斗、などの句がある。此の詩は是等の事を感じて其年に寄せたものである。元來其年は深く

辟疆に知られた人で、迦陵外傳といふものには「辟疆は迦陵を招いて、書を家に讀ませたが、其の才の雋なるを愛し、爲めに聲伎を進めて、其の意に適はせた。歌者の楊枝が曲を度し、紫雲が簫を吹いた。十年の間に迦陵の詩文は益〻進んだ」とある。今此には三首中の末の一首を講するが、句中に此等の事が出てゐるから、其の概略を此に述べておく。

風俗淮南古禁煙紅橋解禊雨晴天酒徒散盡楊枝別說著花朝一惘然。

(字解)風俗とは土地のならはし。詳しくいへば上の行ふを風といひ、下の習ふを俗といふ。淮南は淮水の南を謂ふので、西は漢に抵り、南は江に據る間の地である。禁煙の事は、卷上三十七葉表で、又紅橋は卷上七十四葉表で、詳說しておいた。解禊は、妖邪を解き祓ふ爲に、河に趣いて水で身體を淨めること、とである。初めは三月の上旬の巳の日に行つたから、其の日を上巳と謂つたが、魏の頃から三月三日を用ふることゝなり、猶上巳と稱してゐるので、巳の日ではなくなつたのだといふ。然し十二支の巳は、若し朔が午か未であると、上旬に巳の日は無い事になる。故に宋書禮志には、十干の己(ツチノト)であつて、上辛、上丁などの例の樣であつたが、後に誤つて巳となつたんであると謂つてゐる。兎に角、今は巳の日でもなく、己の日でもなく、只三月の三日を用ひて上巳と謂つてゐる。雨晴天は、雨が降つたり、晴れたりする天候をいふ。酒徒は酒呑み仲間。楊枝は徐釚の本事詩の註に「冒辟疆の歌童である」といつてある。尙、其年の贈別楊枝の長相思の一闋が載せてある。曰く、

漱金巵。閣金巵。不是檐前抵死辭。今宵是別離。　撚楊枝。問楊枝。花萼樓前跪地垂。休忘初種時。

然して龔芝麓が之に和してゐるから、併せて茲に掲げよう。

倒芳巵。訴芳巵。縱不相憐也莫辭。歡多那易離。　惱楊枝。惜楊枝。對此青青

我鬢絲。腰肢問小時。

說著の著は語助辭で、說著は說くといふ程の意。惘然は志を失ふ貌。俗にいふうつとりとする事。

(意義)土地のならはしとして、淮南は今も古の如く煙を禁じてゐる。曾て紅橋に修禊をしたのは、雨が降つたり晴れたりする天氣の時であつた。其の當時の酒呑み仲間は散り盡して仕舞ひ、又始終宴に陪してゐた歌伎楊枝とは別れて仕舞つた。今復た花朝に逢つて、此等當時の愉快なり し事を說き出せは、一に心もうつとりとする程である。

(評說)此の詩は前に言つた通り、原作は三首ある。其の第一首は、花朝道中の眼前の景色を寫し、第二首は、其年の尙ほ水繪園に在つて、前歡を續けてゐる事を說き、第三首卽ち此の詩は、自分が揚州を去る途上に、前遊を追懷して、勝事の再びし難きを歎じたのである。かく幾首も連作する場合には、必ず各首に次第順序があつて、其の數首を通覽した上に於て、更に一篇の如く整然たる關係が無ければならぬ。此の三首は實に連作の適例であるから、第一二首をも併せて茲に揭げておく。

漁陽三月無芳草。客思離情不奈何。此日淮南好天氣。青驄尾蘸鴨頭波。

三月嬉春射雉城。鉢池新水穀紋生。紫雲低唱靈雛拍。愛忍春寒坐到明。

なほ第三首に付て會心偶筆は云ふ「諷詠一過するに、たゞ意味の深長なるを覺える」と。

胡元潤畫

(題意)胡元潤といふは、名を玉昆といひ、元潤は其の字で、一字を褐公といひ、金陵の人である。其の父は名を宗智、字を雪村といつて、是亦畫を善くしたから、玉昆は家法を師としたが、其の性が孤僻であつたから、畫を作つても亦之の如くで、筆を用ひ色を設くるに、好んで縹緲虛無の態をなしたから、咫尺の間か、萬里も遙かなやうに思はれ、世に逸品

と稱せられてゐる。此の詩は其の畫に題したものである。

白波青嶂非人境憶住江南過五年今日長征老鞍馬菰蒲春雨夢江天

（字解）青嶂の嶂は、山の峰の屏障の樣になつてゐるをいふ。江南といふは、揚子江の南をいふのである。併し清初に江南省といふを置いたのは、今の江蘇、安徽二省を管轄したので、江南とは曰ふものゝ、實は江北の地をも兼ねてゐた。康熙の時に、之を分けて江蘇、安徽二省とし、江南布政使といふものを置いて、江、揚、淮、徐、通、海の六屬を領せしめた。漁洋は揚州司理で、揚子江の北であつたが、矢張り江南の中に隷屬してゐた。五年とは、順治十七年庚子から、康熙三年甲辰まで五年で、漁洋が揚州司理となつてゐた間をいふ。前に平山堂下五清明とあつたのも亦之と同じいのである。老は久しく年月を經たのをいふが、其の中に鋭氣の盡きた意を含めて見る。菰蒲の菰はマコモ、蒲は香蒲でガマのこと。菰蒲は共に池沼などの淺水の中に生ずる多年生の草本である。

（意義）圖中に描き出された景色は、白き波が立ち騷ぎ、青き山が聳えてゐる所で、實に人境ではなく、全く仙寰である。此の圖に對して憶ひ起すは、江南に住して五年を過ぎたことであつて、圖中の樣な勝景を領略してゐた事であつた。然るに今日は已に江南を去つて長途の旅をなし、鞍を置いた馬の上に疲れて仕舞つて、菰蒲などの生ひ茂れる所に、春雨のそぼ〳〵と降る江天の景色などは、唯空しく夢に見て戀ひ慕うてゐるのみである。

（評説）畫を見るにつけて、自己の感想を工に言ひ表してゐる。眞に作者の面目が、二十八字中に躍如としてゐる。會心偶筆は、其の句法を說き、且つ詩意を敷衍して云ふ「首句は畫を寫してをり、以下は皆、己の意を寫してゐる。曾て江南に在つて此の境の中に住むこと五年の久しきに及んだ

が、今日は鞍馬で風塵の間に僕々としてゐて、再び江天の美景を睹んと思つても、了に出來得ない。然るに此の畫を見て、忽ち夢中に再び到れる如くである」と。

趙北口見秋柳感成

〔自註〕順治乙未、予上公車、與家兄吏部、傅彤臣御史、賦柳枝詞于此、忽忽十餘年矣。堤柳婆娑、無復曩時、不勝攀枝折條之感、因賦是詩。

（題意）趙北口といふは、直隸任邱縣の西北に在る。高陽河が高陽縣から來て、趙堡口を經てゐるのであるが、漢の時の民謠に、燕南垂、趙北際、中央不合大如礪、惟有此中可避世、と云つたので、趙北の名が始めて此に昉まつたといふ。自註の順治乙未は、順治十二年で、漁洋二十二歲の時である。公車は官の車をいふ。漢の時に、徵に應じて京に上る者は、皆官から車を給して、驛繼ぎに送つたものである。古は之を傳に乘ると謂つた。是よりして清の朝に至つても、選拔せられて京に入つて試驗を受けるものを公車に上るといつたのである。家兄吏部は伯兄の西樵をいふので、西樵は此の歲殿試を受ける爲に、漁洋と共に京に入り、及第して進士となり、吏部考功員外郎に官したから、略して吏部といつたのである。傅彤臣御史は、名は扆、字は蘭生で、彤臣は其の一字である。別に麗農と號した。漁洋と同鄉の山東新城の人である。西樵と同じく此の十二年に進士に及第して、江西道監察御史に官したから、御史といつたのである。生れつき至孝であつて、親が老いたといふので、歸り養つた。奏疏、詩文集、詩話等の書がある。柳枝詞といふは、白樂天に昉まつたのである。樂天の姬人の樊素といふは善く歌ひ、小蠻といふは善く舞つた。嘗て詩を爲つて曰ふ、櫻桃樊素口、楊柳小蠻腰、と。年が既に高く邁つて、小蠻は方に豐艶になつたから、因つて楊柳詞を作つて意を託せて曰く、

一樹春風萬萬枝、嫩於金色軟於絲、永豐坊裏東南角、盡日無人屬阿誰。

と宣宗の朝になつて、國樂で是の詞を唱へたから、帝が「是は誰の詞で、永豐といふは何處に在るか」と問はれた。左右の者が具さに之に對へたので、遂に使をやつて、命じて永豐の柳の兩枝を禁中に植ゑしめられた。樂天は天子が名を知つて下さつた上に、風雅を好まるゝ事に感じて、又詩一章を作つた。其の末句に云ふ、定知玄象今春後、柳宿光中添二兩星一。と。後、樂天は更に八首を作つた中に云ふ、古歌舊曲君休聽、聽取新翻楊柳枝。と。一時傳唱せられて、此の體に倣うて作る者が繼いて出た。劉禹錫の詞にも、諸君莫奏前朝曲、聽唱新翻楊柳枝。とあつて洛下の新聲となつたのである。漁洋が前年に此の地で作つた楊柳詞は、

金粉初匀柳萬條。樂游原下索春饒。銷魂橋上銷魂樹。不到飛花魂亦銷。

といふのである。乃ち柳枝の詩を此處で賦したが、忽々として乙未から今年丙午まで十餘年を過ぎ去つた。堤の柳は婆娑として舞つてゐるが復た曩の時の如うではない。枝を攀ぢ條を折つて、客を送つた事

などを想ひ起して感慨に堪へず、此の詩を賦したと斷り書きをしたのである。原二首あるが今は後の一首を講ずる。

六載隋堤送客驂。樹猶如此我何堪。銷魂橋上重相見。一樹依依似漢南。

（字解）六載とは、漁洋が、順治十七年庚子に、揚州府推官として任に就いてから、康熙三年甲辰まで五年にして考が滿ちて、禮部主客司主事に內遷し、翌四年乙巳の春、公事により如皇に行き、事終りて全く吏事を謝し、五月、金陵に行き、七月、諸名士に別れて北上したので、前後丁度六年になるから、一醉紅橋便六年。等の句もある。隋堤とは、隋の煬帝が、板渚から黃河の水を引いて淮に達せしめて、之を御河と謂ひ、河畔に柳の樹を植ゑ、名づけて隋堤といつた。客驂の驂は一つの車に駕する三匹の馬をいふのであるが、此處は征驂などの如く、旅立つ車につける馬といふ程の事で

（自註）予舊賦柳枝。有句云。銷魂橋上銷魂樹。不到飛花魂亦銷。

ある。樹猶如此我何堪は、晉の桓溫が、江陵から北征する時に、金陵を通り、少うして瑯琊を爲めてゐた時に植ゑた所の柳が、皆已に十圍になつてゐたので、慨然として歎いて曰ふ「木すら猶ほ此くの如くである。人が何を以て堪へられよう」と、枝を攀ぢ條を扶けて、泫然として涕を流したといふ事である。此に十圍といふ圍は五寸である。手の指で物を度るときに、拇指の端から中指の端までの長さを一圍といふ。十圍は指で十杯である。桓溫の語は、種々のものに引用せられてゐる。庾信の枯樹賦には、昔年楊柳。依依漢南。今看搖落。悽悽江潭。樹猶如此。人何以堪。といひ、又歐陽修の詩には、人昔共游今孰在。樹猶如此我何堪といつてある。漁洋も之を其の儘用ひたのである。銷魂橋といふは、開元天寶遺事に「長安の東の灞陵に橋があつて、來るを迎へ去るを送るに、皆此の橋に至つて離別の地としたから、人が呼んで銷魂橋となした」とある。依依は初めて枝の出るときに、柔弱でなよ〳〵としてゐるのをいふ。漢南は爾雅に「荆州を漢南と曰ふ」とあり、李巡の説に、漢南は其の氣が燥剛で、性が彊梁であるから荆といふのだと。荆は彊也と注する。荆州は宋のときに江陵府といひ、今の江陵縣が舊の府治である。桓溫は江陵からして北伐したのである。

(意義)六年の間揚州に居て、隋堤で柳の枝を折つて、旅立つ人の馬の鼻向けをした事であるが、今は其の柳も已に昔の姿ではなく、彼の桓溫の曰つた通り、樹猶ほ此くの如しであつて、我が年老いたる事を思へば、實に感慨に堪へられない。銷魂橋の上りで、重ねて往時の柳を見れば、たゞ一樹のみなよ〳〵として、昔の桓溫の時のものに似てゐる。

(詳説)明の高青邱の秋柳の詩に、

欲挽長條已不堪。都門無復舊毿毿。此時愁殺桓司馬。暮雨秋風滿漢南。

といふのがあるが蓋し此の詩の粉本であらう。

尙ほ此の樹猶如此我何堪の七字は、古人の語を用ひて、其の儘一句としたる所が頗る面白いけれども、漁洋は屢々之を用ひてゐるから、甚だ慊焉

たる所がある。康熙三十五年丙子、漁洋が六十三歳の時の作に、灞橋柳といふ題で、

灞橋楊柳碧毿毿。曾送征人去漢南。今日攀條燋悴絶。樹猶如此我何堪。

といつてゐる。通首能く整つて、佳句ではあるが、其の中の一句は、今、解釋した作と、全く複つてゐるのみならず、共に漢南の字を用ひてゐて、其の意想の上に、少しも新しい所を見る事が出來ぬは、正しく是れ格調を重んずる人の通弊に陷つたのである。實に此の點は漁洋を學ぶものゝ注意すべき所で、調子の善い樣にとのみ苦心すれば、遂には何時も同じ樣な事のみを繰返し、甚だしきに至りては、空疎散漫に流れて仕舞ふのである。吳々も警戒してをらねばならぬ。

樹猶如此我何堪。の句につき更に一事を書き添へよう。古來此の句を對聯にしたものが少くない。前に擧げた歐陽修の、人皆共遊今孰在。樹猶如此我何堪。の外に、王阮の、天氣未佳宜且住。樹猶如此我何堪。といふのもあるが、黃莘田の一聯が面白い。曰く、少不及人今漸老。樹猶如此我何堪。と。前の句は、春秋の時、燭之武が鄭公に對へた、臣之壯也猶不如人。今老矣無能爲也已。といふ語を取つたものである。

宗梅岑畫紅橋小景見寄。賦懷。

（題意）宗梅岑、名は元鼎、字は定九、梅岑は其の號で、別に小香居士と號してゐた。江南江都の人で、隱居して仕へず、晩に廣陵の東原に居た。性、梅花を嗜んだが、堂に古梅が一株あつたから、時の人が宗郎の梅と謂つてゐた。善く山水を畫き、詩に工であつた。徐釚の本事詩の註に云ふ「江濱に憔悴して、戶を扶へて高詠し、新柳堂を卜築した。竹軒梅屋が數間あつて、中に殘書百卷を藏し、鉤纂して午夜に迄るも息まぬ。鴻妻と驥子とで、衡門蕭然たるものであつた。鄒訏士が嘗て贈るに詩を以てし

六年五到廣陵城、珍重宗資送客情。江北江南無限恨。花時細雨聽流鶯。

と。宗、又、自ら賣花老人傳を著した。其の略に云ふ。賣花老人は何許の人なるかを知らぬ。家して維揚の瓊花觀の後に住んでゐる。茅屋は三間で、傍に小閣があり、室の中の茗椀、丹竈、經案、繩牀は、皆楚々として明潔である。柴門の內は方で、廣さが二畝ある。手づから草花數十種を藝ゑ、晨に花を擔うて紅橋に向ひ、坐して賣つた。文人墨客に遇へば、卽ち花を贈つて詩に換へて歸り、或は俗子の之を購ふに遇へば、必ず其の價を數倍にする。錢を得れば、酒を沽ひ醉を盡くす。餘れば之を乞兒に散ずる。市人が笑つて花顚とした」と。其の詩は風調を主とし、善く草穀の輯めた才調集を學んでゐると、漁洋は稱してゐる。芙蓉齋、新柳堂集がある。其の佳句は七言では、來逢鶯語詩從作、去被人留酒重釀、雙柑香濺佳人手、半臂寒添酒客肩。の如きがあり、又絕句にも佳作があるが、今一首だけを摘めば、揚子江の詩に、

帆去天涯勢不回。龍節何惜渡江來。香車若到長干路。後主荒宮花又開。

といふのがある。本詩は、梅宗岑が紅橋の小景を畫いて寄せたから、懷を賦して酬いたのである。漁洋詩集には、題の小景の字の下に、于便面の三字があつて、扇子に畫いて寄せられたものであることが分る。且つ詩數も三首あるが、精華錄には二首を取つてゐる。今、後の一首を拔いて解する。

紅橋秋柳最多情。露葉煙條遠恨生。好在東原。舊居士。雨窗著意畫蕪城。

(字解)紅橋は地名。上卷七十四葉表で詳說して置いた。露葉は露に霑へる葉。煙條は煙を帶んだ枝。好在は、我が大典は「猶ほ無恙と言ふが如し」といひ、朱鶴齡は慰問の詞だと曰つてゐる。卽ち好在なれと訓み、無事である樣にと祈り慰めるのである。東原は廣陵の內の東原で、宗梅岑の住所で

ある。舊居士は舊くから仕へずしてゐる人のことで、東原に隱居してゐる宗梅岑をいふ。著意は猶ほ注意と言ふが如く、氣を附けること。蕪城は江蘇江都縣の東北に在る。卽ち廣陵の故城である。宋の竟陵王誕の亂の後に、城邑が荒墟となつたから、鮑照が蕪城賦を作つて之を傷んだので、遂に名が付いた。廣陵は江都縣、卽ち揚州で、紅橋は城の西北二里に在る。

(意義)紅橋の秋柳は、最も人の心を動かす事が多い。露に沾へる葉、煙を帶べる枝を見ては、別を送りし時の事などを想ひ浮べて、遠く離れてゐるを恨む心が生じて來る。無事で居られよ、東原の舊き居士宗定九子よ。君が雨降る窗に、注意して畫いて吳れられた蕪城の景色は、一入に多情で、我が遠く別れてゐる恨をして堪へざらしめることである。

(評說)宗梅岑を懷ふ意を柳に寄せて、情緒の纏綿たるものがある。

題文與也爲梁曰緝畫江村讀書圖

(題意)文與也は、名を點といひ、與也は字で、南雲山樵と號してゐた。長洲の人で、徵明の裔孫である。國難に遭うて家は破れ、仕へずして力を詩や古文辭に肆にし、兼ねて書畫を善くした。人となり沖澹清介で、聞譽を求めず、嘗ては城中の慧慶寺に舍つて、書畫を賣つて衣食を給してゐたが、人が多くの金で以て迫り促すことは出來なかつた。山水の用筆は細秀で、點染が多く、暈潤迷離である。蓋し墨を以て勝つてゐるのだ。兼ねて人物を善くし、尤も松竹小品に長じてゐて、筆墨が極めて文雅であつた。松身は點苔を好んだから、時の人が戲れて「文點の松は、文也文、點也點だ」と曰つた。康熙四十三年、竹塢の隱居で死んだ。年六十三。

南雲詩文集といふがある。佳句あり云ふ、

青山如故人。江水似美酒。今日重相逢。把酒對良友。

梁曰緝は、名は熙で、曰緝は字である。晳次と號した。始祖が明の初めに、河南の鄢陵に徙つて遂に家した。順治三年の鄉試に擧げられ、又十年

に進士となり、出でゝ西安の咸寧に知となつたが、誓つて一錢をも自ら汚すことなく、治行が三輔に冠してゐた。因つて行取せられて入つて雲南道監察御史となつた。澹泊で寧靜な人で、直より下れば、輙ち香を焚き地を掃うて、晏坐すること終日で、退院の僧の樣であつた。內典に耽つて、楞嚴に於て尤も了悟つてゐて、居然老爛の頭陀であつた。此の詩は文與也が、梁曰緝の爲に江村讀書圖を畫いたので、漁洋が之に題したのである。康熙七年漁洋三十五歲の作である。漁洋詩集の原作は四首あるが、精華錄には第二、第四を取つてをり、茲には其の第二のみを講ずる。

門外漁航箇箇輕、春流滑笏縠紋平、江花江鳥不相識、寫向丹青俱眼明。

(字解)漁航の航は船のことで、漁航はすなはち、すな捕りする船である。箇は一つ〳〵。滑笏は音がカツコツで、元稹の詩に、正面偸匀光滑笏、緩行輕踏皺紋波とあり、會心偶筆に水光と注してある。縠紋は縮緬の樣に縐んだ紋をいふので、水面の細かい波の形容である。丹青は赤や青の色を使つて描いた繪をいふ。

(意義)門外の漁舟は、一箇々々輕やかに浮んでをり、春の流はきら〳〵と光つて、細波は縮の樣な紋をなして平かに流れてゐる。江に咲いた花、江に遊んでゐる鳥は、何事も自らは識らないでゐるけれども、寫して畫中に入るれば、俱に眼も醒める樣に明かである。

(評說)江村讀書圖に題したのであるが、此の一首は專ら江村を寫してゐる。されば此の一首だけで謂へば、僅に門外の二字により、江畔に家あることが知られ、又眼明の二字によりて、其處に人のあることが想像せらるゝに止まる。然して題中の讀書を寫すことは、他の諸作が之に任じてゐるのである。

漁洋の分甘餘話に云ふ「長洲の文與也（點）は、衡山の裔孫で、畫に家法がある。常（カツ）て鄢陵の梁曰緝（熙）の爲に江村讀書圖を作つた。汪苕文（琬）が詩を題していふ、鄢陵野色平如掌。也有江南此景無。と。余は之を見て曰ふ、吳子は左樣に輕薄かと」是は鄢陵には圖の樣な景色は無いに、輕々しくも箇樣なものを畫き出したといふのだ。「苕文笑つて曰く、子、多くを言ふな。行く〳〵は子の上にも及ばうとするのだと、そこで一絶を賦して云ふ、

　　髣髴春江綠樹陰。幾回拖卷幾沉吟。江南與汝干何事。賦得愁心爾許深。

と。余の詩に、江花江鳥不相識。寫向丹青俱眼明。の句があるから云つたのだ」と。言ふ意は、江花江鳥は相識らざれども、寫して丹青に向へば俱に眼が明かであるなどゝ、愁心の非常に深き樣を賦し得てゐるが、一體江南は汝と如何なる關係があるか。何等關係も無きに、かゝる荒唐なことを謂つてゐるといふのである。

竹枝送陸氷修

（題意）竹枝のことは、卷上六十五葉で詳說しておいた。陸氷修は、名を嘉淑といひ、氷修は字で、射山とも號し、又辛齋とも號して、浙江海寧の人である。明の嘉興府の學生で、鴻博に薦められたが起たなかつた。情を崇うし跡を遠くして、高く酣しみ長く謠つてゐた。晩年には身を人海に藏したけれども、青蓮は泥に在りて、心は終に染まなかつた。查初白編修は其の女壻なので、少くして辛齋に從ひ學び、詩は其の指圖を受けたのである。辛齋遺稿といふがある。佳句に、但數舊人如落葉。卽看我輩亦晨星。とか、劉郎前度身猶在。杜牧三生事悄然。などゝいふのがある。漁洋の此の詩は、竹枝詞を作つて、辛齋の去るを送つたので多分辛齋が鄉里浙江の海寧に歸つた時の事であらう。原集には三首ある。

北人不識竹枝歌。沙磧春深牧駱駝。南人苦憶江南好。明鏡夾城春始波。

(字解)竹枝歌のことは、前に既に詳説しておいたのであるが、劉禹錫が沅湘に在つて作つた新辭は、之を知つておく必要があるから、茲に其の一首だけを掲げやう。

白帝城頭春草生。白鹽山下蜀江清。南人上來歌一曲。北人莫上動鄕情。

乃ち漁洋が北人、南人と使つたのは、此の辭から來たのである。沙磧は沙漠をいふ。沙原の廣漠たるをいふので、漢以前は漠といひ、漢以後は磧といふ。苦はねんごろと訓む。切心の辭である。憶江南好、といふは、江南の好きを憶ふといふのではあるが、曲調に望江南といふのがあり、憶江南ともいひ、江南好ともいつて、隋の煬帝の作つたのだといはれてゐるが、之をそれとなしに用ひたのである。今、憶江南の、白樂天の作の中、二首を茲に掲げよう。

江南好。風景舊曾諳。日出江花紅勝火。春來江水綠如藍。能不憶江南。

江南憶。最憶是杭州。山寺月中尋桂子。郡亭枕上看潮頭。何日更重遊。

陸氷修の歸つて行く海寧は、清の時分は浙江の杭州府に屬してゐたので、此の「江南好し。風景舊と曾て諳んず」とか「江南を憶ふ。最も憶ふは是杭州」などゝある語を利かせたのである。

(意義)北人は、南方の巴歈あたりから出た竹枝歌は識らないが、廣々とした沙漠も、春が深うなつて草が生えて來たから、駱駝を牧してゐる南人は切に江南の好きを憶ふ。明鏡の如く澄み渡つた水が城を夾んで、春に入つて波立つてゐる。君の歸り行く先は、かく好き處なれば、定めし樂しい事であらう。我は北方に留まれば、春とはいへど寂しい事であるから、一入君を思ふの情に堪へぬ。

(評說)此の詩、整然としてはゐないが、謂はゆる隔句對又は扇對といふ類に屬した者である。尤も絶句の隔句對は、對句の分明ならざるを要するものである。今其の一例を擧ぐれば、唐人の作に次の樣なのがある。

去年花下留連飲。暖日夭桃鶯亂啼。今日江頭容易別。淡烟衰草馬頻嘶。

再爲曰緝題江村圖

(題意)梁曰緝が、文與也に屬して、江村讀書圖を畫かせたのは、自分が京都に在つて、歸田の思の切なるに堪へないで、聊か畫圖に託して情を慰めんとしたのである。漁洋は深く曰緝の心事を察し、再び之に詩を題したのである。

西臺御史馬步工下直垂簾送飛鴻高堂雪霽展圖畫興在春江煙靄中

(字解)西臺といふは、御史臺の事である。唐人は御史の長安に在るものを西臺と謂つた。宋は汴に都したから、洛陽を西京といつて御史臺を置いた。其の後に至つても西京に在るから西臺といつたのである。梁燾は其の時觀察御史であつたから西臺御史といつたのである馬步工といふは故事がある。漢の鮑宣、宣の子永、永の子昱と三代皆司隷となり、一つ驄馬に乘つたから、京師の人が歌つて曰ふ、鮑氏驄。三人司隷再入公。馬雖瘦。行步工。と。之を取つて馬步工と用ひた。下直は直よりさがる事で、朝廷から家に退いたのをいふ。送飛鴻は、嵇康の詩に、手揮五絃目送飛鴻。とある如く、送は目送の意で、見送ることである。鴻雁は故郷の信を傳へ來るものであるから、之を目送するは、思郷の情に堪へないのである。煙靄はけむり、もや。

(意義)西臺御史である梁曰緝の、日々出勤する馬の步は工なものであるが、朝より退れば、自分の居間に簾を垂れて、空しく空飛ぶ雁を眺めてゐるは、故郷を思ふ情の堪へないものがあるからであらう。然し今此の江村讀書圖が出來たことであるから、高堂に在りて、雪の霽れた時に、之を展べて眺めてをれば、身は恰も故郷に還りて、春江の煙靄の棚引ける中に、讀書して居るが如き心地がして、限りなき興味を起す事であらう。

（評説）同じく江村讀書圖に題したのであるが、前篇は畫面に畫き出された所を一覽して、自己の心中に浮び出した所を寫し、此の篇は曰緝の心中を想像して、其の離愁を慰撫すべく、全篇を興の一字に統合して仕舞つてゐる。

題尤展成新樂府二首

（題意）尤展成は、名を侗といひ、初めは字を同人といひ、後に展成と更めた。悔菴と號し、晩に艮齋と號し、又西堂老人と號してゐた。江南長洲の人である。鄉貢を以て、永平推官に叙せられたが、事に坐して降調せられ、康熙八年己未に鴻博に召試せられ、檢討を授けられ、侍講に歷官した。其の詩詞古文は、才が旣に富贍で、復た新警の思が多かつたから、一篇の出る毎に、傳へ誦せられて、人口に遍ねかつた。少うして嘗て、老僧四壁皆畫西廂、却在臨去秋波、悟禪公案、といふ遊戯文字を作つたが、それが流れて禁中に傳はつたのを、世祖が見て、親ら批點を加へ、歎じて眞才子ぢやとせられた。夫から幾許もなく、其の讀離騷の樂府を獻じた者があつたら、帝は之を讀んで善いとして、敎坊の內人をして之を管絃に播こさしめ、宮中の雅樂とせられたから、聞く者が之を豔んだ、後翰林に入つた時は、聖祖が稱して老名士とせられた。性質が和易で、物と忤ふことが無かつた。年八十二の時、猶ほ康强で、善く飯したが、地を官山の陰に相して生壙を築き、自ら之が志を爲り、丙舍を結んで草々山房といつた。死んだ時は八十七であつた。著す所西堂雜俎、艮齋雜記、鶴栖堂文集等凡て百餘卷ある。樂府は、普通、音便でガフと讀む。漢の武帝の時に、郊祀といつて、天子が國都の南郊で天を祭り、始祖をも配せ祭らるゝ所の禮を定められ、之に用ふる歌辭樂律を制定する爲に役所を設けて、李延年といふものを協律都尉とし、司馬相如等數十人を擧げて詩賦を爲らせ、律呂を論じて八音の調を合させた。此の役所

を樂府といふ。蓋し漢の初めに既に此の名稱の役所が有つたのであるが、事業の世に傳はる程のものも無く、遂に廢せられて仕舞つたのである。それが復た此の武帝の時に至り、歌辭と樂律とが睽き離れて仕舞つて、音樂に上せて謠へる樣な歌辭が無くなつて仕舞つたから、之を新に制定する必要を生じて、再び之を設けたのである。是からして、此の樂府で制定した所の歌辭をも樂府といひ、後には歌曲をば皆樂府といふ樣になつた。漢の高祖の大風歌は三侯之章と謂ひ、楚の項羽の垓下歌は力拔山操と謂ひ、其の他鐃歌、鼓吹の如き、凡べて絃管に被らすものは皆樂府を以て名づくるに至つた。然るに南北朝頃に至つては、漢代に制定したものも、次第に滅びて行つて、樂府の題、若くは其の體裁に基づいて作つたもののみとなり、樂に上せて謠ふべき者のみでは無くなつて仕舞つた之を新樂府と稱する。此の新樂府の名が出來たにつき、漢代のものは之に對して古樂府と稱し、古樂府は之を分つて郊祀、鼓吹相和、舞曲、雜曲の五歌辭とするに至つた。漁洋の此の詩は、尤展成の作つた新樂府に題したので漁洋續集には四首あるが、精華錄には第一第二第四を採り、茲には其の第一第四を講ずる事にする。

南苑西風御水流。殿前無復按梁州。飄零法曲人間遍。誰付當年菊部頭。〔自註〕展成樂府。順治中曾進御覽。

（字解）南苑といふは、京師の永定門の外に在つて、天子の御苑の一である。御水は宮苑の中を流るゝ水をいふ。御は君王に關する事物の敬稱である。梁州といふは、樂曲の名で、本と涼州に作り、涼州破といつた。晉の末に西涼の人が、中國の舊樂を傳へていつて、雜ふるに羌胡の聲を以てして、其の歌曲を涼州といつたのを、唐の天寶中に、西涼府都督の郭知運が、更に獻じ進めて來た所のものである。然るに後に多く誤つて梁州に作る

ので、唐人の詩に已に然うなつてゐる。飄零は、木の葉の翻り落ちる貌であるが、其より物のおちぶれるに喩へる。法曲のことは卷上二十一葉の表の小部の條下で説明しておいた如く、道觀で奏する音曲である。其の樂器は鐃鈸、鐘、磬、琵琶等を使ふ。隋の時に已に有つたが、唐の玄宗が音律に通じてゐて、酷だ此の曲を愛せられ、坐部伎の子弟三百人に、梨園で教へられた。其の後文宗の開成三年に至つて、法曲を改めて仙韶曲といつた。其の曲の妙なるものに破陣樂、一戎大定樂、長生樂、赤白桃李花といふがあり、其の餘、堂々、望瀛、霓裳羽衣、獻仙音、獻天花などの類がある。白居易傳に「法曲は雅音を失つてゐるやうであるが、矢張り諸夏の聲である」といつてある。菊部頭といふは、宋の高宗の時に、掖庭に菊夫人といふがあつて、歌舞を善くし、音律に妙であつて、仙韶院の長となつたから、宮中の者が號して菊部頭といつた。然れども上の御氣に入る事が出來なかつたから、疾と稱して告げて歸つたが、其の後久しうして宮中で梁州の舞を按せられたのに、度々舞つても上の思召に稱はぬので、提舉官の關禮といふものが、上の意中を察し、從容として奏して曰ふには、此の事は菊部頭でなければなりませぬと。夫で再び喚はれて掖庭に入ることになつた。

(意義)順治十五年に、尤展成の讀離騷の樂府を獻ずる者があつたが、世祖は深く之を稱して、教坊の內人に命じて管絃に上させらるゝといふ程であつた。是が謂はゆる梁州を按して、菊部頭に付せられたのである。然るに越えて十八年、世祖は崩せられて仕舞つた。南苑は西風が淋しく吹いて、御溝の水のみ昔のまゝに流れてゐるが、復た殿前に梁州を按せしめらるゝ等といふ事は無くなつて仕舞つた。落ちぶれたる法曲に比すべき展成の新樂府は、たとひ人間に徧く傳はつても、誰が再び之を當年の菊部頭に授けて演奏せしめる者があらうぞ。恨むべき限りである。

(評説)尤展成の新樂府が、當年世祖の知遇を受けた事を回思し、昔日の榮

譽の再びすべからざるを惜んだのである。漁洋詩話の中には云ふ「龍馭が升遐せられて、尤が北平から官を罷めて歸つたとき、余は詩を寄せて、南苑西風御水流。云云。と云つたら、尤は爲に泣を下した」とある。又展成が漁洋に答へた書面には云ふ「札を開けば便ち云ふ、寒き夜、大風雨で、臥しても寐付く事が出來ない。黄河の濤頭が、直ちに枕の上りに徹る聲を聽いて、輙ち四詩を作つて懐を寄せたとあるが、僕は公に必ず絶妙の辭のあることを知つてゐる。第一首の南苑西風云々を讀むに及び、遂に歔欷して泣が下り、卷を掩うて復び讀むことが出來なかつた」とある。詩人の切なる情緒を解し得たならば、這の詩を讀む人、亦まさに一滴の涙を墮さずには措かれまい。

千金七首土花斑兒女恩讎事等閒他日與君論劍術要離冢畔買青山。〔自註〕題黑白衛傳奇。

(字解)千金は價の貴きこと。七首は鍔の無い短刀、即ちあひくちのこと。土花といふは、凡て器物が地中に埋もれ、土の爲に侵されて、斑痕をなしたのをいふ。兒女は、俗にいふ女子供のこと。恩讎は恩とあだ。等閒は、なほざりの義で、意に留めぬこと。要離といふは、春秋の時の吳の刺客である。吳の闔廬が、王僚を弑して自立した時、僚の子の慶忌が衛の國に居たから、讎を復しはせまいかと恐れて、要離をして之を刺さしめやうとした。其の時要離は、罪を吳に得た如く裝うて出奔し、吳をして其の妻子を焚き殺して市に棄てさせた。然して遂に衛に往つて、慶忌に見ゆる事を求めたが、慶忌は然る謀のありとは知らず、其の言ふ所を信じて、共に吳に歸らんとし、江を渡つて中流に來た時に、不意に慶忌を刺した。慶忌の左右の者が之を殺さんとしたが、慶忌は天下の勇士であるとなし、「吳に還らせて其の忠を旌はさせよ」といつて死んだ。要離は江陵に至り、自ら爲せし所を悔い、愍然として曰ふには「吾が妻子を殺して其の君に事ふるは

仁でなく、新君の爲に、故君の子を殺すは義でなく、又人たるものは、其の死を重んじて、義無きを卑しむべきであるに、今吾が、生を貪つて行を棄てたのは是亦義でない。此の三惡があつて世に立たば、吾、何うして天下の士に見えられよう」とて、自ら劍に伏して死んだ。其の冢は吳縣の西四里、閶門の南城の内に在る。其の後、後漢の梁鴻伯鸞が死んだ時、皐伯通は其の爲に葬るべき地を、要離の冢の傍に求めて曰ふ「要離は烈士であり、伯鸞は高風であるから、相近づかしむべきである」と。梁鴻の墓は、要離の墓の北に在る。自註に云ふ黑白衞の衞は驢馬で、黑白衞は、黑い驢馬と白い驢馬である。傳奇といふは、戲曲、卽ち我が邦でいふ芝居である。それに北曲と南曲との二つがあるが、其の南曲をいふのである。初め元の興つて來た時、蒙古人を主として、北方の音に據つて作つた劇を、北曲といひ、又雜劇ともいつて、極めて盛んに行はれた。其の中で尤も有名なのは西廂記である。北曲は元の衰ふると共に次第に衰へて行き、之に代つて、元の末から明にかけ、南方の調子で曲を作り、南方の人種を喜ばす所の南曲といふものが起つて來た。南曲は北曲に比べて、歌曲の上に於ても、又劇の組立の上に於ても、其の窮屈な規則を更め、餘程自由なものとしたのである。然して其の材料は多く唐時代の小說に取つた。唐の小說は、奇を傳へるものであるといふ所から、傳奇と稱してゐたので、此の南曲をも亦傳奇といつたのである。南曲で有名なのは、古く元時代に出來た琵琶記と、荆釵記、白兎記、幽閨記、殺狗記、明の王弇州の鳴鳳記、湯臨川の玉茗堂四夢、四夢の中でも最も牡丹亭還夢魂記が著はれてゐる。清朝では李笠翁の十種曲、袁于令の西樓記、吳梅村の秣陵春、阮大鋮の燕子箋、春燈謎、孔云亭の桃花扇、洪昉思の長生殿等である。黑白衞は、尤展成の作つたもので、北曲であるから、雜劇といふべきであるに、此處に傳奇とあるは何ういふものであらう。併し其の材料は唐代の小說から取つたもので、唐の段成式の劍俠傳に載する所の聶隱娘の傳に據つてゐる。聶隱娘傳は

長いが、今其の梗槩を記さう。曰く、聶隱娘といふは、唐の貞元中、魏博の大將聶鋒の女であるが、十歳の時に一人の尼が來て、之を見て悅んで、貰ひ受けて敎へたいと云つた。鋒は怒つて之を叱したが、夜に入つて隱娘の姿が見えなくなつた。鋒は大いに驚いて人を四方に馳せて搜させたが、皆目行方が分らない。夫で父母相對して涕泣するのみであつた。五年を經て、不圖尼は女を送り還して來たので、一家は悲喜に堪へず、今迄何を學んでゐたかを問ふに、初めは少しも語らなかつたが、懇に詰つたら、漸く實を以て告げた。曰ふ、初め尼に連れられて行くこと數里、明け方に大きな洞穴の處へ往つた。數十歩を進めば、寂として人は無く、只猿が極めて多くゐて、松や蘿が益々邃い。其處に十歳許の女が二人ゐる。聰明端麗で、峭壁の上を飛び走ることが猿の如うである。尼は隱娘に藥一粒を與へ、且、一口の寶劒の、二尺許なるを持たせたが、鋭利なること毛を吹く樣である。隱娘をして專ら二女を逐うて岩壁を攀緣させたが、次第に身が輕くなつて、風の樣であることを覺えた。一年の後、猿を刺すことを習はせ、後、虎や豹に及ぼし、三年の後には躍り上つて鷹や隼を刺させたが、一も中らぬといふ事は無かつた。遂には劒の刄の長さを五寸減じたが、飛禽が之に遇つて知らんでゐる程になつた。四年目に至り、都市に出で、人を刺して其の首を斬らせた。後羊角の匕首、廣さ三寸なるを授けられ、遂に白日、人を都市に刺すに、誰にも見付からない樣になつた。尼は云ふ、汝の術は既に出來上つたから、もう送り還さう。今より後二十年にして、方に一たび相見ることがあらうと、直ちに送り還してくれたといふ。鋒は話を聞いて甚だ懾れ、其の後はたゞ其の爲すが儘に任せておいた。一日忽ち磨鏡（カガミトギ）の少年が門に來たら、隱娘は之を見て、此の人こそ我が夫とすべきであるといつて、父に請うて遂に嫁する事になつた。數年の後父は死んだが、魏帥が隱娘の異つた所のあるを知り、金帛を贈つて左右の吏としたが、元和の間に至り、魏帥は陳許の節度使劉昌裔といふ者と仲が惡

しくなり、隱娘をして其の首を搔かせやうとした。隱娘が帥の許を辭した時、劉は神算を能くしたから、既に其の來るを知つてゐて、衙將をして城北に至つて迎へさせた。隱娘夫妻は黑白衛に跨つて門に至れば、衙將は之に揖し、迎へ入れて待遇した。隱娘夫妻は驚いて曰ふ「劉僕射は果して神人である。然らずんば何うして吾を見拔く事が出來やう」と。劉に見えていふ「誠に僕射に對して萬死を負ふ」と。劉曰く「然うでない。各々其の主に親しむは人の常事なので、魏も許も別に變りは無い」と。隱娘拜謝して曰ふ「僕射の左右には人が無い。彼を舍てゝ此ちらに留まらせて戴きたい。かくいふは公の神明に服したので、魏帥は迚も劉に及ばない」と。劉は乃ち請ふ所に任せたが、忽ち二衛の姿を失つて、其の之く所を知らなかつた。後潛かに布囊の中に、二つの紙の衛を收めるを見たが、一は黑く一は白かつた。月餘にして隱娘は、劉に曰ふ「彼の魏帥は、未だ思ひ止まる事はあるまい。屹度人をして繼いて至らしめるであらう。今宵髮を剪つて、之に繫くるに紅綃を以てし、魏帥の枕前に送つて、迴らざることを表はさう」と。劉之を聽す。卽ち、又云ふ「今夜屹度精々兒といふ者をして、來つて某を殺し、及び僕射の首を取らうとするが、萬計を以て之を打ち破るから、少しも心配せらるゝな」と。劉は原より豁達大度の人であつたから、亦憂ふる色は無かつた。是の夜、燭を明にしておいたが、半宵の後、果して二つの幡の、一つは紅く一つは白いのが、ひらひらと翻つて來て、牀の四隅で相擊つのを見たが、良久しうして一人の人間が、空を望んで蹌れて、身首處を異にしてゐた。時に隱娘が、何處からともなく出て來て曰く「精々兒は已に斃れたが、後夜、妙手の空々兒が繼いで來るであらう。空々兒の神術は、人が能く其の用を窺ふことが出來ず、鬼も其の蹤を躡ける事が出來ない。冥然として形をなくし、影を滅するから、私の藝では、迚も其の境に造る事は出來ない。但だ、手闘の玉を其の頸に周らし、擁するに衾を以てし、又私は化して蠟螻となつて、潛かに僕射の腸の中に入り、樣子

を聴き伺つてゐる外に、逃げ避ける處は無い」と。劉は其の言葉の通りにしてゐたが、三更に至つて、果して項の上で鏗然として聲の甚だ厲しきを聞いた。隱娘は僕射の口の中から躍り出で、其の恙なきを賀して曰ふ「此の人は俊鶻の如く、一たび搏つて中らぬと、翩然として之を恥ぢ、一更を逾ゆれば已に千里の遠きに逝つて仕舞ふ」と。後其の頸の玉を視るに、果して七首で劃つた疵があり、長さ數分を逾してゐた。是より劉は轉た厚く隱娘を禮した。永和八年に劉は入覲したが、此の時隱娘も此處を去つて、之く所を知らなんだ。後劉の薨した時には、亦驢に靷つて一たび京師に來り、柩前に慟哭して去つた。とある。此の承句に兒女恩讎事等閒と、いふは此の事なので、初め魏帥の恩を受けて、來つて劉昌裔を殺さんとし、後には劉の爲に謀つて、魏の禍を逃れしめた事をいつたのである。

(意義)千金の七首も土中に埋もれて、腐蝕せられた痕が斑になり、兒女の恩もうらみも、事は共になほざりになつて仕舞つた。君が作られた黒白

術傳奇を讀みて、無限の感に打たるゝが、何時かは君と劍術を論じ合つて、彼の有名な列士要離の塚の傍に青山を買うて、靜かに老後を送つて見たいと思ふ事である。

(評說)錢牧齋の、春日過易水といふ七律の七八に、老大不堪論劍術、要離冢畔有青山、とあるが、漁洋の詩は蓋し是から來たのであらう。

會心偶筆には、土花斑の語を解して、「雷煥の豐城の劍が、武都の赤土を以て拭へば、倍々光明を益すが如きものだ」といつてゐる。是は晉の雷煥といふものが、豐城に寶劍の氣があるといつたので、張華が、煥を豐城の令として之を探させたが、地下四丈の處に石函があつて、其の中に龍泉、太阿といふ雙劍が入れてあつた。煥は之を南昌の西山の北巖の下の土で拭つたら、光芒が豔發したが、張華は南昌の土よりも、華陰の赤土が良いといつて、之を煥の處へ送つたので、之を用ひて拭つた所が、倍々精明となつた、といふ。乃ち武都は華陰の誤であらう。兎に角偶筆は、土花斑を解

して、赤土で拭つたら、倍々光明を添へたとしたが、曲解ではあるまいか。又、恩讐事等閒を解して「此の七首あり、一切兒女の恩讐の事、皆快意にして之を報ゆべし」といつてゐるが、夫では等閒といふ事にならぬ。されば此の處、余は全然偶筆の解に從つてをらぬ。

和刻の清六大家絶句鈔といふものに、此の結句を訓點して「家畔を離れて青山を買はんと要す」としてゐる。烈士要離をば、要と離とに切り離して、動詞として使用してゐるには驚かざるを得ぬ。且つ此の書、誤字も中々多い。和刻の訓點本には、往々此の種のものがあるから注意を要する。然も此の書、序文によれば、梁川星巖の撰したものとしてある。撰者は星巖であるにしても、訓點は果して星巖の手に成つたかどうか分らぬが、それにしても星巖が、全く其の責任を遁れる事は出來まい。

裂帛湖雜詠

(題意)裂帛湖は、北京の西北にある。帝京景物略に「玉泉山を去ること數武ならずして湖に達する。是が裂帛湖である。泉が湖底から迸る有樣は、丁度練帛の裂けて、珠の直ちに湖面を彈く樣で、渙然として湖に合する。湖は方數丈あつて、水は澄んで鮮かで、沙を漾はして金色である」とある。原集には六首あるが、茲には其の一首だけを講ずる。

水軒面面似船窗。沙燕鵁鶄盡作雙。忽憶夢迴聞柁鼓。一枝柔艣破煙江。

(字解)水軒は水邊の家。面面は、あちらの方面も、こちらの方面もといふこと。沙燕は、穴沙燕と書き、我が邦で砂潜燕といつてゐる。燕類の中で最も小さく、尾の羽の分れも又淺く、頭から尾まで暗褐色を呈し、喉や腹は白く、常に群つて飛び、海濱や河岸の沙に穴を作つて卵を產み、雛を其の中で育つるものである。鵁鶄は赤頭鷺といひ、我が邦では赤頸五位といふ。

體の上面は大抵白いが、頭や頸が赤褐色で、胸や背の裘毛に緑色が交つてゐる。夢迴は夢のさめること。柁鼓は、かぢを擊つ音。一枝は、長い物を數へるときの稱で、筆、杖、簪、槳、など、皆枝を以て數へる。こゝは艣を數へていつたのである。柔艣は、ゆるやかに操る艣をいふ。

(意義)水邊の家は、どちらの方面を眺めても、船の窗の樣であつて、外には沙潛燕や赤頸の五位鷺などが、一番づゝ並んでゐる。されば身が家の中に在ることをも忘れて仕舞つて、不圖船の中にゐる樣に感じ、蓬底に在りて夢がさめると、柁を鼓する音を聞きつゝ、一挺の艣をやさしく押して、煙れる江を劃つて進んで行くのではあるまいかと憶ふことである。

(評說)家の四面が水に圍まれてゐる所から、恰も船中に在るが如く感ずる有樣を、さながら巧に寫し出してゐる。

雨中度故關

(題意)此の詩は、康熙十一年壬子、漁洋三十九歲の時に、蜀の試驗を典ることを命ぜられ、七月朔に都を出發し、初九日、雨中に井陘の故關を通つて作つたものである。井陘關といふは、井陘縣の東北、井陘山の上に在る關所のことで、一に井陘口といひ、今は土門關といつてゐる。山の上が四方が高く、中央が低くなつて、井の字の形をなしてをり、又燕趙あたりでは、山の背を陘といふから、井陘と名づけたので、歷代、軍事上の最要の地となつてゐる。漢の二年、彼の韓信が背水の陣によつて、趙の軍を破つた時も、此の井陘口へ兵を聚めたのである。其の時趙の方では、李左車といふ者が、成安君陳餘に謂つて曰ふには「井陘は道が隘くて、車は軌を方べることが出來ず、騎は列を成すことが出來ないから其の勢、糧食は必ず後に在るであらう。臣に假すに奇兵三萬を以てせられて其の幅重を絶ち、足下は溝を深うし壘を高うして、與に戰はるゝことがなかつたならば、彼は前んで鬪ふことも出來ず、退いて

還る事も出來ないから、十日ならずして、韓信等の頭を御前に致す事が出來る」といつたが、陳餘は之を聽かずして終に敗れた處である。

危棧飛流萬仞山、戍樓遙指暮雲間、西風忽送瀟瀟雨、滿路槐花出故關。

(字解)危棧は、嶮しくて懼ろしい樣な處に架けてあるかけはしすべて高くて懼ろしい樣な物に危の字を附けていふ。危樓とか、危欄とかいふは、皆それである。萬仞の仞には種々の說がある。小爾雅には四尺とあり、包咸、鄭玄は七尺といひ、應劭は五尺六寸といひ、孔安國、趙岐、顏師古等は八尺といふ。八尺は周代の制でいふので、普通此の說が用ひられてゐる。我が國でいふ一ひろで、左右の手を擴げた長さである。戍樓は邊地に駐つて守つてゐる兵の物見櫓。瀟瀟は風雨のはげしい貌。槐花はゑんじゅの花。槐は落葉喬木で、初夏に白黃色の花が咲き、長い莢の實がなる。

(意義)懼ろしい樣な高い懸橋や、飛ぶが如く早く流るゝ流のある萬仞の山が聳えてをり、井陘關の物見櫓を、遙かに暮雲の間に指さす事が出來る。西風が忽ちざんざと降る雨を送つて來て、路の邊に咲き滿ちた槐の花の眞盛りに、故き關所をば通り過ぐることである。

(評說)此の詩は甚だ平易であるから、彼是と說明するよりも、幾回となく吟誦し咀嚼すれば、其の妙味も自然に會得せらるゝのである。是等の詩は漁洋集中の有數の作で、神韻の高い詩であるが、其の調子の好い所は、甚だ格調派の詩に近い。元來神韻といふ意義に就ては、漁洋の門人ともいふべき翁覃溪すら「神韻は格調の別名のみ」と謂つてゐるが、併しそれ丈では心に濟まぬ所があるので、更に語を繼いで「然りと雖も、究竟して之を言へば、格調は實で神韻は虛、格調は呆で神韻は活、格調は形があつて神韻は迹が無い」と附け足してゐる。漁洋の詩に、拂袖却愁東路遠、蟬聲孤驛穆陵關。といふのがあるが、是は彼の唐詩の、遙送扁舟安陸郡、天邊何

處穆陵關といふのから來てゐるのであつて、殊に其の結句は、全然格調派の詩となつてゐる。されば漁洋が自ら指圖をして、會心の作のみを集めた精華錄には、此の作を採つてゐない。是は神韻といふよりも、寧ろ格調の句であるからであらうと思はれる。今、此に解釋した危棧飛流の詩は此の穆陵關の詩に比して大分に違つてゐて、眞に神韻の作である。是等の點は詳細に說明すればする程、言說に落ちて仕舞つて、甚だ面白くないから、先づ此の位にしておいて、讀者諸君が各自の把玩に任せやうと思ふのである。

驪山懷古

(題意)驪山といふは陝西臨潼縣の東西に在る。古、驪戎といふ種族が來て此の山に居たから、驪山と名づけられ又驪戎之山ともいつてある。其の麓に溫泉があり、唐の明皇が楊貴妃等を從へて、屢々御幸せられた處で、溫泉宮と謂つたのを、華淸宮と改められた。白樂天の長恨歌に、春寒賜浴華淸池。溫泉水滑洗凝脂。とあるは此處である。懷古とは舊蹟を過ぎて、往事を追懷するをいふ。漁洋は七月初九日、井陘の故關を過ぎ、其の二十六日、驪山に古を懷うて、絕句八首を作つたのである。

鸚鵡何問上皇野棠風折繚垣長銷魂此日朝元閣親試華淸第二湯

(字解)鸚鵡の事は、玄宗皇帝が、宮中で鸚鵡を飼つてゐられたが、一日之に問うて「鄕を思ふや、否や」と曰はれたら「鄕を思ふ」と對へたので、遂に山に放ち還してやられた。後數年を經て、使臣が隴西を過ぎたとき、鸚鵡が問うて曰ふ「上皇安きや、否や」と。使臣が「崩ぜられた」と曰つたら、鸚鵡が悲鳴して已まないので、使臣が詩を賦して云ふ、

隴口山深草木荒。行人到此動離腸。耳邊不忍聽鸚鵡。猶在枝頭說上皇。

上皇といふは、玄宗皇帝が安祿山の亂に由つて蜀に蒙塵せられたので、太子が靈武で位に卽かれて、肅宗皇帝となられたから、其の以後、玄宗皇帝を上皇といつたのである。野棠は棠梨の事で、樹が梨に似て小さいから、又野梨ともいひ、我が邦では小梨とか、小林檎とかいふ。山に多く生え、高さが一二丈に至る。葉は林檎に似て白い毛があり又三叉五叉のものもある。春五瓣の小さい白い花が簇つて開く。實は秋に至つて熟して赤くなる。繚垣の繚は猶ほ繞の如く、繚垣は取り廻らせる垣をいふ。錢易の南部新書に「驪山の華清宮は毀れ廢れてゐること已に久しく、今惟存してゐるものは繚垣のみだ」といつてある。朝元閣も驪山の宮殿の一である。南部新書に「朝元閣は山嶺の上に在り、山腹は長生殿である。又、飲酒亭とか、明皇の吹笛樓、宮人の走馬樓などがあつて、故基が猶ほ繚垣の内に存してゐる」といつてある。華清は太宗の貞觀十八年に置いたので、高宗の咸亨二年に始めて溫泉宮と名づけ、玄宗の天寶六年に至り、溫泉を更めて華清宮といひ、湯井を治めて池とし、山を環つて宮殿を列ねた。第二湯といふは、華清宮の中に、天子の召さるゝ湯池が兩所あり、其の外に更に十六箇所の湯があつて、何れも甃くに文瑤密石を以てし、中央に玉蓮花があつて湯を捧げてをり、又沈香の木で山を爲り、錦繡で鳧や雁を爲り、明皇が時に金銀を鏤めた小舟を泛べて遊ばれたといふ。此の第二湯は、蓋し天子の召さるゝ二湯の一で、貴妃の浴した所を謂ふのであらう。

(意義)何れの年であつたか、朝廷の使が隴西を通つた時に、嘗て宮中に飼はれてゐた鸚鵡が、上皇の安否を問うたといふ事であるが、是も昔の夢となつて、驪山の宮殿は荒れ果てゝ仕舞ひ、野棠が風に吹き折られて亂れてをり、繞らされたる築墻のみが、長く連つて存してゐる。我は今日蜀に入るの途次、朝元閣の故址に來り、親しく華清の第二湯に浴し試みて、楊貴妃等が寵を得て居た當年の有樣を追想し、黯然として魂を銷す事である。

(評說)驪山懷古は、漁洋續集には總て八首載つてゐるが、精華錄には六首を採つてゐる。陳其年が餞衍集を選した時に、漁洋の七言絶句は九首を收錄したが、其の中に此の驪山懷古を五首迄も收めてゐる。併し此處には唯其の第一首のみを解することにした。其の他の詩の中で、第八首目は殊に佳い作であるが、著想、措辭等が前に講じた所と相類てゐるから姑く茲に錄しておくだけにする。尤も平易な詩であるから講ずる迄もなからう。

空城幾曲水潺潺。松柏淒涼滿舊山。輦道無人秋草合。年年鳴咽到人間。

灞橋寄內二首。

(題意)灞橋といふは、陝西長安縣の灞水に懸つてゐる橋で、長安の東に當つてゐる。隋の時に石に更め、唐の時に至りては、都人の別を送るものが、多く此に於てしたから、因て銷魂橋と謂はれてゐた。尙ほ此の橋の事に就ては、本卷八葉裏銷魂橋の條下に、開元天寶遺事を引いて說明しておいたから、參照せられたい。內は妻妾を稱するのであるが、此は妻、張宜人のことである。漁洋の蜀道驛程記に云ふ「二十六日、灞橋を過ぎた。橋の旁の兩岸は、皆楊柳が植ゑてある。古は銷魂橋と名づけてゐたのである。恨人や羈客が、此に至れば黯然となる。云々。長樂坡に上つて望めば、終南の山が長安の城の東北を遶つてゐる。北闕に憩うて、家書を京師に寄せた」とあるは卽ち是である。

長樂坡前雨似塵。少陵原上淚霑巾。灞橋兩岸千條柳。送盡東西渡水人。

(字解)長樂坡は灞橋を西に度つた處で、滻川の西岸にあり、舊とは滻坂といつたが、隋の文帝が、坂と反との音の同じいのを惡んで、改めて長樂坡としたのである。少陵原も灞橋に近い處で、長安縣の南に在る。漢の時に

は鴻固原と謂つてゐた。杜甫が茲に家して自ら杜陵老と稱し、少陵とも曰つたので有名になつた。巾は冒り物をいふ。

(意義)長樂坡の前は、雨が細かく降つて、塵の樣であり、少陵原のほとりでは、別を痛む涙が冒り物をも霑ほすことである。灞橋は古來別を送る所で、其の兩岸に有る千條の柳は、東に西に水を渡つて去つて行く人を送り盡して、古往今來限りなき恨を留めてゐる。

(評說)伊應鼎の會心偶筆に「首句は景を言ひ、次句は情を言ひ、三四は情景を合せ寫し、幷せて古より今に及ぶ窮りなき情景を寫し出してゐて、眞に妙筆である」といつてゐる。

太華終南萬里遙西來無處不魂銷閨中若問

金錢卜秋雨秋風過灞橋

(字解)太華は山の名で、亦華山ともいふ。陝西華陰縣の南に在る。五嶽の中の西嶽である。山海經に「太華の山は、削り成して方で、其の高さは五千仞、其の廣さは十里ある」といひ、又水經注には「華山は遠くより之を望めば、華の樣な形をしてゐる」といつてある。華の字、山名のときは去聲二十二禡の韻である。終南も山の名で、南山のことである。又、中南とか、地肺とか、秦山とか、秦嶺とかいつてゐる。關中の南に連り亙つて、西は隴首に起り、東は太華に至るまで、八百餘里に及んでゐる。閨中は婦女の居る部屋、卽ち夫人張氏の居間をいふ。金錢卜といふは、錢を擲つてトふので、漢の焦延壽や、其の弟子の京房などから始まつたものであらうと云ふ。事文類聚に「京房のト易は、卦をするに、錢を擲つて、甲子で卦を起す」と云つてある。又、周易啓蒙翼傳には「世に傳ふる所の火珠林といふものは、卽ち其の法であつて、三錢を以て擲つ」といつてある。我が國で謂ふ所の投算の類であらう。投算は、淸明の投算と稱せられ、阿部淸明の傳へたものゝ樣に謂はれてゐる。其の法は、錢の面の仰と覆とによつて判つものであつて、

賈公彥の儀禮の註には「三少を重錢とする。重錢は九である。三多を交錢とする。交錢は六である。兩多一少を單錢とする。單錢は七である。兩少一多を折錢とする。折錢は八である」といつてある。多少といふは仰覆であるが、其の判斷の仕方は精しくは分らぬ。漁洋の夫人が此の金錢卜に問うて、夫漁洋の歸期を占ふのである。

(意義)太華の山や終南の山が近く聳えて、都は已に萬里も遙かに隔つて仕舞つた。かく遠く西の方へ來ては、何處へいつても魂を銷す樣な悲しい感に打たれぬ處はない。其方(ソナタ)が閨中に在つて、若しも金錢卜に問うて、我が歸期をトふならば、如何なる卦が現はれる事であらうか。たゞ私は秋雨が降り、秋風が吹く中を、人を惱ます事の多き灞橋を過ぎてゐる事である。

(評說)此の詩の後半をば、會心偶筆に面白く敷衍してゐる。曰く「閨中、亦まさに金錢卜を作してゐることであらう。若し歸期を問ふならば、此の時、方に灞橋の上、風雨の中、尙ほ行き行きて未だ已まず、正に謂はゆる、君問歸期未有期である」と。然して更に其の後に附けて云ふ「先生が作られた所の張宜人行述に、宜人此の詩を見て、涕を攬つたさうであると謂つてあるは、固に其れ宜なり」と。

潘德輿の養一齋詩話に云ふ「大抵、詩家は意を偸み調を偸むことが甚だ多い、明の王欽佩の柳枝詞に、

渭水西來萬里遙。行人歸去水迢迢。垂楊不繫離情住。只送飛花過渭橋。

といひ、王漁洋の詩に、太華終南云々といふ。名手相襲うて、竟に恆事を成してゐる」と。余は懷ふ、縱令王南原章の詩を襲うたものとしても、一たび漁洋の鑪錘を經て、此の絶唱をなした上は、別に差支が無いではないか。況んや漁洋の此の詩の妙處は、尤も後半に在るので、後半は斷じて南原の句を襲踏したと謂ふを得ないものを。

馬嵬懷古

(題意)馬嵬といふは、陝西興平縣の西、二十五里に在る。今は馬嵬鎮といひ、又馬嵬堡ともいつてゐる。唐の玄宗皇帝が、安祿山の爲に關中を攻め落され、蜀に出奔せらるゝとき、此處まで來ると將士が飢ゑ疲れて、遂に帝に逼つて、寵妃楊太眞を縊り殺さしめたので有名な所である。太眞は小名を玉環といひ、初め壽王瑁の妃であつたのを、玄宗が召し入れて愛幸し、進めて貴妃とせられたので、歌舞を善くし、音律を曉り、性が警穎で、意を迎へて悟るといふ風であつた。其の殺さるゝ時、帝は之を見るに忍びず、袂を反して面を掩はれたといふ事である。漁洋は七月二十六日に驪山で古を懷ひ、又灞橋を過ぎ、翌二十七日に此の馬嵬を通つたのである。蜀道驛程記に「馬嵬坡は、太眞の葬つてある處で、始平原に在るが、荒落せること殊に甚だしい」とある。原と二首あるが、今其の後の一首を講ずる。

巴山夜雨卻歸秦。金粟堆邊草不春。一種傾城好顏色。茂陵終傍李夫人。

(字解)巴山は大巴山のことで、普通に巴嶺といふ。陝西西鄉縣の西南に在つて、支峰が數百里に亙つてゐる。漁洋の詩の中に、巴山跨秦蜀、蜿蜒連上庸といふのがある。夜雨却歸秦といふは、張祜の雨淋鈴の詩の中の雨淋鈴夜卻歸秦といふのを取つたのである。雨淋鈴といふは、玄宗が蜀に幸せらるゝ時、初めて、棧道に掛られると、霖雨が十日にも彌つたので、帝は鈴聲の山彥に應ずるを聞いて、楊貴妃のことを悼み思ひ、其の聲を採つて、雨淋鈴曲といふを作つて恨を寄せられたので、其の後、都に歸らるゝに及び、張徽といふ樂工をして之を奏せしめられたが、帝は覺えず悽愴として涕を流されたといふ事である。張祜の詩は此の事を詠じたのであるが、今全首を此に錄してみよう。

雨霖鈴夜卻歸秦。猶是張徽一曲新。長說上皇垂淚敎。月明南內更無人。

秦といふは、もと秦の國の有してゐた陝西をいふのであるが、此の秦に歸るは其の都の長安を斥したのである。又雨淋鈴は蜀に入る時の事であるが、此は京に還られた事をいふのであるから却の字を措いたのである。金粟堆は金粟山のことで、蒲城の北三十里に在る。其處に玄宗を葬つた泰陵がある。一種は、同一種類といふが如く、同じ樣なのをいふので、楊貴妃の容子は、長恨歌傳に「鬢髮は膩理で、纖穠が度に中り、舉止が閒冶で、漢の武帝の李夫人の樣だ」といつてある。卽ち楊貴妃と李夫人とは、同一種の美人だといつたのである。傾城といふは、李夫人の兄の李延年といふが、歌舞が上手であつたが、帝の前で舞つた時の歌に、

北方有佳人、絶世而獨立。一顧傾人城、再顧傾人國。寧不知傾城與傾國。佳人難再得。

とあるから、傾城とか傾國とかいへば、美人の事になつてゐる。茂陵は漢の武帝の陵で、長安の西北八十里に在る。傍はそふと訓む。此の字、かたはらと訓ずるときは平聲七陽の韻、そふと訓するときは、去聲二十二漾の韻である。李夫人は李延年の娣で、武帝の寵妃である。初め延年が帝の前で、此の北方有佳人の歌を歌つた時に、帝が歎じて曰はるゝには、誠に善いが、併し世に然樣の人が有らうかといはれたら、平陽公主が、延年の女弟を以て申し上げたので、帝は召し見られたが、妙麗で善く舞をする。乃ち幸を得て一男子を生んだ。然るに夫人は少くして死んだので、帝は之を閔んで、其の形を甘泉宮に畫かせられたが、寸時も思慕の念が已まなんだ。帝の崩ずるに及んでは、其の意に因りて、夫人を其の廟に配せ祀つた。其の冢は茂陵といひ、茂陵縣の故城の南にある。

(意義)馬嵬坡で、楊貴妃が殺された後、玄宗皇帝は蜀に入らんとして棧道にかゝられたが、雨のしと〳〵降る中で、鈴の音が山彥に應へる聲を聞き、貴妃を思ふ情に堪へず、雨淋鈴の曲を作られたが、後に京に歸られてから、此の曲を聞いて、情に堪へずして涙を流された。然るに玄宗は崩じ

て金粟堆に葬られたのに、貴妃の墓は空しく馬嵬に殘されて、帝の思慕の情を慰むることが出來ず、陵の邊の雜草は、春が來てもたゞ愁に鎖されて、春らしき氣分も見えぬ。孰れも同じ樣に城を傾くる好顏色の美人でありながら、漢の武帝の方は、帝の茂陵は李夫人の茵陵に傍うてをり、卽ち死して穴(ウカナ)を同じうしたのであるが、玄宗の方の楊貴妃は、實に憐むべき事であると、馬嵬の荒れ果てた樣を見て歎じたのである。

(評說)沈德潛は、清詩別裁集に於て此の詩を評して「其の、金粟堆に傍ふ事の出來ぬを傷むので、李夫人を以て之を形(アラ)はしたのは、便曲であつて餘味がある」といつてゐる。然るに舒位の瓶水齋詩話には「王文簡の馬嵬の絶句の巴山夜雨云々をば、沈歸愚は評して、便曲にして味があるといつてゐるが、然し阮亭の此の意は、實に陳鴻の長恨歌傳中の語に本づいてゐるので、創造ではない、沈は頗る覺らなかつたのみだ」といつてゐる。乃ち舒鐵雲は能く其の注意が、沈歸愚の想ひ到らざりし所にまで及んで、漁洋の詩意の由つて來る所を觀破したのである。然し長恨歌傳に言ふ所は、字解の欄に引いて置いた如く、たゞ楊貴妃の風姿が、李夫人の如しといふのみである。漁洋は此の單簡なる一語から鉤索して、之を其の陵墓に結びつけ、馬嵬懷古の作として、最も適切なるものに鎔化し、能く此の好絶句に錬り上げた手腕は、大に見るべき所のものである。

廣元舟中聞棹歌

(題意)廣元は、今は縣になつてゐる。四川嘉陵道に屬し、劒閣の北に當つてゐる。陝西の褒城から此まで、凡て四百四十里あり、此から南は嘉陵江に循つて下つて、巴閬に通じ、綿漢を歷て、斜に成都に趨いてゐる。蓋し秦から川に入る通路で、歷史、兵爭の上の最要地である。漁洋は七月二十六日に灞橋を渡り、長安、咸陽を過ぎ、翌二十七日、馬嵬に古を懷うて巴山夜雨云々の作があり、渭水の流域に循つて西に進み、更に南に

折れ、閏七月朔、渭水を渡つて棧道に入る。此、卽ち蘇東坡の謂はゆる、北客初來試新險、蜀人從此送殘山の場所である。大散關を過ぎ、柴關嶺を度り、初六日、馬鞍嶺に至る。俗に二十四馬鞍嶺といふ處で、百里の間、險峭特に絶だしい。觀音碥は棧中第一の勝境である。之を過ぎて棧始めて盡き平野を見る。褒城は其の地に在る。時に閏七月初七日。定軍山に諸葛武侯の墓を弔ひ、五丁峽を經て、漸く四川の地に入る。十六日には舟を僦うて朝天峽を下つた。江は平で舟は駛る。蜀道驛程記を見るに「未だ午ならずして廣元縣に次した。城西二里に烏奴山がある。陸游の詩に、暮雪烏奴停醉帽、秋風白帝放歸船といふは是である。午、微しく雨ふる。晡に晴る。昭化縣に抵る」とある。此の夜は昭化に次つて、舟中に宿した。記に云ふ「夜に入つて、月色が皎然として、江聲が激壯である。舟人が渝歌を作した。柝聲と斷續して、中夕、寐を成すことが出來なかつた」とある。此の詩に言ふ所は卽ち是である。棹歌は櫂歌とも書く。棹と櫂は同じ字である。櫂歌行は、樂府の瑟調の曲名であるが、又別に舟に乘り櫂を鼓して歌ふものをも櫂歌といふ。晉の陸機や、梁の簡文帝の賦したのは是である。此に謂ふ所もそれで、舟人が歌ふ此の邊の俚歌である。されば詩中には渝歌と謂つてゐる。

江上渝歌幾處聞。孤舟日暮雨紛紛。歌聲漸過烏奴去。九十九峰多白雲。

(字解)渝歌といふは、上卷六十四葉裏に、巴渝里社の詞と言つたのと同じで、巴や渝の地方で歌ふ調子の歌である。烏奴は、題意の所で引用した蜀道驛程記の中に詳かに述べられてゐる。地は廣元縣の西、嘉陵の江岸にあつて、峭壁が削る如くなつてゐる。九十九峰は九隴といふ山のことである。廣元の西、二十里の所にあつて、九十九の峰を環らして、劒戟の排列してある樣になつてゐる。

(意義)江上には、漁歌が幾處かに聞こえてゐる。孤舟の中に日は暮れて、雨が紛々と亂れて降りそゝぐ。舟が進むに隨ひ歌の聲が次第に遠くなつて仕舞つて、烏奴の山下を過ぎ去れば、九隴の九十九峰に、多くの白雲の懸れるを見るのみだ。

(評說)會心偶筆に云ふ「首めの句は是、歌を聞くのであり、次の句は歌を聞く時の景色。三四は歌の聲が已に去つて、漸く聽いて漸く遠く、漸〻に聞くことが出來なくなつたから、神を凝して竚み望めば、惟〻衆峰の白雲の盡きないのを見るのみだと言つたのである。此は錢起の曲終人不見。江上數峰青。といふ語の意からして之を得たのである」と云つてゐるが、眞に其の通である。

此の詩に云ふ所、蜀道驛程記によれば「午、微雨。晡に晴る。昭化縣に抵る」とあるから、日暮は晴れてゐる筈で、日暮雨紛々は事實でない。又、棹歌を聞いたのも其の夕方昭化に泊してからの事で、記には「夜に入つて月色皎然。舟人漁歌を作す」とある。廣元では未だ午前であつたのだ。此の處漁洋も、紀行詩卷として詩を排列する體裁の上から、一寸詩虛言(ソラゴト)を試みたものか忍(タカシ)俊さに禁(タ)へられぬ。

夾江道中

(題意)漁洋は、閏七月十六日、昭化に宿してより、十八日には閬中に至り、滯留すること三日にして此を發し、日數を重ねて、八月初三日に成都に著いた。典試の使命も首尾よく果して、九月二十五日を以て歸途に就くことになつた。今回は往路と異つて路を南に取り、三蘇の生れた眉州を過ぎ、二十九日に、雨を冒して、午時に夾江縣を通つた。夾江は本と漢の南安の地であつたが、隋の開皇中に、龍游、平羌の二縣を分けて青衣江に臨ませたから、夾江の名が出來た。今は縣になつてゐて、四川建昌道に屬してゐる。本題はもと二首あるが、今其の前首を講ずる。

沉黎東上古犍爲。紅樹蒼藤竹亞枝。騎馬青衣江畔路。一天風雨望峨眉。

(字解)沉黎は筰都といつて、漢の頃の西夷の名であつたのを、孝武の時に改めて沈黎郡とした。故の治は、今の四川漢源縣の東南に在つた。犍爲は、僰人の居た處で、漢の孝武の建元六年に犍爲郡としたので、今も四川建昌道に犍爲縣がある。竹は成都の南方から、此の邊へかけて一帶に多い。蜀道驛程記に云ふ「夾江の南に竹の多いことは、他と同じである。人家は竹を以て藩となし、微かな逕で出入を通じてゐるので、時に茅茨が露はれ、或は雞犬の聲を聞いて、乃ち人あるを知るのみだ」と。亞枝は、丹鉛總錄に云ふ「白居易の集に、亞枝とある。水に臨んで枝を低れるをいふのである。孟東野の詩に、南浦桃花亞水紅。とある」と。卽ち枝を垂れてゐるをいふ。青衣江といふは、古の沫水で、平羌江ともいふ。李白が、峨眉山月半輪秋。影入平羌江水流。といつたのは是である。源は今の四川蘆山縣の西北から出て東南に流れ、洪雅、夾江を經、嘉定に至つて泯江に入る。峨眉は有名な大きな山で、四川峨眉縣の西南に在る。水經注に「成都を去ること南の方千里、秋の日の清く澄み渡つたときに兩山を望み見れば、相對して蛾眉の樣だ」とある。されば又蛾眉とも名づける。其の脈は岷山から綿延として來り、突起して大峨、中峨、小峨の秀峰となり、三山相連つてゐるから、名づけて三峨といふ。大峨山は巖洞が重複し、龕谷が幽阻で、山に登る者は、麓から上つて山の半に及び、又、八十四盤を歷てから、山の徑が線の樣な細い處を六十里登つて後に峯頂に達する。山中に石龕が百十二、大洞が十二、小洞が二十八ある。伏羲、女媧、鬼谷などの諸洞が最も著はれてゐる。又雷洞といふのがあるが、時に雲を出し雨を降らすから、俗に雷神の居る所だとせられてゐる。蜀道驛程記にいふ「十月初一日、九盤山を過ぎ、遙かに大峨の天半に秀出してゐるを望んだ。雲嵐は萬狀で、積雪は晶然と

してゐる。中峨は傴僂(ヤムシ)の如(ヤウ)で、小峨は拱(コマヌ)き揖(エシヤク)してゐる樣であつて、北から來た諸の山が、蜿蜒として起伏し、爭うて峩の下に趨いてゐる。陸放翁の峨眉を望む詩に、白雲如玉城、翠嶺出其上、異境墮我前、心目久蕩漾。と云つてあるが、身が未だ此に到らねば、語意の工なることが分らぬ」とある。

(意義)沈黎より東に上れば、古の犍爲である。時は九月盡日で、紅葉した樹や、蒼々とした藤が、生えてをり、又多くの竹は枝を垂れて茂つてゐる。馬に跨つて、青衣江畔の路をば、一天の風雨の中に、峨眉山を打眺めつゝ過ぎて行く。

(評說)會心偶筆に云ふ「雕琢を事とせず、推敲を費さず、直ちに行く所の地や、見る所の景を寫して、自ら天然の神韻がある。此が先生の詩の、以て及ぶことの出來ぬ所である」と。

漁洋詩話に云ふ「余少くして秦淮に客となつて、秦淮雜詩二十首を作り、又眞州に在つて、絶句數章を作つたが、江淮では多く寫して圖畫とした。

後、蜀に入つて夾江の道中を行き、峨眉の三峰が、煙雨の空濛たる中に在るを望んで、詩を賦して、沈黎東去云々といひ、又、粤に入るに及んで、大雪のときに潛山の唐婆嶺を行き、事に卽いて詩を賦して皖公山色云々といつたが、常に畫師をして爲に二詩を寫させようとして、未だ果さざるを憾としてゐる」と。此の詩、蓋し漁洋得意の作である。

涪州石魚

(題意)漁洋は十月初二日、嘉州卽ち今の樂山縣から舟に乘つて泯江を下つた。初八日、渝州卽ち重慶府に抵り、十一日涪州に至る。涪州の涪は音フである。涪州は重慶府に屬して、其の東方に在り、江の南岸で涪陵江が江に會する所にある。民國に至り改めて涪陵縣とした。石魚といふは、涪州の江心に、雙魚が石に刻してあるので、魚毎に三十六鱗になつてゐて、一は萱草(ワスレグサ)を銜み、一は蓮花を含んでゐる。江水が涸れて、石魚

が見はれると、豐稔の兆であると言ひ傳へてゐる。漁洋は、此の石魚に感興して鄉思を動かし、此の一首を成したのである。

涪陵水落見雙魚、北望鄉園萬里餘、三十六鱗空自好、乘潮不寄一封書。

(字解)涪陵は江の名で、貴州烏江の下流である。貴州から四川彭水縣の境に入り、此の涪陵縣に至つて江に入る。雙魚は、二匹の魚をいふので、石魚のことであるが、然し手紙のことをも雙魚といふから、漁洋は石魚を見て家書を聯想し、思鄉の情を動かしたのである。古樂府に、客從遠方來、遺我雙鯉魚、呼兒烹鯉魚、中有尺素書。とある。丹鉛總錄に說をなして云ふ「古樂府の詩に、尺素如殘雪、結成雙鯉魚、要知心裏事、看取腹中書。といふ。此の詩に據れば、古人は尺素を結んで鯉魚の形としたので、遺我雙鯉魚といつたのも卽ち是である。下に魚を烹て書を得たといふは亦譬へて言つたのみで、眞に烹たのではない」と。此に據れば手紙を雙鯉といふは、結び封の形から來た名で、必ずしも雙鯉の中から手紙が出たといふのではないらしい。三十六鱗は鯉をいふ。彥周詩話に「段成式が、溫庭筠に雲藍紙を與へる詩に、三十六鱗充使時、數番猶得表相思。とあるが、蓋し龍は八十一鱗で、鯉は三十六鱗だ」とある。乘潮の潮は、普通、海水の、日月の引力にて、高くなり又低くなるを謂ふのであるが、古人の用ふる所を見るに、往々海水に限らぬことがある。韋應物の滁州西澗の詩に、春潮帶雨晚來急、野渡無人舟自橫。とあるに對し、歐陽永叔は「滁州の城の北に、一の澗水があるが、極めて淺くて舟に勝へないし、又江潮は此までは至らぬ」といつてをり、又、盧綸の晚次鄂州詩の、舟人夜語覺潮生。といふに對して、吳昌祺は「此の處に潮は無い。豈に詩人必ずしも據所が無くてよいか」といつてゐる。併し此の詩の唐詩鼓吹の註には「潮は江水の漲る也」とある。漁洋の此の詩の涪陵も四川省で、海潮の來るべき所で無いから、此の江水漲る也

雅聲社排印

といふ解に從ふより外はない。併し此處は想像の語であるから、必ずしもかゝる解をなす必要が無いかも知れぬ。

(意義)涪陵の水は涸れて、石雙魚が露はれてゐる。雙魚は信を齎らすものであるから、之を見るにつけても思ひ出すは故郷の事である。されば遙かに北の方を望むに、如何にせん故郷は萬里も隔たつてゐる。三十六鱗の鯉魚は空しく自ら好きも、江水の漲るに乘じて、一封の家書だに寄せぬは遺憾の極みである。

(評說)會心偶筆に云ふ「此は石魚を借りて、其の郷を思ふ情を寫したのである。卽ち小雅の、維南有箕。不可以簸揚。維北有斗。不可以挹酒漿。の意である」と。

漁洋詩話に云ふ「孫寶侗、字は仲孺といふは、益都の相國泚亭(名は廷銓、字は道相)の仲子で、才氣があり、詩文を善くするが、然し持論をば、好んで余と左へる。余が蜀道の詩に、高秋華嶽三峯出。曉日潼關四扇開。とあるを、孫が之を議したので、或人が、此は昌黎に本づくのだと曰つたら、孫は憤然として曰く、昌黎は便ら如何があらうとも、畢竟是は兩扇だと。又涪州石魚に題して、涪陵水落云々と云つたら、孫は之を駁していふ、既に是れ雙魚で、合せて道へば七十二鱗であると。余之を聞いて笑つて曰ふ、此が東坡の謂はゆる鼈厮踢(ベツシテキ)なのだ」と。

麻姑洞

(題意)涪州に、石魚を見た漁洋は、翌十二日午時、郪都に至り、肩輿を儀うて平都山に上り、仙都觀の故址を訪ひ、王方平、麻姑の洞等を探つた。麻姑といふは、古の仙女である。建昌の人で、道を牟州の東南の姑餘山で修めた。後漢の王方平が、蔡經の家に天上から降つた時に、麻姑を召して來たが、年の頃十八九位の好い女で、頂の中に髻があり、著物には文(アヤ)の模樣があるが、錦や繡ではない。坐が定つて行厨を進めたが、此の時

麻姑のいふには「接待以來已に滄海が三たび桑田となるを見たが、今復た海水が清くなつて、昔よりは淺くなつた」と。方平は天厨の酒を出して、蔡經の家人に飲ませたが、良久しうして盡きたので、千錢を餘杭の姥に與へて酒を沽はせた。姥は須臾にして一の油囊に酒五斗を容れて持つて來た。麻姑は鳥の樣な爪をしてゐたから、蔡經は之を見て、心の中に念ふには、背の癢い時に、之で以て爬いたら佳からうと。方平は蔡經の心中を知り、人をして蔡經を鞭うたせて曰ふには「麻姑は神人である。どうして左樣な事が出來るものか」と。宴が終つて後、方平と麻姑は天に昇つて去つたといふ事である。此の詩は其の麻姑の居たといふ洞を見て詠じたので、原と二首あるが、今其の前首を講ずる

神仙官府事紛然。懶漫誰能更學仙。但乞麻姑爬背癢。餘杭兌酒此中眠。

（字解）神仙官府とは、仙人の居る天上の役所。懶漫はなまけて、しまりの無いこと。麻姑の事は題意の所で述べた如くであるが、世に、麻姑の手を借うて癢所を搔く如くであるといふ諺が出來てゐる。爬は搔く、癢は痒とも書き、かゆしと訓む。餘杭は地名で、今は縣となつて、浙江錢塘道に屬してゐる。兌はかへること、物と物とを交換するをいふ。音はタイであるが、ダとして通用してゐる。丁仙芝に、十千兌得餘杭酒の句がある。

（意義）神仙とても、府官の仕事は入り亂れて煩しいもので、中々終日遊んでゐる樣な氣樂な事ではない。されば、懶けて締りの無い樣な事では、誰か能く更に仙を學ぶ事が出來ようや。たゞ麻姑を賴んで、背中の癢きを搔いてもらひ、餘杭の婆さんに酒を買つて、來てもらつて、此の洞の中で眠てゐる位より外に仕方がない。

（課說）會心偶筆に此の詩の前半を詳說していふ「世人は皆仙を學ぶといふが、殊に神仙の苦しみを知らないからである。既に官があれば各々其

の職があり、既に府があれば各々其の仕事があつて、各々其の職を掌り、各々其の事を司り、上より令する所があれば、下には承ける所がある譯で、紛々擾々として、了に閑を得る事は出來ぬ。甚だ我が輩の如き、嬾漫が性を成した者の、能く學ぶ所ではない」と。然して後半を換言して云ふ「たゞ仙姑に對し、美酒を飲み、攘みを爬いて、共に眠ることが出來たならば、亦天上人間の樂事を極めたと云ふもので、此れ正に漢の成帝の云はれた所の如く、吾此の溫柔鄉の中で老いんであつて、武帝の復た白雲鄉を求むるといふには、効ふ事が出來ないのである」と。

西陵竹枝〔自注〕今夷陵州。

〔題意〕西陵は西陵峽のことで、湖北宜昌縣の西北二十五里に在る。自注にもある如く、夷陵と名づけ、又彝陵とも書く。瞿塘峽、巫峽と共に三峽と稱せられ、其の長さが七百里に亙つて、早瀨が多く、水は急で、大江中の難所であるが、此の西陵に至つて、始めて緩くなつて平流となるから、俗に平喜壩といひ、蜀から舟行して來たものが、始めて相慶する。漁洋は十二日に平都山で麻姑洞を觀てから、舟を各地に泊し、十五日には夔州に抵る。白帝城は瞿塘峽の口に在り、永安宮は其の城の西に在る。乃ち蜀の先主劉備が、遺孤を諸葛亮に託した所である。翌朝、八陣の圖を觀、又杜少陵の祠や、瀼西の宅址を尋ねた。瞿唐は峽の入口で、奔流が電の如く激し、舟人の甚だ惧るゝ所である。巫山縣に至り、楚の襄王が夢に神女に會うたといふ高唐觀に登る。巫山の十二峰を望み見て巫峽に入る。巴東を經て秭歸に泊し、空舲峽、黃牛峽等の難所を過ぎて、二十日に此の西陵に來たのである。歐陽修の至喜亭記に云ふ「蜀の舟の此に至るものは、必ず酒を瀝み、再拜して相賀し、以て更生したとする。萬里の征人が、飽くまで三巴夔巫の險を歷て、此に至つて慰藉することを知るべきである」と。原作は四首あるが、今講ずる所は最後の一首

である。

荷燈百尺接秋河猶似秦兵駐綠蘿更說元宵好風景竹枝歌續采茶歌。（自注）元夕連袂唱竹枝采茶歌。七夕家家張荷葉燈云昔秦白起伐楚將燒夷陵望見城中燈火而止遂沿至今也。

（字解）荷燈は荷葉燈のことで、自注にある如く、七夕即ち七月七日の夜、家々で之を高く掲げる。蓮の葉を提燈の如くにし、其の中に火を點ずる燈火である。秋河は天の河。秦兵といふは、秦の將白起が、楚の襄王の二十年に西陵を拔き、二十一年に夷陵を燒いた事をいふのである。自注にある如く、初め白起が夷陵を燒かんとするとき、城中の燈火を望み見て、之を止めたから遂に沿うて今に至つたといはれてゐる。綠蘿といふは綠蘿谿のことである。歐陽修の夷陵に謫せられた時の詩に、江上孤峰蔽綠蘿。縣樓終日對嵯峨といつてある。夷陵の縣治の下で、峽江に臨む所を綠蘿

谿といふ。元宵は正月十五日で、此の日、種々の形の綺麗な燈火を點じて、精奇を競ひ、之を燈市といつてゐる。采茶歌は、我が邦に云ふ所の茶摘歌である。夷陵圖經に「黃牛、荊門、女歡、望州等の山から茶が出る」とある。又茶經に「採茶は二月三月四月の間に在る。其の日に雨があれば採らず、晴ればこれを採る」とある。陸游の詩に、采茶歌裏春光老、煮藥香中夏景長。とある。此處の采茶歌は、元宵に人々が袂を連ねて歌ひあるくのである。

（意義）七夕には、家々で荷葉燈を百尺も高い竿の先に掲げて、天の河にも接する程である。其の有樣は、丁度昔秦の白起が、夷陵を燒かうとして、此の夥しき燈火に驚いて之を止め、綠蘿谿に兵を駐めた時の樣である。併し此の七夕の景色よりも、更に元宵の風景の佳き事を說く。即ち其の夜は人々が袂を連ねて、竹枝の歌や採茶の歌を歌うて練りあるく。

（評說）此の詩は、調子が諧ひ和いでゐて、極めて諷誦に適する。謂はゆる竹枝の歌で、歌ふ爲に作つたのであるから、何うしても調子を第一とせな

ければならぬ。

襄陽口號

(題意)漁洋は、九月二十九日に成都を發し、十月二日、嘉州から舟に乘つて峽中の難所をも無事に過ぎ、其の二十二日に江陵に著した。茲に始めて舟を棄て、二十五日から騎行して北上する事となり、二十九日に襄陽に達した。襄陽は、今は湖北襄陽道に屬して縣となつてゐる。北に樊城があつて漢水を隔てゝ相對し、南北兵を用ふる時に、必ず爭ふ所となつてゐる。江の東に、秀色の滴らんとしてゐるのは鹿門、蘇嶺の諸山で、其の山下は龐德公、孟浩然、皮襲美が隱居してゐた處である。峴山は江岸に在つて、晉の羊祜の墮淚碑のある處、又西北群峰の南麓に、一水泓然としてゐるは習池で、山簡の日々醉倒した所である。口號とは、口ずさみと訓し、口に隨つて號び吟ずるをいふ。

豈有酖人羊叔子。更無悔過竇連波。殘碑墮淚迴文錦。一種銷沈可奈何。

(字解)酖人の酖は鴆に通じ、一種の毒ある鳥で、形は鷹に似、大いさは鴞の如く、毛は黑く、喙は長く、蛇や橡の實を食ふ。其の羽を浸した酒は、能く人を殺すといふ。羊叔子は名を祜といひ、叔子は其の字である。泰山南城の人で、晉の武帝の時に襄陽に鎭し、遠近を綏んじ懷けて、甚だ江漢あたりの人心を得た。其の軍中に在る時は輕裘緩帶で、身に甲を披ず、侍衞するもの數十人に過ぎなかつた。然して吳の陸抗と相對してゐたが、務めて德を修めて吳の人を懷けることにし、兵を交ふる毎に、日を刻して戰ひ、掩襲などの計を用ひなかつた。或る時、抗が疾んだら、祜が藥を遺つた。抗が之を飲まうとしたら、人が多く抗を諫めたのに、抗はいふ「豈に人を酖する羊叔子あらうや」と。之を飲んで疑はなかつた。竇連波は名を滔といい

ひ、連波は其の字である。前秦の苻堅に仕へて秦州刺史となつたが、其の妻の蘇蕙、字は若蘭といふが、滔の寵姫の趙陽臺といふを嫉んで、捶ち辱かしめたから、因て滔とも相忤ふ樣になつたので、滔が襄陽に移るに及んで、遂に獨り陽臺のみを携へて任に之き、蕙を家に遺しておいて、音問を斷つに至つたから、蕙は悔い恨んで、親ら錦を織つて廻文とし、詩二百餘首、計八百餘字を題し、縱横反覆して、皆文章を成す樣にし、名づけて璇璣圖といひ、以て滔に寄せた。滔は其の妙絶なるに感じ、禮を具へて蕙を迎へて、恩好すること愈々重くなつたといふ。殘碑・墮淚は、殘つてゐる墮淚碑といふ事である。羊祜が襄陽にゐた時、常に峴山に登つて遊んだから、祜が死んだ後に、襄陽の百姓が其の德を慕ひ、其處に碑を建てゝ歲時にお祭をした。其の碑を望むものが、羊祜の舊事を思うて淚を墮さぬものは無かつたから、時の人杜預が名づけて墮淚碑といつた。廻・文・錦・は今竇連波の條で說いた通りである。銷・沈・は消え沈む、卽ち衰へること。

（意義）豈に人を毒殺する樣な羊叔子があらうや。更に過を悔ゆる竇連波も今は無い。空しく殘されたる羊叔子の墮淚碑も、又蘭蕙の廻文錦も、共に昔の事となつて、同一樣に衰へて仕舞つたのを如何は仕よう。

（評說）會心偶筆には云ふ「羊叔子の德望や、蘇若蘭の才藻は、千古に二つとない。今は此の兩人も既に見る事が出來ない。乃ち其の謂はゆる墮淚碑といひ、廻文錦といふものも竝せて、一概に銷え亡びて仕舞つた。之を奈何んせんか。云々」と。

漁洋詩話に云ふ「余が襄陽懷古の詩に云ふ、云々、首句は陸抗の語で、次句は山谷の詩で、皆成句である」と。山谷の詩といふは、其の題「蘇若蘭廻文錦詩圖」の作で、云ふ、

千詩織就廻文錦。如此陽臺暮雨何。亦有聰明蘇蕙子。更無悔過竇連波。

顧嗣立の寒廳詩話には「阮亭先生の絶句に、末句に直に古人の成句を用ふるものがあるが、亦一體である」といつて、却憶題詩東澗老。夕陽粉本出。

關山とか、七字愛吟楊處士、亂堆漁舍晚晴時とかいふ詩を例に引いてゐるが、是は亦、前半が二句とも古人の成句である。翁方綱は此の詩を評して「此は先生の最も得意の筆である」といつてゐる。

西堂甘橘初熟招東癡

(題意)西堂といふは漁洋の居宅の中の西方の堂であらう。詩の中に我が西齋などいふ語もある。甘橘の甘は柑の字に通ずる。蜜柑である。橘はたちばな。東癡は、姓は徐、名は夜で、東癡は其の字である。初め、名は元善、字は長公であつたが、嵇叔夜の人となりを慕うて、更めて夜と名づけ。一字を嵇菴といつた。山東新城の人で、清朝となつた時、二十九歳で、諸生を棄てゝ隱居し、掘つた門、土で造つた室にすみ、迹を城市に絶つた。後、柴桑で、年七十三で死んだ。詩格は清峭で、東癡詩選といふがある。漁洋詩話に據れば、徐東癡は、漁洋の叔祖父の季木公の外孫で、漁洋とは外兄弟の仲である。此の作は卽ち漁洋の宅の柑橘が熟したから、倶に之を試食しがてら、一杯やらうと東癡を招いたのである。漁洋四十二歳の作で、原と二首あるが、前首は主として蜜柑を詠じ、後主は橘を詠じてゐるが、今は前の一首のみを講ずる。

昨宵霜信熟黃甘。小閣離離夕照酣。爲報故人須過飲。挂帆何必洞庭南。

(字解)霜信といふは、霜の知らせといふ事であるが、初めて霜の降つた事に用ひたのである。夢溪筆談に「北方に白雁といふがあつて、雁に似てやゝ小さく、色は白い。秋が深うなつてから來るが、これが來ると霜が降る。之を河北の人は霜信といつてゐる」とある。小閣は小さな高殿、卽ち題にある西堂のことをいつたのであらう。離離は、散らばりて盛んな貌。故人は昔ながらの友達。洞庭は卽ち太湖の事をいふのである。江蘇に在る大

きな湖水の名。併し又太湖の中に在る山にもいふ。此のあたりは蜜柑の好い種類があつて、洞庭柑といつてゐる。皮が細くて、味が美く、熟することが、尤も早い。其の種が洞庭山から來たから此の名があるといふ。張泌の過洞庭詩に、

征帆欲挂酒初酣。暮景離情兩不堪。千里曉霞雲夢北。一川霜橘洞庭南。

といつてある。

(意義)昨夜の初霜で蜜柑が色附いた。小座敷は離々として盛んに夕日が照り榮えてゐる。爲めに我が故人徐東癡にお知らせするが、是非に吾が宅を過ぎて一杯やつてくれ給へ。船に帆を掛けて遊びに出るのは、何も必ず洞庭の南でなければならぬといふ事はない。吾が住居でも秋が酣で、柑橘が盛りに熟してゐるから。

(評說)招。字の意が、十分に言ひ表はされてゐる所は、中々庸匠の及ぶべきでない。徐東癡の之に答へた詩は、

杭州五月綠皮香。未到黃紅已剝嘗。何似君家盆內實。得全晚節待林霜。

といふのであるが、是では詩格が甚だしく劣つてゐて、漁洋の作の脚下へも倚り附けぬ。

題黃鶴山樵畫〔自註〕已下四首。爲徐東癡隱君作。

(題意)黃鶴山樵、姓は王、名は蒙、字を叔明といひ、趙孟頫の甥である。文に敏く、工に山水人物を畫いた。元末の亂に遇うて、仁和の黃鶴山に隱れて、黃鶴山樵と號した。畫は王維を學び、縱逸多姿で、墨法は秀潤であつた。倪瓚と詩畫倶に名を齊しうした。洪武の初めに泰安州の知事であつたが、事に坐して獄に下つて死んだ。自註に已下四首とあるは、此の詩が二首あり、次に倪元鎭の寒林小軸の絶句が一首、朱璧の揭鉢圖の長篇が一首あるのである。共に徐東癡の爲に作つたのであるが、此の詩は黃鶴山樵の畫に題したので、二首の中の後首である。

憶昨茅齋雪霽時。地爐松火夜談詩。春風騎馬長安去。如此溪山坐付誰。

(字解)昨は昔の意。地爐は地に穿つて爐としたもの。松火は、老松の脂の多いものを燒いて燭とするので松明と書し、たいまつと訓ずる。坐はそゞろにと訓ず。何のいはれも無しに、其の儘に等と解すべきである。

(意義)此の圖を見るにつけ憶い起すは、往日茅葺の書齋で雪の霽れた時、地爐に松を焚いて、夜、詩を談じた事である。然るに今春風の好時節となつて、却つて自分は馬に騎つて長安へ去つて行く事である。此の黃鶴山樵の畫きし如き溪山をば、坐ろに誰に預けておくべきであるか。定めて君獨り後に留りて勝遊を肆にせらるゝ事であらう。

(評說)漁洋が此の詩を題せし時は、恰も長兄西樵の次子啓浣の喪の服が闋り、父の命を以て將に長安に向つて出發せんとしてゐたので、畫中の景色よりして、往日徐東癡と歡話に耽つた事を思ひ起し、別離を惜む意を題畫によせて、面白く寫し出したのである。黃鶴山樵の無聲の詩は漁洋の有聲の畫と相俟つて、讀者をして無限の興趣を惹起せしめてゐる。

爲許生洲比部題梅淵公畫。

(題意)許生洲は名を孫荃といひ、字を四山といふ。生洲も亦其の一字である。江南合肥の人、康熙の進士で、鴻博に擧げられ、翰林院侍講に至り、又戶部侍郎を勤めた事もあり、後に陝西に學政を督した。生れつき學問が好きで、詩、古文、詞を工にし、愼墨堂詩集といふがある。比部は官名で、法制等を掌る。此の頃生洲は此の官であつたらしい。梅淵公は名を清といひ、淵公は字で、又遠公ともいひ、潤公ともいふ。瞿山と號した。江南宣城の人で、順治の擧人である。意を仕途に絕ち、詩で江左に名があつた。尤も書畫を擅にしてゐたが、漁洋は、其の山水を妙品に入り、松を

神品に入ると稱めた。此の詩は康熙十五年丙辰、漁洋四十三歲の作である。

柏梘山中舊草堂。溪流淼淼樹蒼蒼。白雲谷口不飛去。臥聽松風春晝長。

(字解)柏梘山は宣城に在る。南畿志に「華陽と連り、文脊の陰に屬し、山谷が深邃で、兵亂のときに人が多く此に避けた。漁洋の瞿山畫松歌に、瞿山翁所居。乃在柏梘深山中。といふ句がある所より見れば、瞿山は又この山に居たのである。淼淼はべウ〳〵で、大水の貌である。

(意義)梅瞿山が柏梘山の中に舊と構へてゐた草堂の景色を寫し出したもので、溪川の流はひろ〳〵としてゐ、樹木は蒼々と茂つてゐる。白雲が谷の入口を封じて、飛び去らず、横臥して松風の謖々たるを聽いてをれば、春の日の中は殊に長い。

(評說)會心偶筆に云ふ「梅淵公は、宣城の柏梘山に隱れてゐた。畫中の景は乃ち是で、自から隱趣を寫してゐる。堂を遠つて溪あり、溪の上に樹多く、樹の外は卽ち山で、山中よりは雲を出す。溪流は淼々、樹色は蒼々、白雲は飄々、松風は謖々として、皆以て畫くべきであるが、淸晝の長きは畫く事が出來ぬ。晝の長きを形容するは、一の臥の字にある。身を、羲皇の上に置けば、則ち日月は信に長い」と。

秦中凱歌

(題意)秦中は關中である。古の秦國の地であるから、秦中といふ。今の陝西省である。凱歌はかちどきの事、卽ち戰に勝つた時に唱へる歌である。此の兵亂は、陝西提督王輔臣といふものゝ叛を平げたのである。是より先、康熙十三年甲寅に吳三桂等三藩が叛いた時、巴蜀も警を告げたから、朝廷では尙書莫洛をして三秦を經略させた。莫洛は師を督し

て四川に進み、王輔臣に檄文を送つて前鋒たらしめた。相距ること五十里。天が寒くて雪が降り、士卒が饑ゑ凍えるといふ有樣であつた。然るに、輔臣は、臘月四日、俄かに衆を鼓して大いに噪ぎ立て、主將を攻め殺して叛き、歸つて平涼に據つて三桂に應じた。三桂は之を封じて平遠大將軍、陝西東路總管とした。附近を攻め陷して屢々官軍を挫ぎ、時に勁敵と稱せられてゐた。越えて十五年丙辰に至り、特に大將軍圖海に命じて征討せしめたが、海は時の宜しきを度り、親ら枹を執つて鼓うつて激勵したから、大小三軍のものが、誓つて必死を以てし、將士が勇を奮ひ先を爭うたから、一以て百に當らざるなく、呼聲が天地を動かし、砲矢齊しく發して、賊衆二萬を欿り殺し、大いに之を打ち破り、又河を渡りて大いに戰つて、再び之を打ち破り、遂に其の屯を拔いたから、輔臣は窮蹙して降を請うた。十六年辛酉、吳三桂の孫世璠が自殺して、三藩の亂が全く平ぐに及び、輔臣も亦隨つて京に入る道で死んだ。

原と此の王輔臣といふは、山西蔚州の人で、馬鶴子といひ、驍勇で善く射、馬上にあつて、飛ぶ樣であつたから、鶴子と名づけられたのである。明末の騷亂に、姜瓖といふ者と同じく、流賊高迎祥の部下となつたが、闖賊李自成が、羅汝才及び迎祥を攻め殺すに及び、其の衆を幷せて、姜と二人、遂に清朝に降つた。瓖が出でゝ大同に鎭したとき、鶴子は其の副と成つた。後、姜瓖は江右の金聲桓、廣東の李承棟、福建の郭天才の兵を擧げんとするを偵ひ知つて、復た城に據つて叛いた。然るに清の大軍が來り攻めて、勢が甚だ危くなつたから、鶴子は瓖を殺し、城を獻じ、姓名を王輔臣と改めた。歸順の功によつて、滇鎭より超えて陝西提督に上るに至つたのであるが、此に至り三藩の叛に與して、遂に破れたのである。原作は十二首。

天上黃河萬里來。巨靈高掌抱雲臺。遙看丞相。

行營過日射潼關四扇開。（自註）韓文公詩。日出潼關四扇開。相公親破蔡州廻。

（字解）天上黄河といふは、李白の、黄河之水天上來。の句から來てゐるので、天上より流れ來る黄河といふ意。巨靈とは、大いなる神靈といふことで、黄河の神樣をいふ。水經の註に「華岳は本と一つの山であつたので、河水が之を過ぐるに當つては、曲つて行つたのであるが、河神の巨靈が、手で其の上を擘き開き、足で其の下を蹋み離し、中分して二つとして、河の流れを通した」とある。高掌は高くさゝげた掌である。明の李攀龍の游太華山記に「巨靈の掌が、東北の隅より出づること二十里で、是が雲臺峰に淳いてゐる。丁度杓の斗に在る樣なものである。三峰を俯し、中原を望み、黄河が塞外から來るのを見る」とある。雲臺は雲臺峰で、その山の兩つの峰が崢嶸としてゐて、四面が懸絶し、上には目出たい雲を冠し、下は地の脈に通つてゐる。巍然として獨り秀でゝ、靈れた臺の樣な所があるから名を得たのである。丞相は自ら百官をすべて天子を輔佐する最高官、我が邦でいへば太政大臣とか、又は今の總理大臣である。自註にも、相公親破蔡州廻。といふ韓退之の句が引いてあるから、大臣が凱旋せられたのであるが、其の誰であるかは分らぬ。行營は治軍也の意で陣屋を見廻ること。營を行ると訓む。潼關は關所の名で、後漢の建安年中に始めて建てたものであるが、今はこゝに潼關縣治がある。西は華山に薄り、南は商嶺に臨み、北は黄河を隔て、東は桃林に接してゐて、歴代皆要地となつてゐる。四扇の扇は扉で、四枚の觀音開きになつた扉である。

（意義）黄河の水は天上より萬里も流れて來て、勝れたる神樣が、高く掌を擎げて雲臺峰を抱いてゐらるゝ樣である。遙かに看れば、丞相が陣屋陣屋を見舞はつて過ぎて行かれる樣で、太陽の光は、潼關を射るが如く照し、關所の四つの扉が開けらるゝ事である。

（評説）會心偶筆に「黄河、華嶽は、皆是營をめぐるために過ぎられる處。日射

の句は、軍容の赫奕たるを形容したので、未だ秦中に至らないうちに、賊の氣が已に之が爲に奪はれて仕舞ふ」とある。

沈德潛は、其の著國朝詩別裁集に、此の詩の原作十二首の中、其の半分の六首を取つてゐる。然して之を總評していふ「此は王輔臣、卽ち馬鶴子の叛いた時に、秦隴が震動したが、大學士圖海、靖逆侯張勇、奮威將軍王進寶、提督孫思克が討伐して之を平げた。因て凱歌を作つたのである。前明の徐文長や沈嘉則などの諸凱歌は、鋒利でないではないが、皆書生の習がまだ除かれてゐない。此に對して廟堂の作であることが知られる」と言つてゐる。尙ほ漁洋の居易錄を見れば「予昔、平涼凱歌を作つて、河西三將云々といつたが、曾て御覽を經た」と云つてある。

孫寶侗が、潼關四扇の語を駁した事は、卷下四十葉裏で述べておいた。尤も寶侗の評したのは此の句ではなく、高秋華嶽三峰出。曉日潼關四扇開。であるが、此の句に對しても言ふ事が出來る。尙又、日射潼關と曉日潼關とは殆んど重複になつてゐるが、漁洋に複句のある事は、已に卷下九葉裏で言つた通りで、甚だ面白くない事である。併し此の句は中々佳い句である。

悼亡詩（自註）哭張宜人作。

（題意）悼亡といふは妻を喪ふことをいふ。晉の潘岳が、妻の死んだ時に悼亡の詩三首を作つたが、世に傳唱せられたから、是より悼亡といへば、妻を喪つた事になつて仕舞つて、其の他の者のときは悼亡とはいはず、悼亡兒とか、悼亡女などの如く謂はねばならぬことになつた。自註に張宜人とあるは、漁洋の夫人張氏のことで、此の康熙十五年九月に沒したのである。張氏といふは鄒平の人で、順治七年庚寅の八月、十四歲で漁洋に配した。漁洋は時に十七歲であつた。琴瑟相和すること二十六年であつたが、忽ち腫脹の症を得て終に起たず、享年四十歲を

以て、二十四歳、十五歳、五歳の三子を遺して逝つたのである。漁洋は詞人の恒として疎散で、家人の生産を問はざるを、張氏が能く勤儉を以て内助し、漁洋をして其の好む所を専らにすることを得しめたのであるが、今や室に入つて人を思へば、流芳已に歇んで、遺掛が壁に在る。嗚呼之を奈何んせん。宜人といふは、清朝の制で、五品以上の者の妻は、封せられて、宜人と號せらるゝ事になつてゐる。張氏は漁洋の蔭によつて宜人に誥封せられたのである。原作は三十五首あつて、備さに其の平生を敍し、哀悼の意を表してゐる。精華錄は其の中の二十六首を採錄してゐるが、茲には其の一首だけを選んで講ずることにする。

藥爐經卷送生涯、禪榻春風兩鬢華。一語寄君聽取不使兒女衣(自註於戲切)蘆花。

(字解)藥爐經卷は王維の故事である。王維は妻を亡くして、娶らざること三十年、一室に孤居して、室の中はたゞ茶鐺藥爐經案繩床のみであつた。禪榻の禪は坐禪、榻は牀の狹くて長いものをいふ。腰掛である。卽ち禪榻は坐禪する腰掛をいふ。此は杜牧の今日鬢絲禪榻畔茶煙輕颺落花風といふ句から來てゐる。華は髮の毛の白くなつたのをいふ。兒女とは子供達のことをいふので、此の時張宜人には男子が三人あつた。長子の啓涑は二十四歳で、初めの妻を亡ひ、繼いで娶つてゐた。次子啓渾は五年前に十七歳で死し、三子啓汸は十五歳、四子啓沂は六年前に三歳で死し、五子啓汧は五歳であつたので、卽ち長子の二十四歳、三子の十五歳、五子の五歳とが生存してゐた。衣の字は、衣裳のときは平聲五微の韻で、衣錦などの如くきるのときは去聲五未の韻である。こゝは著るの意である。自註に於戲切とあるは、去聲として讀むべきことを註したのである。蘆花はあしの穗花である。閔損の後母が、蘆花を綿に代へて、損の著物に入れて著せたから、損が父の馬を御するとき、寒さに耐へずして、思はず手綱を

取り落したので、父は尋ね問うて之を知り、後妻を逐ひ出さうとしたのを、損は諫めていふ「母在せば損一人寒けれども、母在さずなれば母の生み給ひし弟も寒いであらう」と云つた事は、有名な話である。

(意義)王維は、藥を煮る爐、お經の卷物を伴として、娶らざりしこと三十年であつたが自分も此くの如くにして、生涯を送らう。坐禪の榻に腰掛けて悟りを開いた如く、往年の夢が醒めて見れば、輭々として吹く春風の中に、兩方の鬢の毛は、早や白うなつて仕舞つてゐる。たゞ一言葉、そなたに告げるから、そなたは能く聽き取つて下されよ。それは外でもない。後添を娶つた爲に、子供達に蘆花を著せる樣な、悲慘な事はせぬから、安心せよといふ事ぢや。

(評說)我が齋藤拙堂は、此の一首を評して「傷心の語で、人をして凄然たらしめる」といつてゐるが、信に然りである。

袁枚は、隨園詩話に於ていふ「詩人の筆が太だ豪健であると、往々情を言ふに短であるし、好んで典を徵する者も、病は亦同じである。卽ち悼亡の詩の如きは、必ず纏綿婉轉であつて、方に合作と稱せられる。東坡の朝雲を哭するは、味が蠟を嚼むに同じいが、是は筆が能く剛くて、能く柔かでないからである。阮亭の亡妻を悼むのも、浮言が紙に滿ちてゐるのは、詞が太た文であつて、意が轉た隱れるからである」と。蓋し隨園は才の人であるから、此の點に於て阮亭に慊らぬ所があり、阮亭の詩を評して、一代正宗才力薄。といつてゐる程である。此の語がある所以であるが、阮亭は阮亭としての才があつて、隨園とは其の才を用ふる所が違つてゐるのである。卽ち隨園は性情を主として、著想の新奇を競ふから、其の才が表面に露はれてゐるが、阮亭は神韻を主としてゐるから、構想の上に於ては、或は爛熟に陷る事を免れぬが、其の調子の佳い所は、百千誦しても厭くを知らぬ。阮亭も亦一種の才である。

陸以湉は、冷廬雜識に於て、悼亡の詞につき、黃莘田の作を稱して「情は眞

に、語は摯で、悽惋にして人を動かすこと、遠く王阮亭の作に勝る」といつてゐるから、今其の中の二三首を摘錄して見よう。

爲儒盼至爲官後。依舊辛勤百事乖。錯嫁文人更誰怨。詩書貽累到裙釵。

每爲遷客滯天涯。萬里寒更鬢有華。沒齒一言忘不得。七年除夜五離家。（自註）余己丑下第出都。後客汴中三載。莊孺人除夕寄書有萬里寒更三逐客。七年除夜五離家之句。時孺人歸余七年矣。

鹿門卽是白雲鄉。浪向紅塵約一場。多少寒盟言在耳。不堪閒坐細思量。

殘燈欲滅未明天。病骨哀顏照獨眠。早晚急營三畝地。與君同穴不多年。

冷廬また云ふ（按ずるに、中州集の秦略の悼亡詩をば、元遺山は、其の高きこと時輩を出づと稱してゐるが、以て黃の作に視ぶるに、安んぞ今人の古人に及ばざるを見ようや）とて秦略の詩をも錄してゐる。曰く、

自古生離足感傷。爭教死別便相忘。荒陂何處墳三尺。老眼他鄉淚數行。多事春風吹夢散。無情寒月照更長。還家恰是新寒節。忍見堂空紙挂牆

曹正子邀同家兄子側及諸君豐臺看芍藥晚過祖氏園亭三首。

（題意）曹正子は、名を廣端といひ、正子は字で、一字を玉淵といひ、直隸河間の人で、官は主事であつた。邀同は迎へて一所にする。家兄子側は漁洋の仲兄士祐、字は子側のことである。詳しくは卷上十葉表西樵の條下、及び同卷四十葉表家兄禮吉の條下で述べておいた。豐臺は北京の西南に在る。京師の花を種ゑる所で、芍藥が最も盛んである。周筠の析津日記に「芍藥の盛んなこと、舊とは揚州を數へてゐた。劉貢父は三十一品を譜し、孔常父は三十三品を譜し、王通父は三十九品を譜して、亦瑰麗の觀であると云はれたが、今は揚州には遺れる種が絶だ少くて、京師の豐臺には、畦を連ね畛を接して、市に倚擔する者が、日に萬餘莖である。惜むらくは好事の者の、圖して之を譜することの無いのであ

る」と。朱彝尊の日下舊聞に據れば、金の時に郊の祭をする臺が南城の外にあり、豐宜門といふが、金の南門であつたから、疑ふらくは豐臺とは、拜郊臺をば、門を豐宜といふに因て、名づけて豐臺としただけだといふ事である。祖氏園亭といふは、京城の西南の右安門外十里の草橋に在つて、舊と中官の別墅で、水石亭林、一時の勝を擅にしてゐた。此の詩原と八首あるが、今其の三首を採つて講ずる。

依然春草樊川路、並馬來過覆盎門。記得城南、天尺五。綠蕪紅藥水邊村。

(字解)依然はもとのまゝ又は昔のまゝと解する。樊川は陝西長安縣の南にあつて、次にいふ韋曲、杜曲などいふ所もあり、名勝の地である。併し此は豐臺が京城の西南にあるから、昔の都の長安の南の樊川を以て之に比したのである。覆盎門も長安城を南に出る東の頭の第一門をいふのであるから、之を北京の南門である永定門か、其の西の右安門あたりに比して謂つたのである。城南天尺五といふは、唐代に韋氏杜氏といふ人望ある家柄があつて、韋氏の居る所を韋曲といひ、杜氏の居る所を杜曲といひ、共に長安の南に在つた。曲は折也と注して、山や河の曲り角をいふ。韋曲は皇子陂の西で、東西は龍首山に倚り、南は神禾山に面し、潏水が其の前を遶つて、樊川第一の名勝である。韋曲の東に南杜、北杜があり、南杜は杜固といひ、北杜は杜曲といつて、何れも皆名勝の地である。當時の諺に「城南の韋杜は、天を去ること尺五である」といつた。天は天子の家で、之を去ること尺五といふは、甚だ遠からぬをいふ。卽ち韋氏杜氏の豪奢なことは、天子を去ること遠くないといふ意である。綠蕪は綠色の雜草の茂つてゐる所、紅藥は紅の芍藥である。

(意義)昔のまゝに春草の生えてゐる樊川の路をば、家兄をはじめ諸君と、馬を並べて來て、覆盎門をば通り過ぎた。昔已に城南の韋曲杜曲は、天を

東聲社非賣品

去ること尺五であると噂された程の處であるが、今一たび此に遊びに來て、綠の草叢や、紅の芍藥が、水邊の村を點綴してゐる風景は、深く我が心に記憶せられて仕舞つた。

(評說)詩中に畫がある。然して畫手では、迚も描いて此の境に到る事は出來ない。殊に綠蕪紅藥の一句は、初學の手本とすべきである。

陂塘點點烏犍出夏木陰陰白鳥飛也似江南。
好風景水田一帶學僧衣。

(字解)陂塘は、音がヒタウで、池のつゝみをいふ。點點はばら〳〵と散つてゐること。烏犍の烏は黑いこと、犍は去勢した牛をいふ。陰陰は茂つてかげをなす貌。王維の詩に、陰陰夏木囀黃鸝とある。也はまたと訓み、發語の辭である。亦に似てゐるが、太だ輕い。一帶はひとつゞき。水田の四角に劃られてゐるのが、幾つとなく續いてゐる樣は、僧衣卽ち袈裟に似てゐるから、袈裟を一名水田衣といふ。

(意義)池の塘に、ちらほらと黑い牛が遊んでゐる。夏木立が陰々と茂つて、其の邊りに白い鳥が飛んでゐる。此の前半は對句法を用ひたから、第一句は韻字を踏ます、烏犍出と七字目を仄にした。是は謂はゆる踏落しである。其の有樣は、また江南あたりの好い景色に似てゐて、水田が一帶に、袈裟を眞似て作られた樣である。

(評說)顧嗣立の寒廳詩話に云ふ「阮亭先生の謂はるゝに、林君復の詩の、陰沈畫幅林間寺、零亂菜秤湖上田、といふは、景を寫すことが最も工である。程孟陽に句あり、曰く、古寺正如晉壁畫、層湖都作水田衣、と。林に本づいてゐて、工なことは又之に過ぎてゐると。嘗て絶句を作つて曰く、陂塘云々と。蓋し孟陽の句を用ひたのである」と。

沙禽一一事高格煙柳斜陽初弄姿更愛風標。

東京 雄聲社 非賣品

兩公子水紅花外立移時。[自註]晚晴賦白鷺潛來兮邂逅風標之公子。

(字解)沙禽は沙の處にゐる鳥。高格は氣高い樣子である。弄姿は、なほ態を作すといふが如く、いろ〳〵の態をなすをいふ。風標は、しながらとか、きりやうとか譯する。公子は爵位ある人の子。風標公子といへば鷺のことである。是は自註にある如くで、杜牧の撰した晚晴賦といふものから來てゐる。邂逅は輕んじ視るをいふ。一句の意は、白鷺が潛かに來て、器量ある公子を視下げてゐるといふのである。然して是より風標公子といへば鷺の異名となつた。水紅は荊草ともいひ、荊の字を又蓼とも書く。和名をおほげたでといひ、大毛蓼の字を當て、又いぬたでといひ、犬蓼の字を當てる。春、生えて、高さが六尺にもなり、葉は互生して柔かで、毛が長く生えてゐる。秋の半に穗を垂れて淡紅の花を開くが、常の蓼よりも大きい。

(意義)沙原にゐる鳥は一つ〳〵氣高い樣子をしてをり、煙れる柳は、夕日の頃になつて、初めていろ〳〵の素振をなしてゐる。更に愛すべきは、二羽の白鷺が、大毛蓼の花の外に、いつまでもぢつと立つて、時を移してゐることである。

(評說)此の詩も亦畫の如き景色を寫してゐる。併して平易な詩であつて風格が極めて高いから、前の二首と共に、初心の人の模楷とすべきである。尙ほ此の詩も、前の詩と同じく第一句を踏落しにしてゐる。さうして是は對句にもなつてをらぬ。

爲尤展成悼亡[自註]時予喪張宜人三載矣。

(題意)尤展成のことは、本卷十六葉裏で詳しく述べておいた。其の悼亡のことは、悔菴年譜に云ふ[康熙十七年、婦の曹氏が病んで亡くなつた。予驚き痛んで絶えなんとした。珍兒をやつて喪に奔らせ、歸つてから、滴る所の涙を墨に和して文を草し、祭を致し、幷せて行述一篇と悼亡

の詩若干首を撰したが、輦下の諸公が、見て之を哀しんで、皆輓章を賦して予を唁つてくれた。今、刻して哀絃集に入れた」とある。展成撰する所の先室曹孺人行述に據れば、曹氏は諱を令、字を淑眞といひ、年十八で展成に歸いだので、端莊淡靜の人であつたといふ。又、其の死んだのは、康熙十七年戊午九月十九日で、享年五十八、孺人を贈せられた。男二人、女三人。男は長を珍といひ、次を瑞といひ、共に既に妻があり、三女亦それ〴〵嫁いでゐた。展成の悼亡の詩は、絶句六十首、律十首を始め、種々の作があつて、夥しい數に上つてゐる。都下諸公の輓詞は、詩文詩餘を併せて五六十家に達し、漁洋の外に知名の士が澤山ある。其の總てを合せ刻して哀絃集といつてゐる。題の下の自註に云ふ漁洋の妻張宜人を亡つたのは、前に述べた如く康熙十五年であつて、今年は丁度三年目に當つてゐる。原作は三首あり、精華錄には二首を取つてゐるが、今は其の中の一首を講ずる。

三年明月鑒虛帷。那更吟君惆悵詩。不分阿灰腸斷句。黃昏微雨畫簾垂。

（字解）鑒は照す。惆悵はチウ、チャウと讀む。いたむこと。不分は、杜詩に、不分桃花紅勝錦。生憎柳絮白於綿。とある。三浦梅園の詩轍には「古來生憎をあなにくや、不分をねたいかなと訓せり。晉山氏の抄に、不分の分を忿と見て、不分は卽ち不忿なり。正に是忿る意であるといへば、俗語に好き事を不好といふ類で、腹立ちやなど訓すべし」といひ、釋六如の葛原詩話には「杜詩顧註に、不分は卽ち不忿なり。正に是忿る意である。又蕉中師は曰く、分明に忿るに勝へざる義である」といひ、又「蓋し其の人を惱すを罵ること、猶ほ諺に、愛すべきものを謂うて、反つて憎むべしと曰ふ如くである」といひ、津坂東陽の夜航詩話には「分と忿と通ずる。豈の字を加へて看て、豈に忿らざらんやと訓む。忿るに勝へざるを言ふ」といひ、三書略ぼ相同

じである。卽ち分は仄聲で、忿に通じ、妬ましやとか、腹立たしやとか解するが最も好い。阿灰は唐の張禕の猶子で、名を曙といひ、阿灰は其の小字である。張禕に愛姫があつたが、早く逝つたから、姪の阿灰は、其の悲を增すを思うて、浣紗溪の詞を爲つて、机の上に置いて去つた。禕が朝廷から回つて之を見て、覺えず慟哭して曰ふ「此れ必ず阿灰の作る所であらう」と。詞に云ふ。

枕障薰爐冷繡幃。二年終日苦相思。杏花明月爾應知。　天上人間何處去。舊歡新夢覺來時。黃昏微雨畫簾垂。

(意義)自分も妻を亡つて、已に三年の間、明月は虛しき閨の帷を照してゐるに、何うして更に君の悼亡の痛ましい詩を吟ずる事が出來ようぞ。彼の阿灰の作つた黃昏微雨畫簾垂といふ腸を斷つやうな句こそ、實に腹立たしい次第であるが、亦如何とも詮方ない。

(評說)會心偶筆はいふ「室の中の人が去つて、月の空しき床を照すこと、今已に三年である。我が悵ましさは、已に說くことが出來ないのに、今又展成の悼亡の詩を見ては、豈に復た耐へられようや。展成の悼亡の詩卷の中に幷せ載せて、諸人の輓詞があるが、阿灰の吟した所の黃昏微雨の句に異らず、人をして之を讀ましむれば、益々哀慟を增させる故に不分といつたのである。不分といふは、奈何ともすべき無くして、轉た其の多事なるを恨むやうなのである」と。

題龔節孫種橘圖

(題意)龔節孫は、名を勝玉といひ、節孫は其の字である。宜興に家してをり、太學生である。種橘圖は、蘇東坡の語に本づいて描いたものである。東坡云ふ「吾が性、橘を好むから、陽羨において、洞庭に近い處に、一小園を買つて、橘三百本を種ゑようと思ふ」と。然し東坡の此の園は出來な

かつたが、奠節孫は此の時、居を陽羨に移したから、此の語に由つて圖を爲り、名人の詩詞を乞うたのである。陽羨は縣の名で宜興縣の南五里の處である。此の詩原と二首ある。

會稽內史風流甚三百封題引興長何日扁舟洞庭上與君小摘滿林霜

(字解)會稽內史といふは、王羲之の官である。羲之は右軍將軍、會稽內史になつた。會稽は郡の名で、今の江蘇の東部、浙江の西部の地である。內史といふは、時により變遷があつたが、此の頃は郡守の如きものである。羲之が晩年に謝萬に與へた書に「頃ろ東に遊んでより還り、桑や果物を植ゑたが、今は盛んに榮えて來た。諸子を率ゐ、弱孫を抱いて、其の間に遊覽し、一味の甘きがあれば、割いて之を分けて目前を娛しましめ、子孫を敎養するに、敦厚退讓を以てしようと思ふ」などゝある。三百封題といふは、右軍帖に、「奉橘三百枚。霜未降。未可多得。」とあるから、韋蘇州は之を取つて、書後欲題三百顆。洞庭須待滿林霜。とした。卽ち三百は橘三百顆をいふので、封題は之を他に送る爲めに、封じて上に字を題したので、此は其の法帖を謂ふのである。洞庭の處にも述べておいたが、柑橘は霜を畏れるから、南地の暖かい地でも、餘り多く穫れぬが、惟だ洞庭のみは霜が多いけれども、之が爲めに損せないのは、其の地が四面皆水であるから、水氣が上り騰つて、尤も能く霜が避けられる故に、其の質が最も佳い上に收穫も亦多いと謂ふことである。小摘は小しく摘み取るのであるが、善いものを揀んで取るのである。滿林霜は前の韋蘇州の詩に有る語で、滿林の霜によつて色附いた橘の事である。

(意義)會稽內史の王羲之は、風流なる事甚だしい。然れば自分は、其の三百顆の橘を封じて題をした所の法帖を見る毎に、興味を引くことが長い。然るに今、此の橘を種ゑる圖を見るに至つては、益々遊情を動かす事が

甚だしいから、何時かは君と相約して扁舟を洞庭湖に泛べ、君の住家を訪ねて共に滿林の霜に熟した橘を揀り取つて味つてみたいと思ふ。

(評說)會心偶筆に云ふ「此は節孫の畫が、右軍の書にも比すべきものである事を美みし、橘三百を奉る帖を見る毎に、常に爲めに興を動かす事であるが、今此の畫を睹て、益々復た勃々とした。便ち當に相約して、期を擇んで往つて、君と小摘して、快く一飽を取るべきである。節孫は宜興に家したので、洞庭湖の上りにあるから、かく云つたのである」と。

爲愚山侍講題嚴蓀友畫

(題意)愚山は、姓を施、名を閏章、字を尙白といひ、愚山は其の號であつて、江南宣城の人である。順治六年己丑の進士で、江西參議道に歷官し、博學鴻詞に擧げられ、侍講を授けられた。漁洋とは親しい間柄で、漁洋は大いに推服してゐた。嘗て評して曰ふ「施侍讀の五言の詩を讀んでは、

其の溫柔敦厚を愛する。一唱三歎、風人の旨がある。其の章法の妙なることは、天衣の縫ふ無きが如く、園客の獨繭の如くである。云々」と、又云ふ「予嘗て暇日を以て、咸舊、山木の二集を撰して、錄する所の愚山の詩は多かつたが、意に猶ほ未だ盡きないから、因て別に五言近體を取つて、摘句圖を爲つて、好事の者に傳へた」と。雙谿、草堂、學餘等の集がある。

嚴蓀友は、名を繩孫といひ、蓀友は字で、藕漁と號した。司寇の一鵬といふ人の孫で、博學鴻詞に擧げられ、檢討に官し、中允に遷つた。世祖が嘗て內直の諸臣に、布衣の四人の名字を問はれた事があつたが、それは李因篤、姜宸英、嚴繩孫、朱彝尊であつた。後、鴻博に擧げられた時には、獨り姜は與らず、嚴は目疾であつたから、僅に八韻の詩を爲つたのであつたが、帝は特に李朱と同じく、檢討を授けしめられた。其の墓志は朱彝尊が書いてゐるが、中に云ふ「君、歸田の後は、門を杜ちて出でず、堂を築いて雨青草堂といひ、亭を佚亭といひ、布くに窠石を以てし、小梅方

竹を植ゑ、一室に宴坐するを常としてゐた。君の文を爲るは、定まつた格は無く、前人を踏襲するを屑とせず、適々其の意の如くして止める。詩は沖融恬易で、矯激の言は鮮く、慢詞小令は、雅であつて豔でない。少うして書に工で、晉唐人の室に入つてゐた。兼ねて繪事を善くしたが、晩歳には、詩文畫を請ふ者があるも應せず、暇あれば地を掃ひ香を焚いてゐるのみであつた。年八十で死んだ。著はす所に秋水集といふがある。是の詩は漁洋が、施愚山侍講の爲めに嚴藕漁の畫に題したもので、康熙十八年己未、漁洋四十六歳の作である。

山氣化雲雲作煙幽人蓑笠不知年清溪曲逐楓林轉紅葉無風落滿船

(字解)一々摘み出して解せねばならぬ程の語が無い。清溪は地名にもあるが、此は必ずしも或る地を指して言ふ程の事も無く、たゞ清らかな溪と解しておけば可い。

(意義)山の氣は雲に化し、雲はまた煙となる。其處に幽人が蓑笠を著けてゐるが、今はいつの代で、如何なる年であるか、人間の事は全く知らない樣である。清溪の曲り角は、楓の林を逐うて轉じてゆき、紅葉が聲も無くひら〳〵と落ちて船に滿ちる。

(評說)鄧漢儀は、詩觀の中に評して云ふ「景あり」と。我が齋藤拙堂は、絶句類選の中に評して云ふ「意思が閒淡である」と。又伊應鼎の會心偶筆には云ふ「此は則ち直ちに畫の中の景色を述べて、一つの筆をも添へず、一つの意をも設けず、自らに意の外に超妙を得てゐる。是を題畫の正格とする」と。

供奉某君歸吳門索詩

(題意)供奉は官名である。天子に御附してゐる官で、唐の代には一材一

藝あるものは、内廷に供奉することが出來たから、翰林供奉などいふ名があつた。清朝では、翰林の詰めてゐる南書房に、行走といつて專官でなくゐるものを内庭供奉といつた。吳門とは吳のことをいふ。門は郭の門をいふ。此の詩は供奉の官の某君が、吳に歸るについて、詩を吳れと索めたから賦したので、原とは五首ある、精華錄には四首を採つてゐる。今、此處で講ずるのは、最後の一首である。康熙十九年庚申、漁洋四十七歳の作である。

一片青山短簿祠。夕陽花塢帶茅茨。歸心便逐江鴻去。已過橙黃橘綠時。

(字解)短簿祠といふは、東山廟のことである。晉の王珣を祀つた祠で、江蘇吳縣の虎丘の東麓に在る。王珣は、桓溫の爲に主簿の役を勤め、背が低かつたから、人が之を短主簿といつた。同時に郄超といふ者が記室參軍となり、髯があつたから髯參軍といつた。桓溫は共に甚だ之を敬重してゐたが、府中の者が語を作つていふ「短主簿、髯參軍。能く主を喜ばせ、能く公を怒らせる」と。此の短主簿の祠であるから、略して短簿祠といふのである。短簿祠のある虎丘は、泉石の奇勝で、上に寺院があり、登臨すれば吳縣の全城が一目に見えて、蘇の勝地になつてゐる。花塢の塢は音がヲで、小さい土手のこと。周圍に小土手を築いて、其の中に花を植ゑたのを花塢といふ。茅茨はかやぶきをいふ。橙黃橘綠時は、蘇東坡の詩に、一年好景君須記。最是橙黃橘綠時といふのがあるが、それから取つたのである。

(意義)一片の青山なる虎丘には短主簿の祠があり、夕日の頃、花の栽ゑられてある小土手には、茅葺の屋根が見える。歸りたいと思ふ心に催されて、江の鴻を逐うて去れば、故郷は早や橙の黃色に、橘の綠である好時節を過ぎて仕舞つてゐる事であらう。

(評說)侍御某の歸り行く先の、吳縣の畫の樣な景色を寫し出して、殊に故

郷に著きし頃は、一年の好景なる橙黄橘緑の時も過ぎてゐるであらう等と言はれては、さらでだに急がるゝ歸途の旅の、一入に氣のせかれて、心往き魂飛ぶを禁じ得ないであらう。

再送念東

(題意)念東は姓を高といひ、名を珩といひ、字を葱佩といふ。念東は其の一字で、晩に紫霞道人と號した。山東淄川の人である。明の崇禎十九年癸未の進士で、清に入つてから、官が刑部侍郎に至つた。人となり簡逸で、宴飲があつて詩を賦す毎に、必ず座客一人を擇んで代書させるが、歌行近體に論なく口を衝いて出るから、筆を執る者が手を停めてをる事が出來ない。書き終れば、一と目見る許りで、復た之を問ふ事をせなかつた。漁洋嘗て稱して云ふ「欸唾も珠璣であるが、之を用ふる事は沙泥の如くである」と。其の詩は非常に澤山に有つて、趙秋谷が棲雲集十六卷を選んで刻したが、十分の一にも足らぬといふことである。此の詩は念東が康熙十九年庚申に、仕を致して淄川に歸るのを送つたので、漁洋は最初之を送る爲に絶句八首を作り、後に再び八首を作つたが、精華錄には前後各々五首宛を採つてゐる。此に掲ぐる詩は、其の後の方の、再び送つた中の一首である。

籠水羣山繞郭明杖藜隨處有泉聲名藍金碧和煙雨小李將軍畫不成

(字解)籠水といふは、山東の顏神鎭の西に在る水の名である。杖藜は藜を杖つくと訓む。藜はあかざといふ草で、其の莖を杖にする。乃ち藜にて作りたる杖をつくのである。隨處はいたる處。名藍の藍は、正しくは梵語の僧伽羅磨とか、僧伽藍とかいふので、普通には約して伽藍といふが、更に藍の一字につゞめて、精藍、名藍等と熟する事がある。伽藍とは衆比丘の

園といふ事で、寺の事である。名藍は名高い寺である。金碧は金色や青綠で彩色したるをいふ。和はまじること。煙雨は煙のやうな雨をいふ。小李將軍とは、李思訓の子の李昭道をいふ。李氏は唐の宗室であつて、父の思訓は、開元中に武衛將軍に敍せられた。書畫共に當時に冠してをり、凡て山水樹石を寫すに筆力が遒勁で、湍瀨は潺湲として、雲煙は縹緲たるの致があつた。人が稱して大李將軍といつた。子の昭道は父の法を傳へて、筆勢が稍や變じてゐたけれども、而も精妙は之に過ぎてゐた。官は中書舍人、大原府倉曹で、集賢院に直し、未だ曾て將軍とは成らなかつたが、人が之を小李將軍といつた。此の父子が始めて金碧の山水を作つたので、後世皆な之に倣つたから、山水の畫を言ふもの、必ず此の父子を推す事になつた。

(意義)籠水の羣れる山は、顏神鎭の城郭を繞つて、はつきりと見えてをり、藜の杖を突いてふら〳〵と散歩すれば、到る處に泉の聲が聞えてゐる。

名高い伽藍の金碧の色は、煙の樣な雨の中に相まじつて、小李將軍をして畫かしむるも、到底畫く事は出來ない好い景色である。

(評說)高念東の歸り行く淄川の勝景を寫し出して、其の還鄉を羨むもので、是が卽ち其の人の歸り行くことの幸福なるを述べるので、之を祝し之を欣ばしめる所以である。送別の詩は此くの如くなるを以て其の上乘とする。然し何時でも此くなる事の出來ない事もあつて、前途の悲哀を慰めなければならぬ事もある。かゝる場合に、無情にも但だ徒らに其の悲哀を寫し出して、征く人をして轉た惆悵に堪へざらしめる樣な事があつてはならぬ。

上陵歌二首

(題意)上陵といふは、漢の鐃歌の名である。後漢書禮儀志に「正月の上の丁(ヒノト)の日に、南郊、北郊、明堂、高廟、世祖廟を祠る。之を五供といふ。其の禮が

畢れば陵に上る」とある。陵に上るは、陵に、お參りをするのである。康熙二十一年壬辰に、吳三桂が叛してより、久しく亂れてゐた滇南も、全く蕩平したので、聖祖は清朝の發祥の地である盛京、卽ち今の奉天に幸せられ、太祖の廟である福陵、太宗の廟である昭陵に謁して、戰捷を告げられたから、漁洋は此の上陵の歌を作つたのである。原と五首あるを精華錄には四首を取つてゐる。漁洋四十九歲の作である。

兩京相望海雲開。馳道如弦候騎催。金馬碧雞。新奏捷。太平天子上陵來。

(字解)兩京は盛京と北京とをいふ。盛京は舊と瀋陽といつたのを、清の太祖が遼陽から都を此に遷して、盛京と改められた。後、世祖は都を燕京に遷し、此を陪都とせられた。今は奉天省の役所の在る所になつてゐる。北京は北平である。明の成祖が、應天から都を北平に移し、應天をば南京といひ、北平をば北京といつたから、清朝にいたり、京都となつても、相沿うて北京といつたが、輓近再び首府を南京に遷さるゝに及び、再び北平の舊に復した。馳道は天子の通らるゝ道を謂ふので、我が國では御幸街道などと謂つてゐる。如弦は弓のつるの如く眞直なるをいふ。候騎はものみの騎兵をいふ。金馬碧雞は共に山の名で、今、雲南の昆明縣に金馬山があり、其の西南に碧雞山がある。清初の吳三桂、耿精忠、尙可喜の三藩の叛は、此の雲南に於てしたのであるから、其の地の山を取つて雲南といふに代へ用ひたのである。

(意義)北京と盛京との兩京は、相望む事が出來る樣になつて、海邊の雲もからりと開けた。御幸の道路は弦の如く眞直であつて、騎兵が巡羅して警戒してゐる。金馬山や碧雞山のある雲南より新に戰勝を奏して來たから、太平の御代の天子は、祖宗の御陵に拜謁して之を奉告せらるゝ事である。

(評説)會心偶筆に云ふ「海雲開の三字は、煙氛が掃蕩せられて、海も晏く河も清んだ氣象を形容したのである。北京から奉天に至るは千五百里ある。馳道如弦とは、蕩蕩平平たる氣象を形容したのである。下の二句十四字は、萬姓の歡呼する口中から唱へ出し來るをまつて、光天の海隅や、近光などの恐後の情を寫し出してゐる」と。光天は滿天のことで、天に滿ちたる帝德をいふ。卽ち帝德の光被せる中國の事である。近光は中國に近き地。恐後は騷亂の後をいつたのである。

遼水東廻北鎭斜龍蟠虎踞帝王家依依最是
關門柳十二年前拂翠華

(字解)遼水は、水經に大遼水、小遼水の二つある。今、遼河といふが、古の大遼水で、上流を潢河といひ、直隷より來り、奉天を經て、遼東灣に入る。此の河は一に西遼河と謂つてゐる。又、奉天城の南に在る渾河をば、古は小遼河といつたが、今は又東遼河ともいふ。末は西遼河に流れ込む。此の詩には遼水東廻とあるから、東遼河卽ち渾河を謂つたのである。北鎭とは、北方の鎭めになる大きい山をいふので、長白山のことである。書の舜典の孔傳に「毎州の名山の、殊に大いなるものを、其の州の鎭めとする」とあるより、大きい山を鎭といふ事になつた。長白山は、吉林省の南の境に在り、高さは、八千九百尺あつて、頂に湖がある。鴨綠、圖們、松花の三江の源になつてゐる。龍蟠虎踞とは、龍のわだかまれる如く、虎のうづくまれる如しと云つたので、地形の險惡なるを形容したのである。諸葛亮は金陵の地形を論じて「鍾阜は龍蟠し、石城は虎踞して、眞に帝王の宅である」といひ、李白は、龍蟠虎踞帝王州といふ句を作つてゐる。帝王家とは、帝王の家すべき處といふ意である。大清始祖實錄に云ふ「先世は長白山に發祥した。山は高さが二百里あつて、千里に綿亘してゐる。云々。先世、姓は愛新覺羅氏、名は布庫里雍順といひ、長白山の東の俄漢惠の野の俄朶里城に居て、國

を滿洲と號してゐた。是を滿洲開基の始めとする」とある。依依はなよなよとしてゐること。最是の最をば、大典の詩家推敲に「總といふに近い。漢書の註に、最は都凡なり、又最は凡計を謂ふなりとある」と云つてゐる。十二年前は、自註にある如くで、辛亥は康熙十年であるから、今二十一年壬戌まで、丁度十二年になる。翠華は天子の御旗を謂ふこと上卷五葉裏で述べておいた。

(意義)遼水は東に迴り、長白山は斜に連つてゐて、其の地勢が龍の蟠り、虎の踞れる如くで、眞に帝王の家すべき處である。依々たることのすべて是なる關門の柳は、十二年前に既に天子が御幸せられて、翠華の御旗を拂つたことであるが、今復た再たび御幸を迎へることである。

(評說)此の詩、誦讀一過したる後に於て、なほ限りなき情味の、津々として湧起するを禁じ得ない。是は作者が、たゞ眼前に開展せられた光景に就いて、直覺した所を述べたのみで、讀者をして洛誦翫味せしめる餘地を與へてゐるからである。若しも其の總てを說破して仕舞つたならば、餘味といふものが全く無くなつて仕舞ふ。彼の批評家が「含んで吐かざる妙味がある」等といふは、此の邊の消息を傳へたもので、神韻といふも、全く之に外ならぬ。

會心偶筆に云ふ「上の二句は、盛京の形勝が、能く帝業に基をして、長く其の祥を發する所以を寫したものであるし、下の二句は、關門の柳を借りて、萬姓が瞻依することの切なるを形容したので、十二年前の四字は、少き者は壯んに、壯んなる者は老いて、湛恩の汪濊たる中に、沐浴してゐる事を想ひ見ることが出來るので、直ちに是れ肌を淪め、髓に浹ねきことであるから、何うして尊親の戴きを致さないといふ事が出來ようや」と。

過丁香院訪張杞園不遇題壁

(題意)丁香院といふは詳かでないが、張杞園の寓してゐた所である。張

杞園、名は貞、字は起元で、杞園といふは號である。山東青州府の安丘の人で、康熙の拔貢である。鴻博に擧げられたが、未だ試みられず、翰林院孔目に需次した。博雅で、古を好み、篆刻に工に、交遊を喜んだ。青州の名士で、渠亭、潛州、娛老などいふ諸集がある。康熙四年乙巳に、漁洋が鄉里なる山東の新城に歸つた時は、一日、青州に杞園を訪うて、共に書籍を市中で搜し、春秋權衡と意林の二書を購ひ得た事が、漁洋の居易錄に出てゐる。此の詩は康熙二十三年甲子、漁洋が五十一歲の時の作で、四年乙巳よりは、約二十年後の事で、丁香院を過ぎて杞園を訪うたが、不在で、遇ふ事が出來なかつたから、壁に題して去つた詩である。

吟遶長廊取次行、主人不見綠苔生。蜂聲滿院日卓午。花氣撲簾春晝晴。

(字解)取次には諸說あるが、大體に二義になつてゐる。一は次第なりといひ、又、次に順つて漸進するなりといつてある。一は宋長白の柳亭詩話に安頓の貌といひ、我が林瑜の梧窓詩話に、苟且と隨便との二義ありとし、又、辭源には、猶ほ造次のごとし、次といふは舍り止まる所で、取といふは僅に足るの辭であるといつてゐるが、先づ暫くかうして置かう等といふ苟且の義なのである。此處は其の何れにしてもよく分る。卓午は正午のこと。李白は、飯顆山頭逢杜甫、頭戴笠子日卓午と使つてゐる。

(意義)誰も居ないのか、返辭が無い。詩を吟じつゝ、長い廊下を遶つて、搜しながら、だん〳〵進んで行けども、主人の姿は見えない。庭前に青々とした苔が生えてゐるのみで、人の踏み躙つた樣な下駄の齒の痕も著いて居ない。ぶうんと唸る蜂の聲は座敷に滿ちて、日は方に正午である。咲き立つた花の香氣は簾を撲つて、春の日は麗かに晴れてゐる。

(評說)丁香院に張杞園を訪うたが、生憎不在である。庭前には綠苔が生じて、音づれた人の足跡も無い。如何はせんと躊躇する時の光景が、宛然と

して寫し出されてゐる。眞に讀者をして、其の身親から麗らかに晴れ渡つた春の眞午頃に、歷亂たる蜂聲、氤氳たる花氣の間に、佇立してゐる樣な感があらしめる。會心偶筆は更にいふ「一時首を搔いて躊躇する光景は想ひ見るべきであるが、然し我が身を衆香國中に置いたは、主人の餉遺であるから、これも亦淺くはない」と。

荊山口待渡

(題意)康熙二十三年甲子十月、聖祖は東に巡狩して泰山を祭り、孔子の廟に謁せられたが、之と共に諸臣を遣はし、嶽、鎭、海、瀆の神を祭らしめられた。漁洋時に五十一歳。此の冬、詹事府少詹事に遷り、翰林院侍講學士を兼ねてゐたが、亦其の使者の選に當つて、南海神に祭告する事となつた。十一月十九日を以て、人々に送られて北京を出發し、南方に向つて進んで、十二月十三日に荊山口に差しかゝり、渡を待つて此の作をなしたのである。漁洋が此の行を記したものを粵行三志といつて、南來志、北歸志、廣州遊覽小志の三種があるが、其の南來志の中に「十三日、荊山口を渡つた。水の勢が江の湖の樣である。河を渡つて徐州に次つた」といつてある。徐州とは彭城のことで荊山は其の州城の東北に在る。荊山堰といつて井堰があるが、是は梁の天監十四年に魏から降參した王足といふ者が、計を武帝に陳べ、淮水を堰いて、壽陽に灌がんことを求めた所のものである。

西連豐沛走中原。風色蕭蕭野渡昏。一望孤城天接水。亂山合沓是彭門。

(字解)豐・沛は、秦の頃は沛縣の豐邑といひ、漢の高祖の生れた地として有名であるが、今は豐も沛も共に縣になつてゐて、清代は江蘇徐州府に屬し、民國となつてからは江蘇徐海道に屬してゐる。共に徐州から西北百

二十里許の所である。中原は支那の中部の平原をいふ。今の直隸、河南、山東の西部、山西の東部あたりをいふ。合沓は重なり合ふ。彭門は彭城をいふ。徐州のことである。蘇東坡の、答呂梁中屯田詩に、亂山合沓圍彭門、官居獨坐懸水村。といふ句がある。

(意義)西は豐や沛に連つて、地勢が中原に走つてゐるが、昔年、王霸を爭つた樣な戰伐の氣も今は亡くなつて、風景は蕭々として寂しく、野中の渡し場は昏い。一望すれば孤城は天と水と接してゐる程で、亂山の重なり合つてゐる所が、是、彭門である。

(評說)自然の雄大な景色を、何の苦もなくすら〳〵と寫し出してゐて、少しも小刀細工を用ひてゐない處に、漁洋の眞面目が露はれてゐる。

彭門懷古

(題意)彭城は蘇東坡が嘗て守となつてゐた處で、其の際水害を被つた爲め、官に請うて徐城を增し築き、東門をば大樓とし、黃土を塗つて黃樓と謂つたのを始め、戲馬臺といつて晉の劉裕が大いに賓僚を會して詩を賦した處、放鶴亭といつて東坡の記文を作つた處などが在つて、漁洋は是等につき八首の詩を賦したが、今此に講ずる所は、其の最後の一首である。

風雨彭城意黯然。東堂松竹沒寒煙。潁濱老去東坡死。銅狄摩挲五百年。(自註)感懷西樵東亭兩兄曩在廣陵官閣西樵有詩云牢落彭城意。

經時涕泗零。今宵鶴柴雨。猶喜對牀聽。

(字解)風雨彭城は蘇轍の逍遙堂詩序に據つたのである。曰ふ(轍は幼くして、子瞻に從つて書を讀み、未だ嘗て一日も相舍めなかつた。既に壯にして四方に遊宦し、韋蘇州の詩を讀んで、那知風雨夜、復此對牀眠。といふに至り、惻然として之を感じて、乃ち早く退いて、閒居の樂を爲ようといふ

事を相約した。熙寧十年二月に、彭城に相從ひ、留ること百餘日であつたが、逍遙堂に宿り、前の約束を追ひ感じて、爲めに二小詩を作つた。其の一に云ふ。

逍遙堂後千尋木。長送中宵風雨聲。悞喜對牀尋舊約。不知漂泊在彭城。

其の二に云ふ。

秋來東閣涼如水。客至山公醉似泥。困臥北窗呼不醒。風吹松竹雨凄凄。

と。黯然とは、江淹の賦に、黯然而銷、魂者。惟別而已矣。とあつて別を傷む貌である。東堂は、漁洋が、仲兄禮吉の抱山集選に序した中に見えてゐる。曰く「余が兄弟、少くして書を東堂に讀んだ。堂の外は青桐が三、白丁香が一、竹が十餘頭のみで、他に有る所なく、人の跡が罕に至るのみで、苔蘚が階を被ふ。紙窗竹屋に、燈火が相映じ、呻唔の聲が相聞える。是くの如きものが蓋し十年であつた。長兄の考功先生が、詩を爲るを嗜まれたから、余が兄弟は皆好んで詩を爲つた。嘗て歲の暮の大いに雪の降つた夜、堂の中

に集つて酒を置いた。酒半ばにして、王、裴の輞川集を出して、共に之に和する事を約した。一詩の成る毎に、輙ち互に賞激彈射したが、詩が成り酒が盡きても雪は止まなかつた。之を久しうして、余が三人先後に進士となつて去り、各〻王事を以て南北に馳驅したが、仲兄だけは家に食して老い、伯兄と叔兄とは既に早や逝つた。余、間に一たび家を過ぎて兄を省したが、時移り勢易り、樂往き悲來つて、疇昔の東堂の跡を問はうと欲しても、亦得ることが出來ない」とある。潁濱は蘇軾の弟蘇轍、字は子由のことで、晩年に室を許に築いて潁濱遺老と號した。此は潁濱を以て漁洋自ら比したのである。東坡は人の知る所で說明する迄もないが、念の爲にいへば、潁濱の兄蘇軾、字は子瞻で、黃州團練副使に貶せられたときに、室を東坡に築いて東坡居士と號した。此は漁洋が兄西樵竝に東亭を指して云つたのである。銅狄は銅狄人のことで、金狄とも、銅人又は金人ともいふ。古は銅で、人の像や其の他獸類の形を鑄て、宮殿や廟陵の前に飾つ

たものである。東坡が彭城に居て、弟子由を慰めた詩に、五百年間誰復在。會看銅狄雨摩挲。といふ句がある。是は後漢書の方術の中に在る薊子訓傳に本づいてゐるのである。曰く「或は百歳の翁があつて自ら説くやう、童兒の時に子訓が藥を會稽の市に賣つてゐるのを見たが、顏色は今と異つてゐない。後に人が復た長安の東霸城で見たが、一老翁と共に銅人を摩挲して、相謂うて曰ふには、適々此を鑄るのを見たが、已に五百歳に近いと、見てゐる人を顧みて去つた」とある。自註の詩は、西樵の考功集選には、閑夜聞鶴語季弟と題し、後半は心憐鶴柴響、還作劉牀聽。となつてゐる。題に聞鶴とあるから、詩中の鶴柴の語が頷づかれる。

(意義)風雨の折しも彭城に來り、心黯然として別を傷むことで、昔時共に讀書せし東堂の松竹も、今は寂しき煙の中に沒して仕舞つてゐる。潁濱の老い去り、東坡の死せし如く、自分も已に年が老い、我が兄西樵、東亭も亡くなつて仕舞つた。五百年間、誰か生きてゐるものがあらう。空しく銅狄を擦つて、昔を偲ぶより外はない。

(評説)陳康祺の燕下鄉脞錄に云ふ「漁洋の近體の詩は、先づ詞を選んでから後に意を運ぶから、意が詞の爲に縛せられたり、亦は詞につれて轉じたりするから、詞は鮮妍であつても、意は揜抑せられて、反つて有意無意の間に在る。卽ち漁洋の、謂はゆる西川織錦坊、及び謂はゆる神韻である。云々」と。此の詩の如きも、彭城に於ける東坡、潁濱兄弟の事柄が、自分等兄弟に似てゐる所から構想した樣に見えるけれども、其の實は、五百年後、銅狄摩挲の好字面を見出して、之を捨つる事が出來ず、此の一首を構成したものであらうと思はれる。是等の事、必ずしも其の悉くを非難すべきでない。殊に初學の人に於ては、其の意味を沒却する樣な弊に陷らぬ限り、此の方法を摹倣するは、作詩の進境を圖る上に於て、大いに功果があらうと思ふ。

自沙河至唐婆嶺即事。

(題意)漁洋の南來志を見るに「十二月二十七日、雪を冒して行く。諸峰は雲霧の中に出沒してをり、丹楓烏桕があり、石流は百折してゐる。沙河に至り、舟で濟つた。上流に釣魚寺といふがある。午は唐婆嶺で食事をした。此から峻阪が相屬いで、屢々登頓がある。雪中に望見すれば、前なる人は魚貫して上下してゐる。阪を登つて四もを矚れば、萬樹は薺(ナヅナ)の如く、溪流が之を經緯してゐる。阪が盡きて陶埠河を渡り、青口驛を過ぐ、道を夾んで皆竹園である。再皖水を渡る。晩に灊山縣に次る」とある。

皖公山色望迢遙。皖水清泠不上潮。青笠紅衫風雪裏。一林楓柏馬蕭蕭。

(字解)皖公山は皖山といひ、又潛山ともいふ。安徽の潛山縣の西に在つて、綿亙深遠で、霍山縣と界を接してゐるあたりは、卽ち霍山といふのである。最高峰を天柱といひ、四千二百尺ある。方輿紀要に云ふ「說をなす者が、潛山、皖山、天柱を三つの山とするが、其の實は非である。形から言へば潛山で、遠近の山勢が、皆狀を潛めてゐるから言ふのであり、地から言へば皖山で、皖伯が封ぜられた國であり、峯を以て言へば天柱で、其の峯の突出して峭拔してゐること、柱の樣なのである」と。南來志に「二十八日、雪。灊水を渡つた。西北に灊山の雲表に橫絕してゐるを望む。圖經に、山は高さが七千二十丈あると稱してゐる。史記に謂はゆる灊の天柱山に登禮す、號して南岳といふとあるので、漢文の封じた所である」といつてある。灊は一に潛といふので、灊山と潛山とは同一である。皖水は今、長河といつてゐる。潛山縣の西北の天堂山より出で、東南に流れて、縣の東を經て潛水に會し、南して石牌市に至り、太湖縣の東の諸水と會して、東に流れて皖口に至つて大江に入る。青笠は青い色の被り笠。紅衫は紅い色の半袖の襦袢。楓柏の楓は我が邦ではかへでとかもみぢとか讀めど、夫ではない。和產が無いからフウと呼ぶより外はない。落葉喬木で、樹の高さが二

三丈に至り、白楊に似てゐて堅い。葉は掌狀で、三裂をなし椷の樣で、枝が弱くて善く搖く。一たび霜を經れば、葉が皆赤くなるから丹楓といふ。秋色の最も佳なるものである。漢の時には宮殿の前に皆楓を栽えたから帝居を楓宸といつた。柏は烏柏で、烏臼木とも書き、なんきんはぜとかいふ。枝葉が繁密であり、葉の形は圓扁で互生し、芽出しは紅くて、長ずれば綠となり、秋に復た紅葉して美しい。馬蕭蕭は、詩經小雅の、蕭蕭馬鳴から來てゐる。

(意義)皖公山の景色は、遙かの彼方に見えてをり、皖水は清らかで、海の潮は上つて來ない。青笠紅衫を著けた旅人が、風雪の裏を冒して、一林の楓や烏柏の中に、馬もすご〳〵と過ぎ行くことである。

(評說)漁洋は其の著然鐙記聞の中に於て「詩は洗刷し得て淨らかなるを要す」といひ、又「詩は清挺を要す」と云つてゐるが、蓋し此等の作を言ふのである。然して此の詩は漁洋としても亦得意の作であるので、漁洋詩話の中に云ふ「余少うして秦淮に客となつて、秦淮雜詩二十餘首を作り、又眞州に在つて絶句數章を作り、綠楊城郭是揚州などの句もあつたが、江淮では多く寫して圖畫とした。後、蜀に入り、夾江道中を行き、峨眉の三峯が煙雨空濛の中に在るを望んで、詩を賦して、沉黎東上云々といひ、粤に入るに及んで、大雪に潛山唐婆嶺を行き、事に卽いて詩を賦して、皖公山色云々といつた。常に畫師をして、爲めに二圖を寫させようとして、未だ果さないから、每に以て憾としてゐる」と。

自錦繡峯下至東林寺

(題意)康熙二十四年乙丑正月初三日、揚子江を渡り、初四日、早く發し、濠溪港を越えて南す。蓮花、錦繡、雙劒の諸峯が雲表に卓立してゐる。太平宮を過ぎ、東林寺に午食した。寺の外は卽ち虎溪である。林を穿ち石に漱いで、響きが甚だ清激である」とは南來志に記す所である。錦繡峯と

は、山か葱倩で、錦を紆ぶる如くであるから名づけたのであるといふ。東林寺は晋の高僧惠遠が、其の同志慧永、慧持の諸僧や、名儒劉程之等十八人と、白蓮社を結んだ所で、廬山の麓にある。寺前の虎溪は、惠遠は客を送つても此の溪を過ぎなんだが、一日陶淵明、陸靜修と話しながら、覺えず之を踰したら、虎が驟かに鳴いたので、三人が大いに笑つて別れた所で、後に三笑亭をいふを建てた。南來志に云ふ「寺を入れば塘がある。謝康樂の白蓮池である。惠遠の影堂があり、傍に十八高賢の像が列べてある。衣冠が甚だ古い。影堂の西偏を三笑堂とする。堂の下は石澗に臨んでゐる。版上に三笑の圖が畫かれてゐる。虎溪橋を渡つて香爐峰を望む。南山の雲氣が、人を去ること咫尺である。龍眠から潯陽に至るまで、雪をふらすこと連旬であつたが、始めて返照を見る」と。

江州郭外雪雲濃。翠壁丹崖錦繡重。行盡清溪。

三百曲。東林纔打午時鐘。

（字解）江州は今の湖北、舊との武昌府及び江西省の地で、州治が初めは武昌に在つたが、後に潯陽へ移したから、宋以後は皆潯陽を江州とした。明に至り改めて九江府とし、民國に至つて九江縣とした。清溪は蘇東坡の詩に、幸有清溪三百曲、不辭相送到黃州といふ句がある。

（意義）江州の郭外は雪氣の雲が濃かで、翠の絶壁、丹色の崖の、錦や繡の如き錦繡峯が重なつて見えてゐる。清溪の三百曲を行き盡した頃、東林寺で、纔かに午時の鐘を打つ聲が聞えて來た。

（評說）我が齋藤拙堂は絶句類選に於て、此の詩を評して「漁洋は愛好の誚があるけれども、竟に名家たるを失はぬ」といつてゐる。

峽江縣

(題意)漁洋は正月初十日、舟を僦うて南昌を發し、贛水を溯る。南來志、十四日の條下に云ふ「舟行淺阻多く、午を踰えて峽江縣に抵る。古の巴丘である。城堞が半ば山上に出てゐる」とある。峽江縣は今は江西の廬陵道に屬してゐて、臨江府の南百二十里にある。

短岫幽篁峽口陰。亂帆鴉軋滿江潯。長年煙際遙相問。十八灘頭水淺深。

(字解)短岫の岫は音シウで、山の洞穴をいひ、又峰巒をも謂ふ。鴉軋は杜牧の句に歸棹何時聞軋鴉と用ひてある。物の聲が交々憂するを皆軋といふ。鴉は其の聲である。舟の打ち合ふ聲を鴉軋といふのである。長年の長は上聲に讀むので、長幼の長の字の意である。長年は船の楫取をいふ。十八灘は贛江の贛縣と萬安との境に灘が十八ある。灘とははやせの事で、急流で舟行の危險な所をいふ。我が邦でいふなだとは異ふ。十八灘は、贛縣に在るもの九つ、曰く白淵、天柱、小湖、鱉灘、大湖、銅盆、落瀨、青洲、梁口で、萬安縣に在るもの九つ、曰く崑崙、曉灘、武朔、昂邦、小蓼、大蓼、綿灘、漂神、惶恐で ある。水勢が險惡で、中にも惶恐灘が尤も甚だしい。

(意義)短い山の穴、幽かな竹叢が、峽の入口の陰にあつて、亂れあつてゐる帆掛船が、アツア〳〵と音をして、江のほとりに滿ちてゐる。楫取をしてゐる船頭が、煙の棚引く際から遙かに大聲をあげて、十八灘のあたりの水の淺深は、何うであるかと尋ねあつてゐる。

(評說)予往年屢々桑名より舟を僦うて、長良川をば、美濃の百八の里まで、往還したことがある。長年の煙際に問ふ所は、十八灘頭の水の淺深ではなけれども、舟中往々是等の景色を目睹した事がある。當時作る所の詩も少くないが、朝來天氣東風便。無數春帆自九華。などいふのもあり、又、

青山影裏起漁謳。行不借車唯僦舟。三十六灣新水膩。桃花時節過油洲。

などいふのもある。詩は拙劣であるが、實景である。

吉水絶句

(題意)南來志に「十六日吉水縣を過ぐ。縣城は東山を負ひ、文江に面し、山水が明秀である」と見えてゐる。吉水は吉水縣の東北十里に在る。源は永安縣の東北から出て、贛水に會する。古老傳へ云ふ、此の水の源より出づるに、波文ありて、章が吉字をなすこと、亦三峽の水の屈曲して巴の字をなす樣であると。又、來集之の樵書には「十八灘の水は、泰和より して下り、府城を經、又東北して墨潭に注ぎ、吉文水となり、永豐江水の横出するものと合ふ。清湖洲といふがあつて横に江中に亘つて、委蛇繚繞してゐて、狀が吉字の樣であるから、灘を吉陽といひ、縣を吉水といひ、又、文字水といひ、亦、文江といふ」とある。

螺川川北字江西沙暖舟暄(カニシナ)咫(カニ)尺迷(フ)繞(キナ)過元(ヲ)宵

如上巳春山處處郭公啼

(字解)螺川は吉安をいふ。明一統志には郡に螺山があるからだとある。字江は、漁洋の南海集には自註があつて、文江一名字江といつてあり、尙此の事は題意の處で說いておいた。沙暖は土地が餘程南に依つてゐるから、一月の中旬に巳に暖かなので、南來志の十五日の條下にも「岸上は菜花が巳に黃である」といつてある。咫尺の咫は八寸、尺は一尺で、僅かの隔りをいふ。元宵は正月十五日を謂ふ。本卷四四葉表で述べておいた。上巳は三月三日をいふ。是は本卷三葉裏解禊の條下で詳說して置いたから、參照すべきである。郭公は鳥の名で、布穀のことである。鳩鳩とも書く。和名はクワクコウ、ヨブコドリ、カンコドリ、カッパウ等と謂ふ。其の鳴く聲により郭公等といふのである。大きさは鳩の如く、全體に黑い文と灰色とが相雜はり、腹は淡黃で、白黑の文があり、尾は灰赤で白い點がある。目

の邊が薄赤くて段があり、觜は尖り、指は前後二つになつてゐて黒い。布穀といふは、其の鳴く時候が農事の頃であるからで、我が邦で一に種蒔鳥といつてゐる。俗に杜鵑として用ひるは誤である。

(意義)螺川の川の北、字江の西の方、沙は暖かで、舟は暄かで、すぐ前もちらちらと眼が迷ふ樣である。今日は十六日で、纔に元宵を過ぎた許りであるに、上巳の樣にうらゝかで、春山の處々に、布穀の啼く聲が聞えてゐる。

(評說)是亦漁洋一流の調子で、起承結の三句共すべて讀下しの句法を用ひたから、轉句だけを細かく刻んで、轉り讀の句法となし、それで全體の調和を取つてゐる。

廣州竹枝二首。

(題意)廣州は三國の時、吳の孫權が、交州を割いて此の州を立てたのである。今は、廣東廣西二省の中で、廣州、瓊州の二府を除いた外は皆其の地になつてゐる。番禺が其の役所の在る所で、今の番禺縣は舊との府治である。漁洋は贛江を溯つて江西省の南端に抵り、梅を以て名高き大庾嶺を越えて粵の境に入り、更に北江に舟を泛べて流に從つて下り、二月初九日を以て廣州に入つた。然して廣州竹枝六首がある。今其の第二、第四の二首を拔く。

海珠石上柳陰濃。隊隊龍舟出浪中。一抹斜陽照金碧。齊將孔翠作船篷。

(字解)海珠石といふは、漁洋の廣州遊覽小志に云ふ「海珠石は、江の中に在つて、上に慈度寺といふがある。宋の李侍郎昴英の讀書の處で、寺に李公の祠がある。丹霞臺に面し、江水を下瞰し、北は羊城を帶んでをり、估舶や漁艇が往來して、圖畫の樣である。粵人の競渡の所で、明の盛んであつたときは、豪家が競うて、翠毛や、鶴毳や、孔雀の尾をもつて船の篷を飾り、用

つて相誇つてゐた。其の侈靡を尚ぶこと此の樣であつたが、兵を用ひてより後は、城を築き、戍を其の上に置いたりしたから、荒落して復た振はなくなつた」とある。龍舟とは、端午の節の競渡に用ふる舟を、龍の形に飾るから斯くいふ。競渡とは舟の漕ぎくらべをする事で、五月五日は、屈原の死んだ日であるから、其の死を傷む爲めに、舟楫を命じて、之を拯ふのであるといふ。將は持也と訓して、全く以の字の義に用ひたので、もつて と讀む。孔翠の孔は孔雀、翠は翡翠である。孔雀の尾や、翡翠の羽を以て、船の篷を飾ること、漁洋の遊覽小志に云ふが如くである。

(意義)此の詩は競渡の有樣を寫し出したのである。海珠石の上は柳の陰が濃かで、幾つとなく隊をなした龍舟が、浪の中程へ漕ぎ出して來る。一となづりした樣な夕日の光が、金碧の色を照して耀いてゐるが、それは龍舟が、何れも齊しく孔雀や翡翠の羽根で、船の篷を飾つてゐるのである。

(評說)會心偶筆に云ふ「竹枝の詞は、類ね皆其の土地の風物を詠ずる。或は俗語とか、謠歌とかも、皆入れ用ひることが出來る。其の體裁は、略ぼ古の子夜歌や讀曲歌の遺意がある。或は古朴に近くても、或は纖穠を帶んでゐても、俱に可い。但だ一たび鄙俚に入り、一たび輕佻に落つれば、便ち雅道を傷つて仕舞ふ。此の詩は廣州の競渡の俗を寫したので、說き來つて、便ち彩色が目を奪ふ樣に覺える」と。

佛桑花下小廻廊。曲院深深牡礪墻。細爇海沈銀葉火。金籠倒掛試收香。

(字解)佛桑花は一名を扶桑といひ、和名をブッサウゲ、又はリウキウムクゲと呼ぶ。枝も葉も、桑と槿とに似てゐて、花の色は眞紅で、芍藥に似てやゝ小さく、輕く柔かな事は之に過ぎてゐる。開くのは春の末から秋の初に至り、其の色は婀娜として愛すべきである。變種が甚だ多く、其の色に

深紅、淡紅、黄、白、青等があり、花瓣に一重八重がある。南方の植物であるから、甚だしく寒さを畏れて、枯れ易い。牡蠣墻の牡蠣はかきである。初め海邊の石に著いて生ずるが、其の殼が相粘し合つて、遂には一二丈になるものがあるから、廣州あたりの人は之を取つて墻にする。燾は燒也と註す。海沈は香の名で海南沈のことである。沈は木の節であつて、水に入れると沈むから、沈水又は水沈といふのである。江西の吉陽と萬安の間に在る黎母山の東峒から出るものが、天下に冠絶してゐて、海南沈と稱せられて、一片が萬錢に値する。總べて水沈は交、廣、崖州や海南から多く出るのである。銀葉は香を燒くときに用ふるもので、我が邦でも往々之を見る、銀を延ばして薄片とした上に、香を置いて燒くのである。蘇東坡の詩に、銀葉燒香見客邀とあり、陸放翁の詩に、銀葉無煙靜炷香とある。然して其の形を荷葉などに擬したものもあるらしい。漁洋の詩に、坐爐銀荷葉上灰とあるはそれである。倒掛收香は桐花鳳といふ珍らしい禽の事

である。李德裕の文に「成都の岷江を夾んだ磯岸に、多く紫桐を植ゑてあるが、毎に春の暮に至ると、靈禽の五色なのがあつて、來つて桐花に集つて朝露を飲む。之を桐花鳳といふ」とあり、朝野僉載には「劒南、彭蜀の間に鳥があつて、大いさが指の如く、五色畢く具はり、冠があつて、鳳凰に似てをり、桐の花を食ふ。之を桐花鳳といふ」とあり、劉績の霏雪錄には「東坡に倒掛綠毛公鳳の詞がある」といひ、又李之儀の詠倒挂詞の自註には「此の鳥、十二月を以て來り、日の間に好香を焚けば、收めて之を羽翼の間に藏し、夜は尾や翼を張つて、倒に挂つて香を放つ。一名を收香倒挂といひ、又探花使ともいふ。性が極めて馴れ易く、好んで美人の釵の上に集り、客を宴するに、席を終るまで去らぬ」とある。然るに周亮工の閩小紀に「余、閩に在りし時、黄將軍が一雙の倒掛鳥を以て來られたが、遍體嫩綠で、楚々として人に憐ませる。腹や背の毳は五色を雜へ、注距は皆赤い。曲さに鸚鵡に肖てゐるが、但だ小さくて僅に雀位である。尾は輕くて長く、鸚鵡の重

くて直きに似てゐない丈である。子供等は皆小鸚哥と呼んだが、日も夜も倒掛してゐた。其の性に習はなんだため、數日を越えて死んだ。死んでも猶ほ足が首より高く、掛つてゐて釋かないから、予は悲しむに詩を以てして、籠中開緣猶虛掛。腋裏名香不更收。の句があつた。此の鳥の大きさは何うして止だ指の樣であらうや。又何うしてたゞ幾銖位であらうや。夫はさうであるが、何うして能く移つて金釵に向はうや。又絶えて冠が無いから、何うして鳳に似ることを得やうや。乃ち知る、收香倒掛と桐花鳳とは自ら別に兩種であらう。坡仙の詠も亦桐花鳳を以て之を形容したが、後人が此の詞に緣つて、遂に訛して一としたのみであらう。けれども籠に閉ぢておいた間が幾くも無かつた爲めに、また其の收香を試みなかつたのを憾とする」とあるが、此の詩には金釵に集まるといふ事は言つてない。果して櫟園老人の謂ふ如くであるかどうか、其の邊は分らぬ。

(意義)佛桑花が開いてゐる下に小さい廻廊がある。折れ曲つて建てられた座敷は奥深く、牡蠣の墻が取り繞らされてゐる。其の座敷の中には細々と、海南沈の名香をば、銀葉の火で焚いて、傍らにある金の飾をした籠には、靈鳥が倒に掛つて、收香を試みてゐる。

(評說)會心偶筆に「牡蠣の墻の中には、曲院が深々として、佛桑の花影は廻廊に掩映してゐる。銀葉の名香を燒き、金籠の好鳥を調する。之を思へば其の地に神遊せしめる。此の間には定めて下首の鬟雲盤髻の人が無くてはならぬ」といつてある。此の鬟雲盤髻の詩も好い詩であるが、此には之を講ずることを止めたから、たゞ其の詩だけを錄して置かう。

鬟雲盤髻簇宮鴉。一線紅潮枕畔斜。夜半髮香人夢醒。銀絲開徧素馨花。

金武祥は其の著粟香隨筆に於ていふ「廣州竹枝詞は、漁洋の六絶句を以て最も佳いとする」と。更に其の粟香二筆に於ていふ「余は漁洋の廣州竹枝詞を愛誦する。典雅の中に、丰神が最も勝れてゐる」と。

抵南安

(題意)漁洋は廣州に留ること二箇月、南海神に祭告の事も滯り無く終り、あちらこちらと名勝などを遊覽して、四月初一日を以て舟に上り、諸知人に餞せられて、初四日始めて解纜して歸途に就いた。其の二十五日大庾嶺を越え、晡時に江西の南安に次つた。

嶺南已負荔枝天、横浦重過意惘然。暫借谿樓看山色、蠟花如雪寺門前。

(自註)南安人以蠟樹爲業。彌望皆是。

(字解)嶺南とは、大庾嶺等の五つの嶺の南を謂ふ。荔枝は閩粵などの南方に生ずる珍果で、蜀にも生ずる。樹の高さは三四丈に至る者があり、葉は羽狀複葉で、透明の小點がある。果實の外皮は龜甲の紋をなし、肉は白く、味は甘く、汁が多い。此の果物は一度本の枝を離るれば、一日に色が變り、二日で香が減じ、三日で味が變つて、其の總べてが皆盡きて仕舞ふから、他の地では容易に得られぬ。漁洋は廣に在る間、極めて多く之を味つた事であらう。南來志に「二月初七日、小塘を過ぎて始めて荔枝を見る」とあるが初めで、北歸志には出發眞際の四月初三日の午に、門人の陳宗德の、新荔を送つた事が記されてゐる。横浦は關の名で、大庾嶺に在る。蠟樹は水蠟樹で、和名をいぼたのきといふ。樹は高さ三四尺から一丈に至り、枝葉共に對生し、葉は楕圓である。仲夏に、枝の上に二三寸の穗をなして、枝を分けて五瓣の小白花が集り開く。常に此の樹に就いて蠟蟲を養ひ、枝の間に出來る白い色の粉の樣なものを取つて白蠟を製する。自註によれば、土地が溫暖であるから、四月末に既に此の樹の花が咲いて、彌望皆是で、雪の樣に見えるのである。

(意義)嶺南の、荔枝の生ずる土地にも已に負いて、大庾嶺の横浦關をも重ねて過ぎたから、失意の餘り心もうつとりとする。此の憂さをはらすた

め、暫く谿の處の二階を借りて、山色を看んとて登臨すれば、蠟の樹の花が雪の如く、寺の門前に咲き滿ちてゐる。

(評說)言詮に落ちたり、理路に涉つたりした樣な痕が少しもなく、たゞ蠟花が雪の如く咲いてゐる眼前の景色を寫し出して、讀者をして無限の情趣を覺えさせる。

蠟磯、靈澤夫人、祠

(題意)蠟磯は安徽蕪湖縣の揚子江中に在る。陸游の入蜀記には「蠟磯を過ぐ。大江の中に在つて、聳拔特起してゐる。道士があつて廬を其の上に結んでゐる。云々」と云つてある。靈澤夫人祠といふは、蜀の先主劉備の孫夫人の祠である。夫人は吳の孫權の妹であるが、先主が荆州の牧となつたとき、孫權は之を畏れて、妹を進めて好みを固うしたのである。夫人は驕豪で、多く吳の吏や兵をつれてをり、我儘勝手な振舞をした。後、先主が西の方を征伐したとき、孫權は大いに舟船を遣はして妹を迎へさせたが、夫人は蜀の後主劉禪を連れて還らうとしたので、趙雲は張飛と兵を勒めて、江を截つて、後主を奪ひ返した。夫人は此の蠟磯に葬られたと言ひ傳へてをり、其處に靈澤夫人祠といふが建てられてある。漁洋は贛江を下り盡し、五月初八日に彭蠡湖に入り、十六日に大江を下り、二十日魯港を過ぎた。漁洋の北歸志に「魯港を過ぎ、蠟磯の靈澤夫人の祠を望んだが、片石が江に瀕み、高さは尋丈だけも無い。圖經に高さ十丈とあるは妄である」といつてある。此の詩、原集には二首あるが今一首を拔いて解說する。

霸氣江東久寂寥、永安宮殿莽蕭蕭、都將家國無窮恨、分付潯陽上下潮。

(字解)霸氣は、大名の旗頭となつて、天下に號令しようとする氣分。江東は

揚子江の東の方をいふのである。併し江は東西に流れてゐるから、江南の東方の事で、金陵の地方をいふ。此處は、三國の時に、吳の孫權が建業に都して、帝と稱した事を指すのである。永安宮は舊と魚復といつた處で、漢の時に山に因つて城を爲つたが、蜀に至り改めて永安宮と謂つた。四川奉節縣の東北にある。分付といふは、漢書の原涉傳に「具さに衣被棺木より、下りて飯舍の物までを記して、諸客に分付したから、諸客は奔走して市で買つた」とあるが、分別して委付したことで、言ひ換へれば、手分して調へさせたのである。後に至りては單に言ひ付ける意として分別することなく、一人にでも言ふ樣になつた。此は矢張り委ね任せることである。潯陽は江の名で、江西九江縣の北の大江を謂ふのである。

(意義)霸氣は、江東に於ては已に久しく寂しくなつて仕舞つて、英雄の起るものも無く、又永安の宮殿は、蜀の亡びし以來、草深く荒れ果てゝ、是亦淋しいものになつてゐる。吳や蜀が互に爭ひ合つて、敵兵の侵略を防ぐ爲には、自分の妹を犧牲にまでした事であつたが、當年の跡は空しく夢の樣であつて、都べて國家の限り無き恨は、潯陽江に滿ち退く潮に委ね任されて殘つてゐるのみである。

(評說)洪亮吉の北江詩話に云ふ「王文簡の詩は、律體は古體よりも勝り、五七言絶句は又五七言律よりも勝つてゐる。余は最も其の國士橋の一篇、

國士橋邊水千秋恨無窮如聞柱厲叔死報莒敖公

と、蟜磯夫人祠の一篇、霸氣江東云々を愛する。以爲ふに此は詩人の詩でなく知人と世を論ずべきものである」と。卽ち洪北江は此の一篇を以て漁洋七言絶句中の歷卷としたのである。

沈德潛は國朝詩別裁集に於て「此は照烈(蜀の先主劉備の謚)の孫夫人の祠である。潯陽より上は劉として、潯陽より下は夫人としての恨は、眞に窮りがない」と云ひ、又我が齋藤拙堂は絶句類選評本に於て「第一は吳を謂ひ、第二は蜀を謂ひ、第三は吳蜀を合せ、第四は上下の二字を以て又之

を分けた。章法が謹嚴で、絶妙巧詞である」と云つてゐる。併し上下をうへ(去聲漾韻)した(上聲馬韻)の意として、潯陽以上、潯陽以下と、無窮の恨を二つに分けて說くは、分付の字を分ちて付すと解したから來てゐるのであるが、如何にも拘はり過ぎてゐる。寧ろのぼり(上聲養韻)くだり(去聲禡韻)の意として、あつさりと、滿ち退く潮と解した方が可いと思ふ。

西澗

(題意)漁洋は、五月二十一日に采石を過ぎ、江浦に至りて舟を捨て、此より陸路を北上し、二十八日には雨を冒して滁州に至つて次つた。西澗は其の城西に在つて、俗に馬土河と謂つてゐる。唐の韋應物は、建中三年に滁州に守となつたので、滁州西澗の詩がある。曰ふ、

獨憐幽草澗邊生。上有黃鸝深樹鳴。春潮帶雨晚來急。野渡無人舟自橫。

と。漁洋の詩は、此の詩より得來れる所が多い。

西澗蕭蕭數騎過。韋公詩句奈愁何。黃鸝喚客。且須住。野渡菴前風雨多。(自註)澗上有野渡菴。取韋詩命名。

(字解)韋公詩句は題意の下に擧げた句である。黃鸝は黃鳥ともいひ、又倉庚ともいふ。和名はうぐひす。普通鶯の字を當てる。此の黃鸝の一句は、韋應物の詩の第二句、上有黃鸝深樹鳴より來てゐる。野渡菴は自註にある如く、澗上に在る菴で、韋詩の、野渡無人舟自橫から取つて名づけたものである。

(意義)滁州の西澗をば、今蕭々として數騎で過ぎるが、韋公の詩句を思ひ出して、端なくも愁の生ずるを奈何にしよう。鶯が客を喚んでゐるからまづ暫くは住まるべきである。野渡菴の前は雨風が多いことであるから。

(評說)韋應物の詩について、趙澗泉は云ふ(幽草にして澗邊に生ずるのは、

君子が野に在つて、考槃が澗に在るのである。黄鸝にして深樹に鳴くのは、小人が位に在つて、巧言の流るゝが如きのである。潮水は本と急である。春潮が雨を帶んだのであるから、其の急なることは知るべく、國家の患難が多いのである。晩來急なのは、乃ち危國亂朝、季世末俗で、日色が已に晩れて、復た光明ならざるが如きのである。野渡無人舟自横といふは、寛闊の野、寂寞の濱には、必ずや濟世の才の、孤舟が野渡に横はつた樣な者も有らうに、特に君相が用ふること能はざるのみである」といつてゐる。今此の解釋によつて、漁洋の詩の第二句、韋公詩句奈愁何を釋いたならば直ちに明瞭する樣に思はれるが、併し此くの如く妄りに穿鑿をして詩を解したならば、詩は理窟三昧になつて仕舞つて、沒趣味と成り了るものである。漁洋は其の著萬首絶句選の凡例に於て云ふ「此を以て詩を說いたならば、何うして復た風雅といふことがあらうや。余は此の選を爲つて、趙氏の爲に、膚陋の見を一洗する」といつてゐる。

尙一言する。此の詩は漁洋得意の作で、漁洋詩話にも載せてゐる。蓋し野渡菴といふ名が面白い所から著想して、此の好絶句を構成したのである。

清流關

(題意)清流關といふは、安徽滁縣の西南の清流山の上に在る關所の名である。南唐の時に始めて置いたもので、諸山の缺け口に當つてゐて、江淮の衝途を扼してゐる。後周の趙匡胤は、南唐を襲うて、李景の兵十五萬を、此で打破つた事がある。甚だしく險しくはないが、松や烏桕が蔚然としてゐる。漁洋は五月二十九日雨中に此處を過ぎた。

瀟瀟寒雨渡清流、苦竹雲陰特地愁。回首南唐風景盡、青山無數繞滁州。

(字解)苦竹は和名をまだけといふ。常の竹のことで、高さ六七丈、周り一尺五六寸に及ぶ。他の竹よりも後れて筍を生じ、大きくて、箨に紫の斑がある。箨いから湯がいて食ふ。特地は故也と註し、ことさらに、わざと等と訓する。南唐は五代の時の國の名で、詳しくは卷上二葉表南唐宮詞の處で說いておいた。滁州は唐の時始めて置かれたので、清に至り直隸州として安徽に屬せしめ、民國では改めて滁縣として、安徽淮泗道に屬させた。地が滁水の陽に當つてゐて、山は高く水は清くて、江淮の間の勝地である。宋の歐陽修は嘗て是の州に知となつて、日に僚屬と諸山に宴遊し、詩文を以て自ら娛しんだ。其の醉翁亭記に「滁を環つて皆山である」といふは、此の結句の、青山無數繞滁州と同じ意である。

(意義)しと〳〵と寂しい雨の中に、清流關を過ぎた。苦竹の雲の如くなれる陰を行きては、殊更に愁が生じてくる。首を回して眺むれば、南唐當時の豪奢なりし風景は盡きて仕舞つて、たゞ無數の青山のみが、昔ながら

に滁州を繞つてゐる。

(評說)此の詩も亦漁洋詩話に載せられてゐて、漁洋得意の作である。尙此の詩、滁州の字を用ひて極めて妙である。詩中に地名を用ふることは、十分の注意を要することであつて、輕々に用ふべきでは無い。此の事、漁洋詩話中に詳しく述べられてゐるから、因に此に引いて置かう。曰く「陳伯璣が、常て余に語つた事がある。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船といふは妙である。けれどもまた詩と地とが肖てゐるからなのだ。若し、南城門外報恩寺と云つたならば、豈に笑ふべきでなからうやと。余曰く、固より其の通りである。卽ち、滿天梅雨是蘇州。流將春夢過杭州。白日澹幽州。風聲壯岳州。黃雲畫角見并州。淡煙喬木隔綿州のごときも、皆詩と地とが相肖てゐる。白日澹蘇州。流將春夢過幽州と云はせたならば、絕倒に堪へざらうや」といつゐる。我が東發は其の著鉏雨亭隨筆に、此の語を引いて更に云ふ「按ずるに柳宗元の登柳州峨山詩に云ふ、荒山秋日午。獨上意悠悠。如

何望鄉處。西北是融州。王阮亭の清流關に題する詩に云ふ。瀟瀟寒雨云々。又寄陳伯璣詩に云ふ、東風作意吹楊柳。綠到蕪城第幾橋。此も亦詩地が相肖てゐる。于忠肅の詩に云ふ、

楊柳陰濃水鳥啼。豆花初發麥苗齊。相逢盡道今年好。四月平陽米價低。

平陽の字面、極めて好く、易へる事が出來ない。吾が邦で稱して大家と曰ふ人も、此の意を解する者は頗る少い」と。詩を作る者は、能く是等の語を熟讀翫味して、工夫する所が無くてはならぬ。

嶧山即事

(題意)嶧山はエキザンと讀む。卽ち鄒山のことで、亦鄒嶧山と曰ひ、又鄒嶧山と曰ふ。山東鄒縣の東南に在る。水經注に「山の東西が二十里あつて、高く秀で獨り出でゝ、積れる石が相臨み、殆んど土壤がない。石には孔穴が多くて、洞達して相通じてゐる。秦の始皇は、嶧山に上つて、石に刻んで秦の德を頌めた」とある。鄒山と嶧山との二つに分けてゐるものがあるが誤である。卽事とは、すぐ前に現れてゐる事や物に就いて詠じたのである。北歸志の六月初十日の條下に「滕縣より北して、林の木の中を行くこと四十里。綠陰は帟幕の如く、石流は活々としてをり、涼風は灑然としてゐる。午後、驟雨がして來たから、嶧山の下の田家に避け、雨が止んでから、屢々怒れる流を徒渉りして濟り、鄒縣に次つた」とある。

雨足煙村事不閒。家家驅犢出柴關。棗花香徧濃陰合。水碧沙明望嶧山。

(字解)犢は子牛、棗花の棗は音がサウで和名なつめである。夏の初めに至つて始めて芽を出すから、夏芽といふ。亞喬木で、葉は互生し、尖つて光がある。夏の半頃に葉の間に花が咲く。白くて青みがある。實は小さく、楕圓

形をなして、生で食べられる。

(意義)雨が十分に足つたので、煙れる村々は農事が忙がしく、どの家でも何の家でも、小牛を驅つて柴の樞を出て、野良仕事に驅せ廻つてゐる。棗の花の香が徧く香つて來、濃かなる樹陰が込み合つてゐる。水は碧に、沙は明かな邊りより、遙かに嶧山の勝景を望み見ることである。

(評説)會心偶筆に云ふ「雨が足つて耕すに宜しい。故に農事が閒でない。次の句は謂はゆる事の閒ならざるものである。下の二句は、固より是れ眼前の景を寫したのであるが、然も言外には、便ち行役の永久なる歎きと、漸く故郷に近づいた喜びとがある」と。

題沈客子林屋幽居圖

(題意)沈客子は、名を季友といひ、客子は其の字で、南疑と號してゐる。嘉興府の平湖に家し、漁洋の門人で、康熙の副貢生である。著はす所の構

李詩繫は、甄綜して頗る備つてゐる。又、學古堂詩集といふがあるが、毛奇齡が爲めに序を作つて、稱して才子と爲してゐる。此の詩は客子の林屋に幽居してゐる圖に題したもので、原と五首あるが、今一首を拔いて講ずる。康熙二十八年己巳、漁洋五十六歳の作である。漁洋の詩も其の歳と共に次第に老蒼に赴いて、少壯の作の如き妍麗なものが無くなり、此の頃に至つては、益々圓熟して、渾厚の氣を帶ぶるに到つたのである。

五月楊梅血色斑、雲林十里畫圖間。杉皮屋子青苔徑。獨占吳王銷夏灣。

(字解)楊梅は和名をやまももといふ。暖國に多い所の常綠喬木で、葉は細長く沈丁花に似て、粗い鋸齒がある。春、葉の間に黃白色の花を著けるが、長さ六七分あつて松の花に似てゐる。別に實を結ぶが、苺の樣で、大きさ

が三四分あつて圓く、夏の末に至つて熟すれば紫赤色となる。生で食することが出來て甘い。樹皮は藥用にしたり又染料にもする。雲林といふは、地名もあれど、此は雲のかゝれる林と解した方がよい。杉皮屋子は杉皮にて葺いた家屋をいふ。子は助詞で、拂子、笠子、衫子、亭子等と言ひ、殊に俗には實物を指して多く之を用ひる。吳王銷夏灣といふは、江蘇吳縣の西南に在る。卽ち太湖の中の洞庭西山の趾に在つて、吳王闔廬が暑を避けた處だと言ひ傳へられ、湖水の一灣が取り周らしてゐて、寒光が人に逼ると言はれてゐる。

(意義)五月に至れば楊梅の實が熟して、血の如き赤き色が斑に見え、雲の懸れる林の、十里もある處が、畫圖の中に入れられてゐる。杉皮葺の小さき家、其處に到るべき青々した苔の生えた小路、恰も昔吳王が暑を避けた銷夏灣の樣な好い處を、君は唯獨り占領してゐる。

(評說)此の詩は、但だ圖中の景色を詠じてゐるのみで、何等苦心の痕も無い樣であるが、此くの如き境地こそ、容易に到り得ない所なので、實に老練の至りなのである。

再題研山絶句示竹垞

(題意)再とは、此の前に、米海嶽研山歌、爲朱竹垞翰林賦といふ七言古詩を作つてゐて、今復た七言絶句を作るのであるから、再びといつた。研山とは、硯であつて、山の形を具へてゐるから謂つたのである。此の研山といふは、陸放翁の避暑漫鈔に、李後主が常て一研山を買つた。差渡しの長さが纔かに尺に餘る許りで、前に三十六峰が聳えてゐるが、大いさが猶ほ手の指の如く、左右は則ち兩つの陂陀を引いて、中が鑿たれて研となつてゐる。國の破るゝに及び、研山は數十人の家に流轉し、米元章の得る所となつた。後、米が丹陽に歸つたとき、將に宅をトしようと念うた。しかるに蘇仲恭といふ者は、號して好事と稱せられ、其の

有にかゝる甘露寺の下の一の古い屋敷址が、羣木が多くて、蓋し晉唐人の居た所であるから、時に米は宅を得て、蘇は研を得る事となつた。米が號して海嶽菴としたのは是である。といひ、陶宗儀の輟耕錄には「米元章の寶晉齋の研山圖記に云ふ、此の石は南唐の寶石で、久しく吾が齋の研山となつてゐたが、今は道祖に易へ去られて仕舞つた。中美に舊と詩がある。云ふ、

研山不易見。移得小翠峰。潤色裹書几。隱約烟朦朧。巉巖自有古。獨立高崒嵂。安知無雲霞。造化與天通。立壁照春野。當有千丈松。崎嶇浮波瀾。假仰蟠蛟龍。蕭蕭生風雨。儼若山林中。塵夢忽不到。觸目萬慮空。公家富奇石。不許常人同。研山出層碧。崢嶸實天工。淋漓上山泉。滴瀝助毫端。揮成驚世文。主意皆逢原。江南秋色起。風遠洞庭寬。往往入佳趣。揮掃出妙言。願公珍此石。美與衆物肩。何必嵩少隱。可藏爲地仙。

今、此の詩を誦する毎に、必ず此の石を懷ふ。近ごろ余も亦作がある。云ふ、

研山不復見。哦詩徒歎息。唯有玉蟾蜍。向余頻淚滴。

此の石が、一たび渠の手に入つてから、再び見ることが出來なくなつた。毎に交友と同じく往つて觀るも、亦た出して示さない。紹彭公は眞に忍人である。余、今、想を筆にして圖を成したが、彷彿として目に在る樣である。此れより吾が齋の氣の秀でた所は、尤も復び泯びはしない。崇寧元年八月望。米芾書く」といつてある。是等を綜合して見ると、南唐の後主李煜が買つたものであるが、變遷を歷て、後に宋の米芾の手に墮ち、米芾が丹陽に歸つて居をトするときに、此の研山を、其の卜棲の地と、蘇仲恭に易へて遣つて仕舞つたのである。然して漁洋の米海嶽研山歌の自註には「許文穆の故物で、後に朱文恪公に歸した」とある。許文穆は、明の許國、字は維楨といつた人で、嘉禎の進士で、神宗の時に禮部尚書に累官し、東閣學士を兼ねたが、性が木强で、事に遇へば輒ち發

して、大臣の度量が無かつたといふが、能く謹慎して自ら守つてゐたから、累りに攻擊はせられても、汚名を被らす事は出來なかつたと云ふ。卒して文穆と謚せられた。朱文恪は朱竹垞の曾祖父で、名を國祚、字を兆隆といひ、萬曆の進士の第一であつた。修撰を授けられ、諭德に進み、禮部右侍郎に擢でられたが、時に儲位がまだ定まらなかつたので、國祚は數十疏を上つて之を爭つた。後、讒せられて歸ることを乞うたが、光宗が卽位せられて、禮部尙書を拜し、東閣大學士を兼ね、入つて機務に參した。素行が淸愼で、能く大體を持したから、世に長者と稱せられてゐた。卒して文恪と謚せられた。研山は許國から朱國祚に傳はり、竹垞に歸したのである。竹垞、名は彝尊、字は錫鬯、號を竹垞といひ、又醧舫と號し、晩に小長蘆釣魚師と稱した。浙江秀水の人で、名家の子孫である。少き頃から力を古學に肆にし、博く羣書を極め、南北に客遊して、至る所で金石を披覽するを事とした。康熙中に博學鴻詞に擧げられ、

檢討を授けられ、明史を修むるに與つたが、體例は多く其の議に從ふ事になつた。後、入つて內庭に直したが、疾を引いて罷めて歸つた。其の學は考證に長じてゐて、古文に工に、詩は漁洋と南北の兩大家と稱せられた。然し趙執信は談龍錄に於て兩家を對比して「朱は多きを貪り、王は好みを愛する」と云つてゐるが、誠に公論で、能く兩家の闕點を指摘したと謂はねばならぬ。要するに詩を以てすれば、竹垞は漁洋に先だつ事は出來ず、文を以てすれば、漁洋は固より後に瞠若たるを免れぬ。竹垞は又好んで詞を爲つて、陳維崧と與に朱陳と稱せられた。卒した年は八十一であつた。著に曝書亭全集があり、輯に經義考、明詩綜、詞綜、日下舊聞等がある、

南唐寶石劫灰餘。長與幽人伴著書。靑峭數峯無恙在。不須淚滴玉蟾蜍。（自註）元章詩。研山不可見。哦詩徒歎息。惟有玉蟾蜍。向予頻淚滴。靑

峭數峰。南唐元宗語。

(字解)南唐のことは上卷二葉表南唐宮詞の條下で詳說しておいた。刼灰とは、佛經で、天地が一たび成つて一たび敗るゝ迄を一刼といひ、世界の盡くるときには刼火で洞燒せられて灰になつて仕舞ふと云ふ。與はためにと訓し、爲と同じ意である。青峭數峯は、自註に「南唐の元宗の語だ」とある如くであるが、之を詳說すれば、陸游の南唐書に「元宗が江北を失つて、豫章に遷るときに、龍舟が趙屯といふ所に駐つた。元宗は首を擧げて皖公山を望んで曰はるゝには、好青峭數峰は、知らず何といふ名であるかと。李家明といふ優人が對へて曰ふ、此は舒州の皖公山でありますと。因て詩を獻じて曰ふ、皖公山總好。不落御鑣中と。元宗歎息して、酒を罷めて去られた」とある。不須はもちひずと訓む。不用と同じ意である。玉蟾蜍は蟾蜍の樣な形をした玉の硯である。蟾蜍はセンジョと讀む。蟾蜍は蛙の大なるものと註せられてゐる。然らば蝦蟇の樣なものかといふに、蝦蟇は蟾蜍に似て小さいと註せられてゐるから、蟾蜍は蝦蟇よりも更に大きなものである。自註に米元章の詩が引かれてゐるが、是は題意の下で述べた通りである。今其の大意を言へば、研山をば、海嶽菴の地と易へて仕舞つたので、再び見ることが出來なくなつて、歎息の外はない。惟だ座右の蟾蜍硯が、獨り余の哀しい情を察して、余に向つて頻りに涙を垂れてゐるといふのである。

(意義)南唐の寶石といふべき研山は、幾度か世の災阨を經たる餘りに、幸にも傳はつて來て、長く幽人の爲に、書を著はすに伴ふ事となつた。研山の中なる青峭數峯が、此に恙なく在ることであるから、玉蟾蜍硯も、余に向つて涙を滴らす樣な事はせずとも可い。

(評說)漁洋の香祖筆記に「南唐の李主の研山をば、予は戊辰の春に、朱文恪の曾孫の檢討彝尊の京の邸に從うて之を見たが、眞に奇しい物である。檢討は予の詩を賦することを請うたから、既に爲に長句を作り、又一絶

を題した。云々。後二年、復び京師に入れば、研山は又、崑山の徐司寇に購ひ去られてゐた。今は又十五年を經たから、尚ほ徐氏に藏せられてゐるか、どうか分らぬ」とある。然るに翁覃溪の之に對して謂つた言葉が、粟香隨筆の中に載つてゐる。曰く「此の研山は、予が齋に在つて、借りて看てゐたこと半月有餘であつた。予も亦、研山歌を作り、併せて研山考を作つた。そうして此の研山は、竝に米老が蘇仲恭に與へて海嶽菴に易へた所の研山ではない事を知つた。朱竹垞先生は自ら此の研山を藏してをり、又考据に精しいのに、而るに竟に誤つて海嶽菴に易へた研山としたのは、なぜであらうか。漁洋先生は甚だ考核の學を講ぜられぬから、其の香祖筆記を撰したのと、其の門人の精華錄を注した者とが、皆誤つてゐる所以である。云々」と云つてゐる。之に因て想ひ起すは宋長白の柳亭詩話の中に載つてゐる蟾蜍硯の一項である。曰く「宛陵集に云ふ。劉涇州が手に入れた所の、李士衡觀察の家の蟾蜍硯の其の下に刻して、天寶八年冬、端州刺史李元、靈卯石を得て造ると云つてあるものをば、劉原甫に示した所が、原甫が辨じて云ふ、天寶は載と稱した。此は年と稱してあるから僞であると。遂に詩を作つた。予は方に酒を飲んでゐたから、因て江隣幾などの諸君と之に和した。其の詩の末に曰く、仰天大笑飲君酒、硯眞硯僞休開口。願封漆匣還與侯。請與江翁獨持守。と。米海嶽の研山の如きも、亦何ぞ覃溪の如く其の眞僞を考證する必要があらうや。因て茲に之を摘錄しておく。

嘉陵江上憶家

（題意）康熙三十五年丙子、漁洋六十三歲の時、西嶽西鎭江瀆に祭告する の命が下つて、再び秦蜀長途の旅に上ることゝなつた。二月初三日に京師を出發して、行き〳〵て四月十七日、四川の境に入り嘉陵驛にさしかゝつた。驛は嘉陵江畔に在る。嘉陵江は其の源を陝西鳳縣嘉陵谷

に發し、西南に流れて甘肅を經、四川に入り、右に渠江を合せ、左に涪江を合せ、巴縣に入つて江に入る。嘉陵驛は前回入蜀の時の詩で說いた所の廣元の西二里に在る。此の驛に附ては、前の悼亡の詩二十六首の中にも、

病中送我向南秦。感逝傷離涕淚新。長憶啼猿斷腸處。嘉陵江驛雨如塵。

と詠じてある所である。今再び此の地を過ぎ、端なくも當年の事に想ひ到つては、如何でか暗涙の衣を沾すものが無からうや。

自入秦關歲月遲。棧雲隴樹苦相思。嘉陵驛路三千里。處處春山叫畫眉。

(字解)秦關。秦は虞舜の臣伯益の後で、甘肅の秦州に居たが、春秋の時に、今の陝西省を奄有し、咸陽に都したから、今も陝西を秦といふ。而して其の地、東に函谷關あり、南に武關あり、西に散關あり、北に蕭關があるから、

關中と稱せられ、又秦關ともいはれてゐる。棧雲隴樹は、棧道の雲、隴山の樹で、棧道は蜀に入る道、陝西の鳳城の東北から、褒城の北に達してゐる。險絶の處に、山に傍うて木を架して、道を通じてある。隴山は關中の西端の隴縣に在つて、甘肅の清水縣に跨り、山が高くて長く、隴縣、靜寧、鎮原、清水の境に亘つてゐて、關中四塞といはるゝ中の、西面の險地である。苦は勤勞也と註し、はなはだ、ねんごろと訓す。畫眉は又虎鶫といひ、和名をぬえじなひとかどらつぐみといふ。和刻の秘傳花鏡にほほじろと訓してゐるは誤で、頰白は漢名黃道眉である。畫眉は南方に多く、狀が山雀に似て大きく、毛色は蒼黃色で、兩頰に白い毛があつて、眉の樣であるから此の名がある。善く鳴き、善く鬪ふ。其の聲が悠揚婉轉で、甚だ人の聽くによろしい。雌は鳴かず鬪はないから、取る所がない。人が多く雄を廊下の簷の下に畜ひ、高い籠に入れ、籠の內に水と餌の罐を繫けておく。南天竹の幹一本を使つて止り木としておくと、冬になつても足が冷えない。每日

雞卵の黄身に米をふりかけ、それに少し許の細かい沙を混ぜて食はせると、時ならず鳴く。卽ち畫眉は鶪（ヲウゲン）の一種であるからで、鶪といふは、夏至より後は口を噤みて鳴かぬからの名である。氣候が暑くなれば、籠を水盤の中に浸してやつて、自ら水浴をさせると、羽毛が更に鮮かで、又、死ぬ樣な事もない。秋の暮に至れば、各戸の鳥を聚め、場を開いて鬪はせて、勝負をさせるが亦一つの壯觀である。畫眉を相するに、古くから亦秘訣がある。云ふ、身似胡蘆（フクベ）尾似琴。頸如削竹嘴如釘。再添一對牛筋脚。一籠打盡九籠贏。と。以上は花鏡の本文に據つたのであるが、之を以てしても亦頗白で無い事が明かである。

（意義）秦關に入つてから、既に多くの月日が經つた。棧道の雲、隴山の樹に隔てられて、甚だしくも故郷の事を相思ふ。嘉陵驛の路、三千里もある處を、遙々と過ぎ行けば、到る處の春山に、虎鶪の聲が聞えて、一入遠人の歸思を亂さしめる事である。

（評說）意義の欄に述ぶる所と、稍々重複の嫌はあるが、會心偶筆に記す所を茲に掲げよう。「歲月遲は、歸るを思ふの切なるにより、倍々其の遲きを覺えるのである。棧雲隴樹の句は、又、自入秦關の句から、細々寫して來たのである。雲は一雲でなく、樹は一樹でなく、日は一日でなく、月は一月でなく、恍として年の一年のみでないやうで、想思の情は棧隴と與に遙かに、卽ち雲樹と與にして俱に盛んに、且つ歲月と與にして俱に積つた。苦しみの又苦しみと謂ひつべきである。此の嘉陵驛路三千里中の畫眉鳥の聲が、又、復た、處々に人の歸思を撩すを奈んとも仕樣がない」と。

郎當驛雨中

（題意）漁洋は四月十八日、廣元縣に午食し、昭化縣に宿して、夫より先は前回に水路を取りて閬中に至りしとは旅程を變へ、陸路劍閣の險を越え、劍州、武連等に宿して、二十二日雨中郎當驛を過ぎた。是、明皇が蜀